論　説

危機のフランス人民戦線政治史（抜粋）

平　田　好　成

Allons, enfins de la patrie,
Le jour de gloire est arrivé!
Contre nous de la tyrannie
L'étengard sanglant est levé! (bis)
Entendez-vous dans les campagnes
Mugir ces féroces soldats?
Ils viennent jusque dans nos bras
Egorger nos fils, nos compagnes.
Refrain
Aux armes, citoyens, formez vos bataillons!
Marchons! Marchons!
Qu'un sang impur abreuve nos sillons!

LA MARSEILLAISE

フランス現代政治史は、二〇世紀の中で、（一九）三六年のフランスの人民戦線、四四年のフランスの『解放（リベラシオン）』及び八一年のフランスの左翼の勝利（ミッテラン大統領の勝利）の三つの重要な曲がり角である。[一] 第一の主題は、人民戦線を構成する。拙著は、『フランス人民戦線論史序説』[二] である。八四年から、各種の文書は、五〇年振りで公表された[三]（国家・県・市町村文書等々）。一八年間、二、一三二種の内外の文献は、発表されている。今後、改めて、危機のフランス人民戦線政治史の骨子は、最新の史資料に依拠している（抜粋）。

一　ためらい勝ちの年月

三〇年代は、正に資本主義的体制の最大の危機であった。三〇年代は、陰気な変化であった。

二九年一〇月から、世界のあらゆる資本主義国は、それまでの周期的な過剰生産恐慌に比べ、最大の、最も深刻な世界経済恐慌に見舞われた。世界の歴史は、激動と激変とが予想される三〇年代に突入して行った。大恐慌相場では、回復したのが、五四年三月一日、実に二四年半を費やしていた[四]（株暴落の歴史『朝日新聞』八七年）。

唯一の国、フランスの恐慌は、三一年九月、襲った[五]。工業生産は、二九年に一二一の指数から、三二年に九〇の指数まで移った。農業の購買力は、二九年に一〇〇から、三二年に八七まで、三四年に七七まで移った。労働者階級の購買力は、三〇年と三五年の間、一五％から一七％まで低くなった。人々は、三五年に、約四二万五、〇〇〇人の完全失業者層を調査した。三一年と三六年の間、外国人労働者層等の数は、二八九万一、〇〇〇人から二二二万七、一三一人まで移った（約六五万四、〇〇〇人の減少）。フランスの完全失業者層は、三五年に、約一一〇万人であった。それは、失業が、最初に襲う、女性層であった。男性と女性の賃金の隔たりは、三一年から重大化した。全体の統計表は、欠けていた[六]。

経営者は、投資するように危険を冒すことに同意しなかった。解雇と部分失業、労働諸条件の悪化等は、この政策の骨

組を表した。三二年から、それは、相次ぐ、急進党諸内閣であった。急進党員層は、保護主義的政策を実施した。官公吏層の給与の減少。急進党員層は、三二年に、失業者層に対して、救助を延期した。経営者は、苛立った。[七]

急進党は、人生の岐路であったし、党の絶頂期であった（三二年、下院に一六〇議席、上院に八九議席）。[八] 労働者層の百分率は、減らされた。教員層の重みは、弱いままであった（国会議員グループ、二九―三九年、一〇％）。農民層の地位は、貧弱であった（一〇％）。経営者層（一〇％）。管理者層とサラリーマン層（四％）と官公吏層（九％）。ジャーナリスト層（六、二％）。医者層と薬剤師層（一二、九％）。弁護士層と法律家層（二九、三％）。商人層、貿易商層と職人層（四、五％）。[九]

恐慌と国会の無能は、スキャンダルの増大の前から、強権的な解決法の企てを育んだ。極右諸組織は、発展した。諸団体は、目立つ相違を呈示した。モーラスの影響の下で、一九〇〇年から、君主主義に改宗させられた、アクシオン＝フランセーズ（A＝F）は、知的エリートの分派の不安と調和して見出されたし、王政主義的よりもっと君主主義的であった、人物によりもっと制度に執着された（A＝F紙）。特に、王党派闘士団（カムロ＝デュ＝ロワ）が、存在した。新聞を売る青年層は、A＝Fの行動主義者たちの全体を再編成した。三四年に加入者の七万人（パリ地方で七、〇〇〇人）。新聞は、一〇万部で印刷した。三〇年代の初めの中で、それは、極右諸組織の最も存在した、A＝Fであった。別の行動主義の組織、愛国青年団は、二四年に創設された（テタンジェ）。政党よりもっと大衆的民兵、青年団は、拘束のない行動主義の基礎について募集した。二九年に定員数の三〇万人、三四年に二四万人。三〇年代の初めから、青年団は、衰弱中の動きであった。フランシスト団は、A＝Fの分裂から歴史的に生まれた（ブュカール）。同団は、愛国主義と社会主義への開始の伝統を保持した。愛国主義と民族主義は、ファシスト国際主義のため消えた。ムッソリーニによって出資された、フランシスト紙。定員数は、一万人の加入者に達しなかった。三四年に、連帯団の動きは、出現した（ルノー）。ファシストの、外国人嫌いの及び反ユダヤ主義の、この動きは、反労働者の奇襲を専門にした、及びルンペンプロレタリアートの中で奉公人層を募集した。定員数は、同団の定員数より劣って留まった。ドゥ＝ラ＝ロック大佐が、活気付けた、火の十字架団の動きは、二八年に、

制限された目標で創設された。戦災で勲章を受けた在郷軍人層を再編成したこと。ラ＝ロックの主宰ではなく、動きの政治化は、始まった。二九年から、同団は、団の敵たちを指定した。三一年から、動きは、団の飛躍を選んだ。動きは、三二年の初めに、二万四、〇〇〇人の及び三三年に六万人の加入者を再編成した。三三年一〇月一日、国民義勇兵団は、創設された。同団は、最も大量な、最も規則正しい極右組織となった。彼は、軍事的な階統制及び服従の崇拝を転換した。彼は、非合法の突撃隊、数十万人の待命中の軍人層を配置した。同団の綱領は、ぼんやりしたままであった。政府の強化及び議会の全権の削減、資本対労働の結合及びスト権の制限。綱領の募集は、もっと大きくなったし、もっと家庭的になった。(一〇)

もし労働者階級が、諸団体の現実に対して敏感ではなかったならば、それは、田舎において感じさせた、右翼に対して現実の圧力であった。二つの制度は、農民の世界を分け合った（フランス農民協会、農業奨励全国協会）。二つの制度の麻痺状態は、明白になった。農民労働組合全国同盟の創設は、この麻痺状態に答えた。それは、状況を触発した、ドルジェールであった。彼は、二九年から、最初の農民防衛委員会を作り出した。三〇年四月二二日、社会保険について法が、採択された時、彼は、ボイコットを組織するよう試みた。デモは、彼の人気を急増した。恐慌に対する直接行動の諸方法は、ドルジェール主義の飛躍を説明した。同主義は、田舎で、フランス風のファシズムの最大限の特徴を近付いた。同主義は、入り乱れて小作人層、分益小作人層と農業労働者層を引き起こして、民衆的運動であった。三三年初めから、彼は、栽培する耕作者層の動きを壊すのに達した。彼の影響力は、ブルターニュに重要であった。集会、デモと反デモは、増大する聴衆で相次いだ。(一一)

経済恐慌は、労働者の闘争心を刺激を与えなかった。人々は、長いスト、警察と対峙、失業者層の組織及び飢餓行進のように新しい現象を注目できた。要求の活動は、貧弱のままであった。ストの数は、停滞したし、失われた仕事の数は、減少した。紛争の平均の持続時間は、三五年にとって短った。労働運動の大きな諸組織は、分裂された。労働総同盟は、

国家について圧力集団のように働いたし、団体契約の政策を発展させた。恐慌と経営者の態度は、その結果、団体契約で少なく存在した。定員数は、衰えた。労働者層は、三四年に、工業部門の加入者層の四分の一を代表してなかった。統一労働総同盟は、労働者の抵抗が、発展したように宣言した。紛争は、失敗で終わった。定員数は、見る間に減って行った。統一の及び再統一の問題は、提起された。労組の対立は、完全な制度で機能を果たした。[二二]

フランス共産党の状況は、この時期に、破局的になった（セクト主義と超極左主義）。定員数は、見る間に減って行った。党は、三三年に二万八、〇〇〇人の外には、加入者はいなかった（二〇年に一三万五、〇〇〇人）。党の選挙の諸結果は、落ちた。三二年に七九万四、八八三票（有効投票の八、四％）。党は、三二年に一二人の代議士を持っていた。党の設立の直後から、党は、追放と辞職の相次ぐ波をよく知っていた。それは、重要人物たちだけではなかった。ボリシェヴィキ化の企てに横切って、党の辞職は、党員数の低下が、党を指示するよりもっと多数に現れた。三〇年に、中間の指導者層の半分以上（地区（レーヨン）指導部）は、六年以下の党を経験した。企業細胞の百分率の進行は、急速に減少した。党の中で、労働者層の割合は、無視してよいどころではなかった。民間部門の労働者層の三八、二八％。この現象は、装置の中で敏感であった。二六年から、政治局（九名）のメンバーの五三％と中央委員会のメンバーの六三％は、労働者層であった。パリ地方の中で、三五年に、党の市会議員たちは、労働者層の六四％のものであった。農民の中で、党は、不安定な影響を自由にした。教師層にあって、党は、統一労働総同盟に加入された統一連盟の内部に、少数派を代表した。党は、在郷軍人共和連盟を建設するのに成功した。同共和連盟は、重きをなさなかったし、この小さな成功は、知識人層のある数の調停に帰すべきであった。党は、ある数の旅の道連れたちを引き付けた。党は、生来の欠陥で苦痛を覚えた。党は、党指導部の諸問題を解決するのに成功しなかった。中央委員会の再建の百分率は、重要であったし、それは、もっと悪かった。書記長のポスト（フロサール、セリエ、トラァン、セマール、バルベ）。三二年に、それは、トレーズの選出であった。三つの問題は、党に重きをなした。第一の問題は、コミンテルンについて党の全面的な従属であった。主な問題は、指導部が、コミンテ

ルンのジグザグ型を適用した、規律正しいやり方ではなかった。三二年に、友人クレマン、フリートは、到着した。二つの別の問題は、この状況の結果であった。二七年から、党は、コミンテルンの第三期の政策を適用した。コミンテルンは、社会ファシストのように社会党によって具体化された。(一三) この戦術から生じた、行動統一の欠如は、労働者の選挙民の全分派の統一された熱望を押し潰した。党は、社会的状況と危機の反響の誤った分析をした。この分析は、間違いであった。労働者の闘争心は、高くないレヴェルに留まった。言葉の人工的な党活動の急進化は、不安定の立場に倒れそうになった。(一四)

共産党の衰弱と党の内部の諸問題は、フランス社会党を考慮して利用した。社会党の加入者層は、三〇年に、一二万五、五六三人になった。社会党は、労働者諸闘争について大きな無関心を示した。多数の基本要素は、社会党を、議会政党として具体化するのに到らしめた。社会党は、国政選挙の中で、全国的キャンペーンの唯一の好機を目撃した。右派の流れは、内閣の参加の問題を防衛した。社会党戦い派は、二七年から、現れた。戦い派は、ゲード主義の基礎の系統であった。党の政綱は、マルクス主義と称した、階級的協力に反対した。分極化は、ブルムを孤立させた。討論の進展は、党を二つのブロックに分けた（二九年、内閣の参加に反対した一、五九〇票、賛成した一、四三一票）。ブルムは、権力の獲得と権力の行使の間に、区別を紹介した。権力の獲得は、革命的行為であった。それは、政治権力の全面的奪取であった。権力の行使は、議会民主主義の規則の受諾から生じたし、資本主義的制度の枠内で、位置付けられるはずであった。幻惑と不安で、デアは、ナチズムの上昇を眺めた。デアら（新社会党員層）は、三三年に、追放されたし、仏国社会党を創設した。社会党の定員数は、二倍にした。選挙的に、社会党は、左翼の第一の党になったし、三二年に、社会党は、優れた得票結果を手に入れた。選挙民は、共産党のため、パリ地方の工業化された郊外の中で減少したのに、社会党の選挙民は、急進党の犠牲を払って、フランスの南部の農業地帯の中で発展した。議会主義の優越性に加えて、党の諸同盟の性格は、社会党に重きをなした。急進党員層と同盟は、選挙の諸時期の外には実践的表現で見付けることはできなかった。労働者諸闘争の影響力は、共産党員層の混雑と競争を受け入れるよう含んだ。三三年から、諸事件は、問題が、迂回させることがで

きなかったことを、証明するように引き受けられた。(一五)

農業労働者層の労組化は、労働総同盟、統一労働総同盟に対して、貧弱のままであったし、諸闘争は、南部の農業人口、三二年、三四年に、パリ地方の農業人口によって、脈絡のないままであった。二九年から、共産党は、ロシェであったし、労働者農民総同盟を作り出した。三三年に、社会党は、農民全国同盟の設立の主導権のものであった。同盟は、地方諸協会を再編成した。同盟は、僅かに発展した。(一六)

二　人民戦線の誕生

この背景の中で、スタヴィスキー事件は、突然起こった。スタヴィスキーは、司法上の責任の追及を免れたのに成功した。三三年一二月、新しい詐欺は、突然起こった。バイヨンヌの公営質屋は、誤った預金証書の二〇億フラン以上のため発行した。彼は、逃げ出した。警察は、二月九日、彼を捕まえた。彼は、自殺した。スキャンダルは、右翼の新聞によって大々的に行われた。急進党の名士たち（ダリミエら）は、危くされる。一月二七日、ショータンは、辞職した。一月三一日、ダラディエは、新しい内閣を形成した。彼は、公認のため、社会党の支持を必要とした。彼は、キアップを免職しながら、その支持を手に入れた。それは、極右諸団体が、期待した機会であった。一月初めから、街頭デモは、繰り返した。それは、デモを活気付けた、A＝Fであった。激しい動きは、パリで、右翼の在郷軍人層の側で存在した。キアップの免職は、極右諸組織が、二月六日、デモをするのを要請した。数時間の間、デモ参加者と警察は、コンコルド広場の周辺にぶつかり合った（一四名の死者、六五五名の負傷者）。暴徒たちは、下院に達しなかった。ラ＝ロック大佐は、彼の軍隊に対して、道を引き返すよう命令を与えた。レモンは、『二月六日は、一揆ではない、暴動すらない、ただ街頭デモである』ように評価した。(一七) 街頭デモは、ある特別の性格を持っていた。実際的な目標は、下院を攻略することであった。一

連の基本要素は、陰謀のテーゼを信用を得させたように認めなかった。極右諸組織の間、事前の調整でなかったように思われた。諸スローガンは、異なっていた。軍隊と暴徒たちの接触は、不確実のように見えた。別の諸組織は、暴力の示威行動を狙った。現実の目標は、達せられた。七日、ダラディエは、辞職した（三四三対二三七票）。それは、ドゥーメルグであったし、彼は、内閣にタルディユー国務大臣として選び取った。極右諸団体は、予測されたデモを取り消した。(一八)

左翼に、強い精神的ショックは、深遠であった。六日の諸デモの知らせで、社会党は、いかなる反撃を予測しなかった。社会党グループは、ダラディエに対して、信任したし、ブルムの主導権に対して、彼を辞職させないよう説得した。セーヌ＝エ＝オワーズ県連盟に対して、ファリネ、セーヌ県連盟に対して、ジロムスキーとピヴェールは、共産党の同地位にある人々を出合うのに要求した。彼らは、ユマニテ紙の本拠に、代表団として赴いた。マルティ、ヴァイヤン＝クテュリエに対して、彼らは、二月八日、翌々日大デモの共同組織を提案した。応待は、控え目であった。共産党の答は、消極的であった。共産党の本文は、社会党について侮辱を増やしたし、九日、党の固有のデモを要請した。共産党は、共和国防衛の中で、資本主義制度を防衛するように意図を検討した。それは、党を、極右に対して、パリの下層階級及び在郷軍人層を争うための唯一の手段に見えた。党は、統一への熱望が、増加したように理解した。政治局の内部で、ドリオとフェラは、別の政策の不可避性を防衛した。三四年一月の中央委員会で、ドリオは、反ファシズム政策のため、及び社会党指導者たちと行動統一の企てを推進するため弁護した。上部組織で統一戦線によって、下部組織を取って代ることが、問題とならなかった。彼の諸提案は、拒否された。決議は、全員一致で可決されなかった。六日の午前、ユマニテ紙は、工場で、工事場で、駅の中で、デモをせよ！という見出しを付けた。ファシスト一味に、政府に、及び社会民主主義に反対して、デモをすることが、問題となった。六日夕方、議会で、ドリオらは、トレーズを統一された反撃を要請するよう試みた。無駄であった。七日、ユマニテ紙は、労働者のパリは、反撃したという宣言したし、ダラディエ政府を人殺しの政府で取り扱かった。政治局は、八日、デモをするように、社会党のパリ諸連盟の提案に拒否回答をした。最初の割れ目は、

現れた。共産党が、九日、デモをするのを要請した時、ドリオは、行列の先頭にいた。警察で、衝突は、激しかった。人々は、九人の死者を数えた。(一九)

労働総同盟は、二月一二日のため、デモでゼネストを要請するよう決定した。共産党でない左翼組織の大部分は、このアピールに加わった。フォールは、控え目なものであった。共産党は、二月一〇日からストを、一一日からデモを要請した。統一労働総同盟は、同様になされた。地方に、激しい街頭デモは、始まった。地方の大都市の大部分の中で、ストに、一二日のデモに、統一されたアピールは、ユマニテ紙が、一一日、公表した、アピールに先行した。一〇日、知識人層は、行動統一へのアピールを公表した。共産党の政治局の発展の中に重きをなすことは、言うまでもなかった。ストは、大量であった（パリ地方の中で、書籍で一〇〇％、郵便局で九〇％、教員層と冶金で八〇％等）。ゼネストの鍵＝停止は、パリ地方の交通機関の中で、全面的であった。地方に、失策があった。闘争心は、多数のやり方で、表現された。労組は、仕事を止めるため、四〇〇万人以上であった。二月一二日、パリでデモに対して、成功。地方に、集会とデモは、三四六の都市の中で、展開された。(二〇)

二月一二日、数週間の中で、統一された構造は、配置されるよう試みた。アムステルダム＝プレイエル（A＝P）運動は、二月一九日、統一された主導権の調整の場所にあるよう提案した。社会党、労働総同盟は、この提案に答えなかった。二月二一日、総同盟は、労働の三部会を召集した。総同盟指導部は、ドゥ＝マンのテーゼ及び計画経済論者の思想によって、興味を抱かれた。労働の三部会は、計画経済を具体化するよう機会があるはずであった。反ファシズム知識人監視委員会を発するような主導権は、困難な始動をよく知っていた。考えは、国民教育相（ジェローム）と教師労組の指導者たちの間、会談を出現した。主導権の急速な成功は、労組の関係を改善したと同様に、ストとデモの統一された成功は、社共両党の間、関係を変えるのに足りなかった。社会党で、党指導部は、二月二一日、ピヴェールとジロムスキーによって提案されたアピールを拒絶した。彼らは、統一諸委員会を推進した。反ファシズム諸委員会は、地方に現れた。五月で、

トゥールーズで、社会党第三一回大会が、到着した時、行動統一は、彼らの不安の一部をなすように思われなかった。(二二)

共産党は、二月一二日の統一された括弧を閉じるように思われた。ドリオは、内部の状況を複雑にした。八四対五四票によって、政治局の態度を承認した、討論は、公の地位を大目に見た。五月半ばで、コミンテルンの議決は、弱まった。議決は、ドリオに対して、規律に対する違反を記録した、及び共産党中央委員会を、ドリオに対して、組織の全措置を取るのに許可した。五月二三日、モスクワから戻って、トムーズは、公の集会の中で、ドリオになされた非難を発展させた。(二三)

トレーズは、四月末、モスクワのため出発した。彼の出発の前日、ユマニテ紙の中で、彼の社説は、社会民主主義でブロックに反対してという題が付いた。彼が、五月末、モスクワから戻った時、ユマニテ紙の彼の論説は、直接の共同行動のためにという見出しを付けられた。五月二三日、六月五日、共産党指導部は、社会党指導部に対して、行動統一の諸提案を送った。社会党指導部が、諸論争の停止によって、党の受諾を条件付けた時、共産党指導部は、拒否した。コミンテルンの新指令は、六月一一日、共産党に送付された。指令は、六月二六日、あらゆる犠牲を払って統一のスローガンを採択した、及び社会党に対して、反ファシズムの行動統一の所定の手続きを踏んで、提案を送付した、共産党イヴリー全国協議会の展開の間、再び明確にされた。社会党指導部の側で、それは、難しい立場であった。六月七日、社会党指導部は、共通のキャンペーンの提案に対して、諸論争が、止めるよう唯一の条件に答えた。最初の会談は、六月一一日、行われた。社会党指導部は、悪口が、共産党新聞紙を開花し続けたよう確認して、一九日、諸交渉の継続を不可能にするよう評価した。社会党左派の圧力は、強まった。六月二五日、セーヌ県連盟は、共産党の連盟の同地位にある人で、行動統一協定を署名した。共産党全国協議会に寄り掛かって、二つの連盟は、七月二日のため、共同集会を召集した。行動統一諸協定は、増えた。リヨン、マルセイユ、ドゥエ……。ブルムは、七月七日、ポピュレール紙の中で、共産党の提案に対して、拒否によって答えるよう評価した。共産党は、全障害物を取り除くよう決定された。七月一四日、会談は、二つの指導部の間に行われた。翌日、社会党全国評議会は、委任の九〇％によって、共同行動の申し出を受け入れた。七月二七日、協定の

署名は、社共両党の中で、行動統一のため、人々の勝利をマークした。ドリオは、翌日、党から除名された。[二三]

クレルモン－フェランで、五月一一日、急進党特別大会は、追放の大会となるはずであった（七人）。二つの主導権は、党の中で集めるため行われた。一つの主導権は、青年トルコ派を呼ぶ人々から出発した（ゼイら）。別の主導権は、若い代議士たちのアピールの形態を取った（マンデース＝フランスら）。二つの主導権は、討論の枠を画いて、集中した。[二四]

三四年一〇月七日、県会議員選挙は、行われた。社共党員層は、進展したし、急進党員層は、後退した。一〇月九日から、トレーズは、人民戦線（フリート）という表現を発したし、急進党大会の前日、ナントで、一〇月二四日、人民戦線の内容を与えた。後天的に、トレーズは、急進党員層に対して、拡大が、行動統一協定の署名の中で萌芽であったように評価した。六月に、共産党員層は、ブルジョワ政党として、急進党の伝統的分析を変えなかった。六月二三日、イヴリー協議会に対するトレーズの報告は、それが、可能なパートナーとして急進党であるよう言及しなかった。コミンテルンの中で、討論は、続けられたし、スターリンの論理は、是非必要であった。もし時間の問題が、西欧民主主義諸国と接近にあったならば、革命的言葉を断念する必要があった。反ファシズムの民主主義的諸連合を可能な右に広げることは、絶対に必要になった。新指令は、共産党に対して、書記局が、労組統一の実現、小ブルジョワの及び農民の諸政党に対する協定の拡大及び両党の組織的統一を理解するため、コミンテルン書記局によって、送られた。トレーズは、新動向に有利であった。彼は、フリートの支えで、掛かり合った。ナントの急進党大会の後、共産党指導部の目標は、変わった。彼は、一一月一日の中央委員会の前、急進党大会によって綱領と同意して意思表示した。プロレタリアートの大衆的諸行動に対して、小ブルジョワジーを獲得することが、問題がなかったし、ブルジョワ政党の地位から中産諸階級の代表者の地位まで移った、急進党の綱領を倣うことが、問題があった。[二五]

共産党によって、急進党員層で念願されなかった同盟を押し付けられた、社会党のヴィジョンは、不正確であった。社会党は、分割されたし、ジロムスキーは、少数派となった。急進党の方への開始は、社共両党の接近が、始動させられた、

勢力範囲の全体を分割した。全ての反資本主義的綱領を放棄することが、反ファシズム者たちの連合の名で、急進党員層の綱領を受け入れることが、問題であったのか。党の反資本主義によって、中産諸階層、更には急進党の分派を結集できる、綱領を念入りで作り上げることが、問題であったのか。(二六)

綱領の問題について、討議は、空転した。一一月二五日、共産党が、討議に提案する、綱領は、諸要求の単なる目録であった。社会党常任執行委員会は、一一月二八日から、綱領を全員一致で答えた。三五年一月九日、同委員会は、ジロムスキーによって念入りで作り上げられた、社会党綱領の草案を承認した。一月一〇日、社共調整委員会は、共同綱領の草案が、実を結ばなかったように銘記した。空しく、多様の経済計画(プラン)の草案は、開花した。社会党の中で、建設的革命派グループの提案が、存在した。三四年五月に、急進党によって採択された、経済計画が、存在した(E＝ロシェ)。労働総同盟は、手直しの後、一〇月に、総同盟の経済計画を公表した。青年急進党員たちは、彼らの固有の経済計画(三四年五月四日)を公表した。大部分のメンバーが、理工科学校―危機に精通した、色々な人を混ざったグループは、七月九日の経済計画を公表した。計画経済論者たちを要求された、全ての人は、現実主義者たちで存在し始めるため自慢した。彼らが、構造的諸改良の不可避性を説明することによって、全ての人を始めたのに、彼らは、改良主義の及び階級的協調の論理の中で、位置付けられた。左から、ブルムは、三四年五月、党の第三一回大会の時、建設的革命派の計画経済論者たちを攻撃した。社共両党という接近の綱領の将来性の欠如は、諸経済計画が、その結果、計画経済論者たちで話題をさせた。(二七)

共産党が、党の統一戦線の政策を盗んだように思われた、左に党の軌道を変えなかった、ドリオ。党は、組織的連合に賛成した。党は、ネオに対して、嘲弄を持っていたし、ドゥーメルグに反対した。対外政策のレヴェルについて、党は、自ら革命的敗北主義の支持者と称した。唯一の道は、社会党への加入の道であった。ブルムは、反対した。『ドリオは、なお自覚しない、ファシストである。しかし、彼は、ファシストの体質、欠陥、方法及び野心である。』ベルジュリの共同戦線について、反ファシズムの接近は、彼の存在理由を獲得するように思われた。三四年九月に、社会戦線の名称の下

に、連合した。[二八]

幸いにも左翼のため、議会の右翼は、政策を定義するのに達しなかった。超議会的右翼は、勢力を回復しつつあった。三五年五月から、ラ＝ロック大佐は、火の十字架団が、フランス連帯団と愛国青年団と同居した、及びA＝Fが、支える、国民戦線を要請した。行動から、大佐は、力一杯に行動を配分した。機械化された縦列、非合法な会見、盲目的服従。[二九]

三五年五月、ラヴァールは、仏ソ協定を署名した。一五日、彼は、ポケットの中に、スターリンの宣言で、モスクワから戻った。ソ同盟は、ヒトラーの膨張主義によって、その孤立から全てを行った。ムッソリーニのイタリアの不可侵条約（三三年九月二日）、合衆国と関係の回復（三三年九月一二日）、国際連盟へのソ連邦の入会（三四年九月）。協定は、新枢軸国によって全政治的勢力を切り分けた。一方では、ドイツ嫌いの人々、親ソヴィエトの人々、全種類の民族主義者たち、反ヒトラー主義者たちは、自分を見出した。他の一方では、平和主義者たち、親ヒトラー主義者たち、反共主義者たち、国民連合の敵たち、革命的敗北主義の支持者たちは、自分を見出した。極右で、ラ＝ロックは、自分を見出した。フランシスト団とA＝Fは、ドイツ好きの側に傾いたのに、ドゥ＝ヴァンデルとメルシエは、ドイツ嫌い（メルシエは、ソヴィエト好き）であった。R－P＝デュシュマンは、平和主義の陣営の中に並んだ。議会的右翼は、分けられた。共和連盟で、レイノーとマンデルは、ソ同盟に有利であった。軍隊、参謀部は、協定に対して、有利であった。大勢の在郷軍人は、平和主義の及び独仏の和解の側で傾いた。ベルジュリとドリオは、平和主義の側で自分を見出した。反ファシズム知識人監視委員会で、相違は、共産党員層が、平和の保障として呈示する、仏ソ協定で重大化した。ヒトラーによってラインランドの再軍備化の時期で（三六年三月）、相違は、公の場所に突然起こった。委員会は、ヒトラーと交渉に賛成した。社会党で、新しい状況は、全流れを分けた。社会党戦い派は、二つのはっきりした一区画に突然起こった。ジロムスキーは、平和主義のため、優しさを持っていなかった。彼は、ファシズムとブルジョワ民主主義の間、性質の相違のため弁護した。彼のため、議事日程である問題は、民主主義の問題であった。社会主義は、ヒトラーが、敗北された時、社会主義に占めるよ

うに時期であった。スターリン主義的戦略について明晰なピヴェールにとって、『戦後のために革命を期待する、人々は、新しい一九一四年に引き起こした。』彼は、再確認した。『資本主義体制で国防ではない。』三五年八月に、ジロムスキーと断絶は、完成された、ピヴェールは、彼の固有な分派を構成するのに準備をした。ルバは、ミュールーズ大会で、ファシスト的暴力に対して、政府への社会党員層の参加を予測する動機を呈示した。共産党の内部に、仏ソ協定とスターリンの宣言は、僅かの渦のような動きを引き起こした。共産党指導部は、『スターリンは、正しい』というポスターを貼らせた。結果は、反軍国主義的仕事と軍隊に反して態度に関しては、直接的であった。ユマニテ紙の中で、兵士の論壇紙等は、廃止された。三六年に、共産主義青年同盟が、公表した、小冊子は、転換点を引き受けた。(三〇)

統一は、ジグザグを経験した。二月一二日、五月一九日（連盟兵の壁）、社共共同デモが、存在した。三月一六日、社会党は、組織的統一のためアピールを発した。最初の集会は、四月一一日、催された（共産党なしで）。社会党は、四月二五日、五月二九日、集会に赴いた。五月の市町村議会議員選挙は、左翼の圧力を確認した。社会党は、進展した。共産党は、その票を倍加した。急進党は、後退した。パリで、五区の中で、リヴェは、選ばれた。人民連合の考え自体は、新しい信頼性であった。A＝P運動は、三五年七月一四日のため、全国的及び統一的連合の考えを発した。それは、七月一四日の連合を要請する、約五〇の組織であった。約二〇万の人々は、連合に参加した。社会主義青年同盟は、反軍国主義的スローガンを明確に発音した。青年同盟指導部は、このデモの前、共産党ばかりではなく、社会党指導部の多数の圧力の対象であった。それは、共産党によって取られた新動向を妨げなかった、七月一四日の集会は、三色のために挙行された。(三一)

三　選挙の勝利

七月一四日のどよめきは、ラヴァールが、一連の緊急政令を発表するよう四散した。それは、真のデフレ政策であった。

ブレストで、ツーロン等で、兵器廠の労働者たちは、ストに入った。一五日、ブレストで、軍隊と憲兵隊は、警備した。衝突は、植民地の歩兵隊と生じた。それは、暴動であった。三日間、対立は、散発的に生じた。不安は、全労働者階級の中で激しかった。人民戦線諸政党の反応は、はっきりしていた。ツーロンで、五分間は、大量のストに、街頭デモに、バリケードに変化した。銃撃戦は、突然起こった。社共両党は、ラヴァール－エリオの政令に反対して、ゼネストの全展望を非難した。(二二)

共産党で、最初のリーダーたちは、追放で倒れた。社会党は、借りがなかった。ノルウェーの国外追放で、トロツキーは、大きな追放の始まりであるよう予言した。彼は、人民戦線が、選び取る、政治的動向に直面して、独立する極が、必要になるよう評価した。最初の点について、彼は、間違わなかった。一一月一九日、社会党全国評議会は、トロツキー主義者たちの追放を確認した。第二の点について、退出は、実行された。トロツキー主義者たちは、分裂された。(二三)

左翼の色々な少数派にとって、時期は、不明瞭であった。革命的左派を構成するように、ピヴェールの議決から進んだ、数か月の中で、接触は、繰り返された。三五年九月二九日、彼は、トロツキー主義者たちと共通の分派を拒否した。一〇月三日、彼は、彼らに政綱の基礎について連合を提案した。トロツキー主義者たちについて、フランス指導者の大部分は、社会党の中で、維持によって試されたし、ピヴェールは、和解の行動を実行する用意ができた。トロツキーは、不屈であった。一〇月一一日、左派は、公式に構成されたし、一一月一九日、トロツキー主義者たちの追放は、確認された。それは、左派の外に、奇妙な分派であった。左派は、僅かに、戦い派に負っていたし、社会党の色々な少数派の連合は、益々反映した。社会党行動派の及び革命的社会党行動委員会の、建設的革命派の、スパルタクス＝グループの先任者たち。平和主義の及びフリーメーソンの影響が、無視できない、分派は、根底から異質であった。分派の存在は、社会党への内部の討論に対して、別の形態を与えた。(二四)

ブュファロ競技場で、三五年七月一四日、提供された、宣誓は、『民主主義を防衛するため、反体制的諸団体を武装解

除する及び解散するため、ファシズムの打撃の外にわれわれの自由を置くため、統一されて留まる」よう約束を含んだ。人々は、「労働者たちに対してパンを、青年に対して仕事を、及び世界に対して人類の大きな平和を与える」よう誓った。七月一四日準備委員会は、維持されるよう決定したし、約五〇の加入を含んだ、委員会は、一〇の組織の書記局を準備をする必要があった。代議制は、一連の政治的均衡を表した。一〇月に、急進党大会が、代表する、中心問題は、重要であった。党の右派、ショータンとロシェは、人民連合について留保を繰り返した。人民連合は、ゼイによって呈示されたし、全員一致で採択された決議の中で、適法及び有益であるよう評価された。二人の青年トルコ派、ゼイとマンデース＝フランスは、全国局で選ばれた、最後の動機は、曖昧であった。いずれにせよ、綱領の問題は、事実であった。(三五)

三四年九月二三日、社共両党は、共同行動政綱を略署名した。両党という対談の成果、その政綱は、人民連合を構成する、組織の多様性を自分が表すように主張できなかった。作品は、着手すべきであった。諸委員会の中で、それは、一方では、社会党員層と、他方では、共産党員層と急進党員層の間、現れる、不一致を象徴する国有化の問題であった。労働総同盟に流行の、三五年九月のその連盟大会に対して、総同盟によって採択された計画経済が、人民連合によって自覚されていなかったことを作られた、計画経済論の諸理論に対して、社会党の代表者たちは、ある数の国有化を提案するため、総同盟の代表者たちと意見が一致した。鉄道の、保険等の国有化が、問題であった。急進党員層は、国有化に反対したし、軍需産業の国有化のみを受け入れた。彼らは、左で増える、共産党員層の応援者を受け取った。国有化の綱領の中で、紹介することは、金融寡頭政治に対して、彼らの権力の一サンチーム、一かけらを取り除けなかった、所謂国有化が、問題であるしない限り、幻想を蒔く（トレーズ）ことであった。この点について、それは、共産党対急進党員層の連合であった。別の綱領の領域の中で、それは、再び現れる、共産党のない左派の連帯であった。平価切り下げの問題は、立ち去る、共産党と統一労働総同盟は、反対した、社会党と労働総同盟は、賛成した、急進党員層は、ためらった。三六年一月一一日、綱領は、略署名され、公表された。綱領は、一〇の組織の共通点であった。社共両党が、署名で終わった、共同政綱

の中で描かれていた、一連の措置は、見出されなかった。四〇時間法で労働時間の削減なしで、公立学校の防衛なしで。不満は、多数であった。労働総同盟の計画経済論者たちは、一貫性のない綱領を判断した。急進党員層は、口うるさいのでためらわなかった。国家の改良と政府の権威の強化について、綱領は、急進党より重大な結果を招いた。革命的左派は、憤慨した。不安は、左派の陣営を通り越した。三六年二月二日と三日、特別大会で、ブルムは、彼が、人民戦線綱領の後ろに、党の下部組織を動員するのに達しないように感じた。この綱領は、もし連合が、多数派になるならば、人民戦線連合が、適用する、綱領であった。連合の下部組織について、第二回投票の立候補取り下げは、実行された。それは、社会党員層が、第一回投票で防衛する、この綱領ではなかった。彼らは、彼らが、大会で、大きな路線を定義するよう及び大会を起草するため、常任執行委員会に委任するよう要求する、彼らの綱領で闘いに進んだ。策略は、演じられた。革命的左派は、ブルムに対して、三三五対三、〇〇六票を集めた。常任執行委員会によって起草された綱領は、社会党指導者たちが、左翼になり得た。(二六)

人民連合の構成は、組織的統一について討議を移行させた。三五年四月二六日、三つ（社会党、共産党、プロレタリア統一党）で、討議が、掛かり合った時から、討議は、敏感に進展したように思われた。一一月に、討議の基礎として、和解―綜合の社会党草案は、予約され得た。共産党は、党の統一憲章草案の中で、多くの含まれた原則が、取り戻されたように、喜んで確認した。一二月一七日、社会党員層は、この本文に対して、デュクロが、呈示する、修正を受け入れた。一八日、共産党は、新しい要求を公式化した。討論の速記録の出版、下部組織において社共共同集会。常任執行委員会は、それに消極的に答えた。一二月二六日、三、四の大都市の中で、情報集会の開催は、受け入れた。討議は、プロレタリアート独裁、イデオロギー的統一及び規律を続けた。三六年一月に、党の第八回大会の後、共産党は、人々が、党の統一憲章草案から出発したし、下部組織での集会の要求を繰り返すよう再び要求した。統一委員会は、集まらなかったし、行動統一の諸問題を取り扱う、調整委員会によって取って代られた。社会党員層は、組織的統一を望んだのか。ジロムスキーとピヴェー

ルに関して、承諾。ブルムとフォールの側で、答は、不確実であった。組織的統一の望みは、答を利用しなかったのか。共産党の側で、討議のリズムの、最後の失敗の説明を探す必要があった。共産党員層にとって、人々は、組織的統一が、別の可能な戦略を表すよう印象を抱いた。人民戦線の構成が、保証されない限り、共産党指導者たちは、火事で二つのアイロンを保持した。彼らの行動の中で、転換点は、人民戦線の内部で、綱領について討議の達成と合致する、党第八回大会の時、位置付けられた。彼らが、左派のブルジョワと小ブルジョワを蘇生させるため、多くの努力を捧げたのに、彼らは、何故、統一党の、プロレタリア的主導権の幽霊を蘇生させるように危険を選んだのか。驚くべきことは、社会党員層が、共産党の働き掛けの中で、現在の諸矛盾を目撃しなかったということであった。一方では、社会党によって主宰された、政府に参加するよう拒否すること、他方では、組織的統一の方へ前進を強制された、進行に続けること。二つの働き掛けは、矛盾していた。(二十七)

統一労働総同盟の提案で、三四年一〇月に始められた、最初の交渉は、三五年一月から転覆した。その理由は、諸労組の独立について、ピアトニツキーの宣言であった。労働総同盟は、統一労働総同盟に対して、この宣言を否認するよう要求した。三月一九日、二つの全国同盟委員会は、最初の討議の失敗を確認した。仏ソ協定の後、統一労働総同盟のみならず、共産党も、突然の方向転換は、表現した。三五年九月二七日、両労働総同盟の大会は、手続きに合意した。総同盟の旧同盟派指導者の一部は、熱狂的ではなかった。下部組織での圧力は、著しかった。諸連盟の諸大会は、連合に賛成したばかりでなく、地方の諸連合（鉄道労働者層）は、繰り返された。二か月以上の遅れで、連合の大会は、トゥールーズで、三月二日から六日まで、開催された。組織の諸問題について、旧同盟派は、勝ち取った。組合の行動の定義に関する、前兆について、それは、妥協であった。旧同盟派は、困った状態にあった。ジュオーは、大会によって、総同盟の計画経済を採択させるように願った。旧統一派は、その計画経済を、人民連合を念入りで作り上げたばかりである、綱領を反対させた。総同盟は、綱領に対して、計画経済を可決させることは、難しかった。人々は、二つの本文を可決した。再統一さ

れた労働総同盟は、前年七五万五、〇六九人の全体に対して、七八万五、七二八人の加入者層（三五年の数字）を数えた。定員数の三分の二を代表する、旧同盟派は、執行委員会で（四三議席について）三三議席を、事務局で八議席について六議席を手に入れた。七つの県同盟は、多数派で、旧統一派であった。旧統一派は、六つの連盟を管理した。[三八]

農業連盟（労働総同盟）の、農業労働者連盟（統一労働総同盟）の連合は、なされた。もし統一された過程が、農業サラリーマン層の間、農民層―分益小作農民層、小作農民層、小所有者層―にあって、展開されたならば、不信は、しつこかった。共産党に結び付けられた、労働者農民総同盟は、三四年一一月から、社会党の農民総同盟に対して、行動統一の諸提案を繰り返した。総同盟は、拒否した。戦術的に、同盟は、組織的連合の前提条件を前面に押し出したし、同盟は、労働総同盟に対して、組合の組織の性格付けを否定したし、共産党と同盟の諸関係を問題視した。諸交渉は、三五年三月一〇日、断たれた。総同盟は、農民の右派諸組織に対して、農民党に、農民戦線に話し掛けた。総同盟は、屈辱的拒否を拭ったし、社会党の不信を強化した。動向の変化は、深遠であった。それは、転換点を知らせる、ロシェの論説であった。共産党は、全国的統一の動向を表すよう試みた。田舎で、その動向は、農民世界の統一の形態を選んだ。指導部は、三六年二月五日、農民党の内部に、分裂によって、その法律上有効にする要求を評価した。諸連盟の一部は、分裂したし、農民社会共和党を作り出した。[三九]

三五年一〇月三日、イタリアは、エチオピアを侵略した。ラヴァールは、国際連盟によって可決された制裁を迂回するよう試みた。ホーア卿と同意して、彼は、イタリアが、色々な経済的利益とエチオピアの一部を受け取ったよう予知する、計画を準備した。右翼は、ラヴァールを支持した。愛国青年団は、パリの壁にポスター等を貼った（『人民戦線、それは戦争である。』）。左翼の組織の全体は、ラヴァールを非難したし、制裁を承認した。エチオピアの事件が、急進党員層を接近するのに貢献することは、明白であった。左翼の流れは、厳しい非難に加わった。全左翼の組織の内で、平和主義の少数派は、制裁に対して表現された。三六年三月七日、ヒトラーは、ラインランド地方を再占領した。右翼の一部は、大喜び

した。ブルム、フォール、ピヴェール、ダラディエ、バッシュは、共産党政治局と同様に、政府の冷静を喜んだ。(四〇)

内部の緊張の増加は、スト参加者の活動から生じなかった。ストの数は、停滞したし、失われた労働の数は、減少した。紛争の平均の持続時間は、三五年度にとって、短った。二つの基本要素は、三六年六月、予示するように思われた。スト参加者たちの数は、四倍にした。ストの百分率は、敏感な増大に、三四年に一六％から三五年に二四％までであった。これらの成功を原型、三六年一月三〇日と二月二一日の間、マルセイユの港を麻痺させた、スト。マルセイユで、状況は、特殊であった。ストに七、〇〇〇人の港湾労働者たちは、二一日の間、四、〇〇〇人の機動憲兵隊に及び火の十字架団が、支える、二、〇〇〇人のスト破りの労働者たちに、先頭を抵抗した。二月二一日、経営者は、譲歩した。浄化された労働総同盟は、港に支配を目指した。緊張は、街頭デモの仲介者によって、極右諸団体の教唆によって現れた、A＝Fは、ラタン地区の外国人嫌いのデモを組織した。三五年一〇月二〇日、人々は、火の十字架団の計画を発見した。九月と一〇月のため、人々は、一四のテロ行為を数えた。地方は、借りがなかった。田舎の中で、極右諸勢力の活動は、激しくした。一二月一〇日、ドルジェールは、一種の農民民兵、緑のシャツ隊を設立した。仕返しの行動と同様に、社共集会に反対して、決死隊の行動は、繰り返した。圧力は、諸団体の解散を要求するため、激しくなされた。圧力は、急進党によって引き継がれた。それは、ラヴァール内閣の内部に、重大な不安を作り出した。一二月五日、青天の霹靂は、左翼諸組織の治安係と同時に極右の全民間の民兵の武装解除を提案する、右翼のイバルヌガレイであった。トレーズとブルムは、この提案を受け入れたし、ラヴァールは、提案を確認した。意見の急変は、エリオを、ラヴァールを救わなかった。一二月一八日、急進党執行委員会に対して、不正手段で非難された、エリオは、彼の職務を辞職したし、三六年一月一九日、ダラディエによって取り代えられた。一月二二日、急進党グループの多数派の信任から奪われた、ラヴァールは、辞職したし、サローによって取り代えられた。民間民兵の解散は、政治的緊張を減じなかった。二月一三日、ブルムは、ボネの車の中で下院から戻って、A＝Fの活動家たちの人だかりを擦れ違った。彼は、攻撃されて、頭に傷付けられた。抗議の印で、数

十万のデモ参加者は、左翼諸政党のアピールに分列行進した。この背景の中で、選挙のキャンペーンは、始まった。[四一]

人民戦線の立候補者たちが、存在していなかった、人民戦線綱領は、第二回投票の綱領であったし、第一回投票のため、誰でも、彼の固有な旗の下に闘いに進んだ。社会党員層は、左翼の綱領の基礎について立候補した。右翼の圧力に従順な、急進党員層は、彼らの答を遅らせた。彼らは、四月に彼らの同意を与えたし、選挙のキャンペーンは、既に始められた。左翼で、最もキャンペーンをマークした、問題、それは、共産党の態度であった。その態度は、一三六年四月一七日、トレーズのラジオで、演説によって定義された。フランスの文化的頽廃を想い起こした後、彼は、共産党員層が、フランス人民の真の和解で働くよう説明したし、『われわれは、カトリック教徒、労働者、サラリーマン、農民……を手を差し伸べる』という結論した。右翼は、大きなテーマで喜んだ。人民戦線連合は、つまらないことに同意してなかったし、全てそれは、モスクワで利用した。人民戦線、それは、破産と挫折、無政府状態、戦争であった。左翼で、アモンは、そのキャンペーンに出資した。右翼で、ドゥ＝ケリリスの周りに、全国的共和派宣伝センターは、参考資料と目録を提供した。二つの大きな力は、右翼を支えた。最初の力、それは、教会であった。カトリック教界の方向に、共産党の働き掛けは、最近であった。三六年春で、共同で、共産主義青年同盟とキリスト教労働者青年同盟は、若い失業者層の国際的大会を準備した。働き掛けは、日和見主義的で現れた。共産党の攻撃の結果は、貧弱であった。人々は、反ファシズムの基礎について、カトリック教の知識人層の側で、ある戦慄を注目できた。ローマ教会の位階制度は、反撃した。三六年二月から、パリの大司教区は、共産党の宣伝に反対して、カトリック教徒層を用心した。トレーズの演説の数日前、教皇は、監視に枢機卿と大司教を仕向けた。それは、共産党に、人民戦線に襲い掛かる、非難の継続であった。もし人々は、現に司祭層の三分の二が、A＝Fの近い神学者たちによって形成されたように思い出すならば、驚くには当たらなかった。教会は、右翼を考慮して、重みをなした。選挙の競争の中で、掛かり合った、第二の大きい力、新聞。その理由は、ラジオは、選挙キャンペーンに結び付けられたし、主な指導者たちは、キャンペーンに表現された。ラジオに、トレーズは、カトリック教徒層に、

火の十字架団に手を差し伸べる。これらのラジオの放送が、引き起こす、関心は、確実であったし、選挙のキャンペーンは、指導者たちの演説の聴取でまき散らされた。人民戦線委員会は、一七日、トレーズ、二一日、ブルム、二四日、ダラディエを注意して聞くため、三つの聴取を組織した。三〇〇万の設置されたラジオで、ラジオは、書かれた新聞の力を競争できなかった。パリの、全国的新聞は、印刷部数が、六〇〇万部を近い、約三五の見出しを含んだ。右翼は、見出し（二五以上）に同様に印刷部数（五〇〇万以上）に、新聞に絶対的に支配を目指した。左翼で、人々は、全体的に印刷部数が、三〇万部と三五万部の間に揺れ動く、見出しを満足するはずであった。地方で、時間は、地方的専売に対して、存在しなかった。左翼は、急進的な調子の新聞に対して、新聞に負っていた。人民戦線へのこの新聞の忠実さは、相対的であった。週刊と月刊の新聞の領域の中で、左翼は、大きな努力を提供した。その象徴は、金曜紙であった。右派に、グランゴワール紙は、五〇万部を、カンディド紙は、三四万部を普及させた。選挙キャンペーンの中で、新聞の約束は、明白な態度の決定を経験した。(四二)

左翼は、第一回投票に対して、票に多数派を現れたばかりでなく、左翼は、右翼が、後退したのに、三二年と比べて、進行した。解説者たちは、これらの国政選挙が、左翼にとって、高潮を代表しなかった事実を主張した。左翼に、強い印象を残す現象は、共産党の進行であった。現象は、一四五万三、九二三票（タン紙）と一五〇万三、一二五票（ポピュレール紙）の間に手に入れた。共産党の進歩は、パリ地方の中で、一連の工業地帯と労働者の郊外の中で、敏感であった。共産党の投票の証明書は、工業労働者層の配分に対応した。進行は、農村の環境に敏感であった。カトリック教徒層に伸ばされた手は、僅かの効果であった。強い宗教的実践の土地は、共産党に対して、禁じられたままであった。正反対に、急進党員層は、票を失った。彼らは、約一四〇万票で、人民戦線の第三の政党であった。彼らは、彼らの票の二一、八％（ユマニテ紙）と二三、七％（タン紙）の間、失った。急進党の票の喪失は、党の選挙民の左翼への地滑りによって説明されなかった。党は、党の左派について、党の右派について、票を失った。立候補者たちは、社共両党が、農村の環境で活

動していた場所に減少した。得票の評価が、一八一万一、二三七票（ルフラン）と一九三万五、〇〇〇票（ベイヤク）の間に変化した、社会党について、党は、三二年と比べて、僅かに後退した。〇、四五％（ベイヤク）と三、九一％（タン紙）の間。これらの喪失の一部は、ネオの脱党者たちに帰すべきであった。社会党は、工業諸地方の中で、票を失ったし、ブルターニュに、南西部の中で、勝った。社会主義共和同盟について、同盟の結果は、無視できなかった。タン紙に従って、五八万七、四七七票。三二年の国政選挙と比較は、困難であった。同盟の構成分子の一つ―仏国社会党―は、存在しなかった。もし結果が、デアの期待に対応しないならば、それは、完敗ではなかった。左翼の連合に関して、第二の注目。小さな組織と多様な脱党者の立候補たちの増加。急進党の左派の脱党者たち（カミーユ＝ペルタン）、ベルジュリの戦線主義党の立候補者たち、青年共和派、ドリオ主義者の立候補者たちを区別する必要があった。プロレタリア統一党は、巧みに切り抜けた。右翼に、内部の動きは、大多数の単独の立候補たちを報告して、分析するのに困難であった。人民民主派の進行（＋二〇、六％）を横切って、右翼の内部に社会的流れの軽い増加。別の極で、過激派の流れの敏感な進行、二二、六％で後退した、民主共和同盟（＋二七、九％）と三二年の同盟の得票で二七、七％を失った、急進左派。結果を解読するのに困難にした問題、それは、この選挙の相談の中で、極右諸団体の全体的な欠如であった。A＝Fと火の十字架団は、投票に参加しなかった。人々は、フランシスト党とフランス連帯団のある立候補者たちを見分けた。田舎の中で、農地の立候補たちは、開花した。この立候補たちの衝撃は、測るのに困難であった。この立候補たちが、農村の環境に、国の全体の中で、極右によって展開された扇動を引き継がれることは、否定できなかった。(四二)

第一回投票に、一七四の選挙区であったし、四二四の選挙区は、当選未定になった。地方的裏工作に突然打ち切って、トレーズ、ダラディエとセヴェラックは、共同のコミュニケの中で、普通選挙が、第一回投票に先頭に置いた、これらの立候補者たちのコミュニケについて団結するよう要請した。右翼は、左翼よりもっとよい第二回投票を成功した。右翼に、四〇の規律違反のケースがあった。左翼に、その五九のケースがあった。これらの規律違反は、急進党が、それの一二を

失って、それに九と三の選挙人たちを勝つ、社共両党に役立った。左翼対右翼という均衡の言い回しに、試合は、引分けであった。規律違反は、左翼に六議席、右翼に六議席を失わせた。票の移動は、右翼が、三、九三％で進行するのに、第一回投票に比べて七、〇六％を失う、左翼に好意的ではなかった。第一回投票の前進は、左翼が、打ち勝つように許した。人民戦線に有利な三七八選挙人たちが、存在したし、それに反対する、二二〇選挙人たちが、存在した。急進党員層が、五一議席（一五七から一〇六まで）を失ったのに、共産党は、一一から七二代議士たちまで、社会党は、一三一から一四七まで移った。サン＝ドゥニで、ドリオは、第二回投票で再選された。二〇区の中で、デアは、敗北された。それは、左翼の第一党である、社会党であった。それは、人民戦線を構成する及び指導することは、社会党に属していた。五月一〇日の全国評議会で、ブルムは、首相の責任を受け入れた。(四四)

四　三六年六月のスト

国政選挙の直後から、五月六日の社会党執行委員会で、ピヴェールは、ブルムに、新議会の公認で、彼の政府を呈示するよう切望した。共産党は、同じ観点を発展させた。この時間の間、労働者層は、期待したし、サロー政府は、日常業務を片付けると見做された。工場の中で、緊張は、上がった。メーデーで、参加は、それに証明した。パリで、二五万の冶金労働者について、一二万のスト参加者たちが、存在した。地方に、現象は、同じレヴェルであった。デモに参加は、二倍、三倍にした。この五月に、ストの数は、倍加した。二つの別の基本要素は、経営者が、防衛態勢を感じられるように確認した。第一の基本要素は、ストの動機の発展であった。第二の基本要素は、毎月、調査された紛争のために失敗の比率の減少であった。地方に、ストの波を知らせる最初の徴候は、現れた。解説者たちは、五月一日、スト参加者の労働者層の解雇に反対して、抗議するため突如開始された、占拠で、二つのスト（一一日、ブルゲ（航空機産業）、一三日、ラテコエー

ル（同）を目立たせた。五月に決定された占拠は、六月のストが、存在する、問題を知らせた。賃金の減少を拒否するため動き出した、ストは、四％の増額で、五月五日、勝利を得て終わった。パリ地方の中で最初の中継、五月一四日から、ブロック工場の占拠でスト。二四時間に、労働者層は、賃金について満足を、有給休暇に対して権利を手に入れた。労働者新聞は、控え目に留まった。デモは、大量になり、戦闘的になり、色彩豊かになった。全所属から、六〇万のデモ参加者たち。共産党は、ある譲歩をなす積りであるように評価した。翌日、イヴリーで集められた、党中央委員会は、宣言した。『中央委員会は、……民衆の意思を理解し、承認する。共同綱領によって強く勧められた措置を……取ることは、必要である。』[四五]

五月二六日、最初のストの波は、動き出す、パリの冶金であった。二七日、それは、決定的になるルノーであった。二八日午前、ルノーの三万五、〇〇〇の労働者は、仕事を止めた。動きは、この日から、別の同業組合で広がった。二九日、労働総同盟は、ルノーにあっては紛争の終わりを要請した。三〇日、分派は、はっきりと仕事の再開であった。[四六]

労働総同盟指導部は、干渉しなかった。共産党指導部は、諸問題を持っていた。フェラは、第八回大会以来、政治局のメンバーではなかったし、中央委員会のメンバーと植民地委員会の責任者に留まった。彼は、彼の不一致を隠さなかった。社会党で、それは、反抗したし、五月二七日、『すべては可能である』という論説を公表した、ピヴェールであった。内容について、本文は、僅かの正確の提案を含んだ。投機について調査の要求、一年の兵役への復帰、人民諸委員会の設立。ピヴェールは、反対のことを予測する、ブルムの動機を可決した。五月一〇日、全国評議会で、ブルムは、共産党の拒否の場合、それは、同質の社会党政府であるよう要求するため、介入した。彼は、全員一致の動機を可決した。五月三〇日、社会党大会に対して、同様であった。共産党に対して、ストの動きが、発展した時、ピヴェールとフェラの間、結び付きは、潜在的な危険を表した。ジットンは、五月二九日のユマニテ紙の中で、『すべて可能ではない』という見出しの下で、答えた。『否（ノン）、否（ノン）、ピヴェール、『外科的手術で』明白の政府のため、問題にならない。』[四七]

サロー政府は、困難な状況の中であった。サローは、労相フロサールによって、経営者への問題を提起させたし、彼は、一か月後で、手に入れられた答を要約した。ブルムは、近い政府を構成するのに専念した。最初の問題、共産党の不参加。彼らの拒否の理由から、共産党員層は、二つの説明を与えた。最初の説明は、第八回大会から進捗された。説明は、党が、ブルジョワとして考える、政府に参加するように、共産党の拒否として解釈され得た。第二の説明は、三六年五月一四日、公式の返事の中で画かれていた。共産党は、党の政府への不参加を決定した。それは、六つの考察に基づく、クリエジェルのテーゼであった。・不参加は、コミンテルン第七回大会から生じた一般的路線に合致したものであった。・第七回大会によって、参加のため固定された、諸条件は、フランスに結び付けられなかった。・それは、余りにも明白であったので、共産党指導者たちは、問題を再論議をすべきではなかった。・人々は、六月のストで、果実は、成熟してなかったし、共産党が、立派な革命的正統性に、権力の獲得の問題を提起され得たように考察できた。・政府の共産党の執拗な攻撃、人民戦線諸委員会のための戦い、組織的統一の意思は、革命的道を探し求めるように意思を証明した。・もし共産党員層が、政府の参加について態度で変わったならば、それは、コミンテルンが、参加に再論議をしたということであった。これらの六つの考察は、間違って現れた。一、第七回大会から浮き出る、問題は、参加の問題について防衛作戦ではなかった。二、参加の諸条件は、コミンテルンの決議の中で、数え上げられた。最初の条件は、人民戦線政府の存在自体が、ブルジョワジーの国家機関が、その設立を妨げるような状態にならなかったように表明する、事実として読まれ得た。第二の条件は、三四年二月一二日のストとデモから、多様な動員から、満たされることを評価するように自由であった。第三の条件のため、同様であった。三五年七月一四日から、協定は、ファシスト諸問題について所定の手続きを踏んで押印された。三、不参加は、明白ではなかった。不参加は、政治局で、再論議された。クリエジェルは、懐疑的態度を言い触らした。デュクロは、政治局で、討議はあったし、参加の支持者、トレーズは、取り戻された、そしてフラションとブリュメールによって確認された断言、政治局に少数派であったように断言した。ルクールに対して、それは、参加の支持者たちであった、ティヨンに対して、それは、ジットンであった。四、共産党は、三六年六月のストの動きが、党の革命的諸展望を具体化するように認めたように、遅く、目撃した。共産党は、動

きの潜在性を早く目撃した。党の政策は、党をさばくよう、党を壊すよう試みることであった。五、共産党の執拗な攻撃は、スペイン戦争から、共産党の現実の意図があったことは、明白でないように存在しなかったし、人民戦線諸委員会のための戦いは、繰り広げられなかった。六、コミンテルンは、フランスの不参加についてコミンテルンの意見を与えるのを仕向けられた。コミンテルンは、三六年五月と三七年六月の間でなく、三六年五月と八月の間、意見を作った。八月初めで、デュクロは、人民戦線政府への参加を勧める。コミンテルン執行委員会の有名な集会は、存在しなかった。何故、フランス共産党員層は、不参加を決定したのか。有り得ることは、五月一四日の宣言を重大に考えたし、宣言を解読する必要があるということであった。共産党員層は、彼らの政府への参加が、人民の敵たちの恐怖と半狂乱のキャンペーンに対して、口実を提供するよう恐れたのか。明白に、諾、彼らは、彼らの影響力が、右翼の分派から仏ソ同盟まで及び第三帝国について確かさの政策まで、賛同に対する妨害を構成するよう恐れた。彼らは、ソヴィエト外交と一致していた。彼らは、彼らの驚くべき選挙の進行の後、彼らの政府への参加が、労働者の動員に対して、奨励のように思われるよう恐れた。彼らは、モスクワと一致していた。どの利益は、何らの参加で取り戻したのか。急進党の政策を適用するのが、問題であった。共産党の大臣たちが、必要であったのか。彼らは、危険を冒さなかったのか。参加主義者たちは、二つの事件の結び付きで、優位に立った。スペインに不干渉の決定、左翼にマークされない諸内閣の、国民連合の準備。[四八]

社会党全国評議会は、第一次ブルム政府の中で、入閣するよう、労働総同盟に対して、提案するよう決定した。フォールとブルムが、五月一一日、署名した、手紙は、提案を明確にした。手紙は、ジュオーに対して、個人的要求を理解した。手紙は、労組の独立の伝統と矛盾であった。ジュオーは、ためらった。彼は、公共事業省に対して、事務局の不可避性を主張した。五月一〇日、彼は、旧同盟派の指導者たちを集めた。二つの基本要素は、均衡を傾かさせた。共産党から来るのに、態度について、不安、及び政府諸計画の不十分な性格。労働総同盟の会話は、実を結ばなかった。ブルムは、彼の政府を構成した。人々は、閣外相として、三人の婦人の任命を注目できた。多数の理工科学校の卒業生の突然の影響力。フリーメーソンの有名な影響力。フリーメーソンの一八人の大臣と閣外相が、存在した。一八名の社会党員、一三名の急

進党員、二名のネオ及び二名の共和社会党員が、存在した。外務大臣で、デルボス。海軍大臣で、ガスニエ＝デュパン。六月四日、ルブランは、ブルムに対して、職務に就くよう要求した。ブルムは、六日のため予測された、議会の公認を予想するように同意しなかったし、彼は、ルバとサラングロが、労相と内相で、彼らの職務に就くよう受け入れた。五日、ブルムは、ラジオで話した。ストは、又始まった。(四九)

第二のストの波＝パリ地方の中で、六月一日、占拠された工場は、一〇、二日正午、六六、夕方、一五〇でいた。地方は、争いを始めた。パリで、ストは、ルノーとシトロエンで又始めた。動きは、職業的諸集団の全体を打撃を与えた。パリで、印刷所のストは、その結果出版されなかった。連帯は、左派の市当局によって責任を引き受けられた。五日から、ナントで。六月七日まで、フランス経営者総同盟は、干渉しなかった。五月二九日、フロサールが、和解を期待する必要があった。労働の再開。六月二日、動きの再開で、それは、麻痺状態になった。経営者総同盟は、パリの組織として見做した。経営者は、地方に、総同盟を離れて組織されたばかりでなく、統一されなかった。ボルドー、ナント、マルセイユで。左派に、諸政党の及び諸労組の中で、状況は、混乱した。三月三一日、社会党大会は、全員一致で、スト参加者たちに対して、連帯の動機を可決した。動きは、再開の方に一般的であった。六月三日、ストが、再活発したのに、共産党員層は、左翼代表団が、同じ立場を取るよう提案したため、社会党大会の可決で口実できた。共産党員層は、社会党員層の拒否に衝突したばかりでなく、サラングロは、根拠のない扇動に終止符を打たれたように要求した。共産党は、数日間、慎重な態度を持った。労働総同盟は、均衡を取らせた態度を保持した。総同盟は、経営者層の不法監禁に反対して、態度を決定した。(五〇)

弾丸は、政府の陣営の中にあった。ストの拡大は、結果として、政府のグループが、確実の混乱の中で配置させた。五日から、最初の問題、パリは、パンを欠くように危険を冒した。恐慌は、経営者層の陣営に襲った。六月五日、A＝ランベール＝リボは、ブルムと連絡を取って、彼に労働総同盟で出合いを組織するよう要求した。総同盟は、受け入れたし、

代表団は、六月七日一五時で、出合った。協定は、労働者の代表たちの承認について同様に、団体協約の原則について、急速になされた。第二の点は、ストによって痛い目に会わせられた、経営者に対して現れた。組合権の承認とスト参加者たちに対する制裁の欠如は、承認された。企業の生活について賃金の値上りの結果、及び秩序の再建、占拠の終わり。二つの問題は、値上りの比率についてつまずいた。経営者層は、七と一〇％の間、提案した、労働総同盟は、一〇と一五％の間、要求した。二〇時で、会議は、中断した。二一時で、冶金の経営者層は、P＝リシュモンに対して、組合の提案を受け入れるよう委任を与えた。二二時で、経営者総同盟中央会議は、同じ立場を採択した。ブルムは、数十万の労働者の前に、進行中の会談で暗示した。会議は、マティニョンで又始まった。二三時三〇分で、ブルムは、ジュオーに対して、手書きの通知状を伝えた、四〇時間法、有給休暇法、団体協約法……。午前一時前、討議は、閉じた。経営者層は、七から一五％まで、賃金の値上りを予知した。フラションは、関心を失った。[五二]

協定の直後、労働者の大きな組織は、一致していた。六月八日から、組合の指導者たちは、望みを捨てるはずであった。先ず最初に、銀行。七日夕方から、ゼネストは、銀行に翌日のため知らされた。協定は、一二日、締結された。八日午前、保険のストは、突然起こった。九日、五〇の会社であった。同日、協定は、一〇％の値上げで締結した。大百貨店は、スト中であった。八日、職員の集団は、動きを併合した。パリ冶金の中で、労働者代表団は、経営者層と連絡を取った。賃金の要求は、高かった。代表たちは、要求の満足まで、ストの調整に賛成した。経営者層は、ニュースで、不安であった。ストは、地方の冶金の中で、一般的であった。パリで、状況は、爆発寸前になった。一〇日、冶金の代表者たちは、期限切れで、四八時間の最後通牒を呈示した。午後、経営者層は、譲歩した。それは、二八〇の工場で成功であった。金属労働者たちは、孤立されなかった。パリ建築の中で、ゼネストへのアピールは、八日、効果を取った。進行中の仕事は、停止された。協定は、下部組織によって否認されたし、一〇日夕方、労働総同盟系組合は、ゼネストを要請するはずであった。六月一一日、それは、パリの街頭の中にデモをした。これらの現象は、地方に同一で繰り返された。六月一一日は、

動きの絶頂を表した。政府で、ブルムは、社会的諸計画を可決させた。有給休暇を創設する、本文は、六月一一日、五六三対一票で可決された。同日、団体契約について、本文は、五七一対五票で採択された。四〇時間について法は、一二日、四〇八対一六〇票で採択された。上院は、それぞれ採択した。(五二)

それは、政府を心配させる、スト参加者の動きであった。全国人民連合委員会は、選挙の勝利を、七月一四日まで延期した。六月一一日、農業労働者層のストは、発展した。社会党と労働総同盟は、ストが、止めるため、彼らの努力を繰り返した。共産党は、干渉したように必要になった。一一日夕方、パリ地方の共産党のメンバーたちは、トレーズが、話す、情報会議に対して召集された。「すべては可能ではない。」共産党は、動きを壊すよう選んだし、減少は、始まった。減少は、遅かった。(五三)

六月一二日から、一四の全国的団体契約は、署名された。七つの別の団体契約、翌日。問題は、冶金であった。トレーズの演説の翌日、代表たちは、ほぼ全員一致で、契約を批准するよう受け入れた。一三日夕方、占拠は、ルノーで終わった。一五日、パリの冶金のほぼ全体は、仕事を再開した。一三日、ホテル等は、再開した、一五日、保険と印刷所。状況は、建築で混乱した。大百貨店のため同様であった。六月一二日の後、産業部門が、同様であった。大百貨店は、二二日、再開した。地方に、後退は、遅かった。減少は、速くなかった。ノール県等で。建築等の中でストの後、それは、原住民の労働者であった。激しい衝突は、軍と警察で起こった。七月一四日、スト中の一、五〇〇以上の企業（占拠された六〇〇）、一六万以上のスト参加者たちは、存在した。それは、ヴァカンス、及び最初の有給休暇であった。(五四)

ストの動きの大きさは、労働省の月刊の報告書が、明らかにした。六月に記録された一万二、一四二のスト、及び一八三万〇、九三八人のスト参加者、七月に一、六八八のスト、及び一七万六、九四七人のスト参加者。(五五)

人々は、三六年六月の動きを管理するのに、再統一された労働総同盟の困難を理解した。七八万五、七二八人の加入者たち。組合の責任者たちは、半非合法性に強制された。ルノーで、人々は、解雇された活動家たちを数えた。三五年から

三七年まで、総同盟は、四、〇〇〇から一万六、〇〇〇の組合を、七八万五、二七八人から三九三万八、八二三人まで加入者たち、数か月に五倍毎に増やされた加入者たちの数を移った。この進行は、三六年六月のストの結果であった。再統一は、吸引装置として影響を及ぼした。官公吏層の連盟－二三％。総同盟は、若返ったし、女性化した。定員数の増大を横切って、旧同盟派と旧統一派の間に、響きの鈍い闘いは、続けられた。旧統一派は、諸連盟であった。建築、ガラス、化学、金属。旧統一派は、プロレタリア化の時期に、企業の中で、共産党によって準備された組織網について、下部組織にもたれ掛かった。上部組織に、互いの戦闘的行動は、重要であった。プロストの数字を取り戻すならば、旧統一派によって管理された、諸連盟の定員数は、三七年末まで、同盟の定員数の六〇％を表した。これらの連盟の中で、重要な旧同盟派の少数派が、存在した。旧統一派は、三六年末から、相対的多数派から自由に使えた。旧統一派は、三七年夏から、絶対的多数派を持っていた。(五六)

フランスキリスト教労働者同盟は、三六年の前夜で、二つの特徴によってマークされた。労働者同盟は、サラリーマン層にあって、出席していた。同盟は、キリスト教の社会的道徳に参照されたばかりでなく、同盟は、カトリック教徒たちを受け入れたし、同盟は、ローマ教会の位階制度に結び付けられた。キリスト教の組合員たちになる、労働者層は、存在したし、労働者の環境に、キリスト教のサンディカリスムが、存在しなかった。地方の状況は、多様化された。キリスト教労働者青年同盟は、労働者世界のキリスト教化の使命を与えられたし、青年同盟は、非カトリック教徒たちに話し掛けるはずであった。青年同盟は、労働者階級、更には労働者至上主義であった。青年同盟と同盟が、同盟の労働者の産業部門について、青年同盟の圧力は、行使された。青年同盟は、人民戦線に及び三六年六月のストに対して、同盟よりもっと敵対していた。それは、青年同盟から生じた同盟の活動家層であった。同盟は、人民戦線について、及びストについて、慎重であった。大会は、工場占拠が、所有権を犯すように議論しながら、動きを非難したか。冶金労働者層にあって、責任者たちは、占拠を正統化した。同盟の活動家層は、占拠を戦わなかった。青年同盟と同盟は、組合の闘争の道を取り除

くよう仕向けられた。同盟は、銀行と保険の中で署名された、団体契約の利害関係者であった。同盟は、発生した。三七年で、二、〇四八。党員数は、三七年に、三八万人。それは、労働者の構成要素であった。同盟は、極右から組合の枠の調査まで、活動家層を大勢集めるのを目撃した。この定員数の進行は、最初の組合化の動きの果実であった。果実は、質的な結果であった。もしカトリック教徒たちが、地方に多数派に留まったならば、彼らは、パリ地方の定員数の半分の外には存在しなかった。構造は、変わった。労働者層ばかりでなく、サラリーマン層、職工長層、婦人層を結び付ける、企業の中で、必要は、生まれた。(五七)

この期間の間、社会党は、作る、それは、躍進であった。三五年に、一二万〇、〇八三人の加入者たち、三六年に、二〇万二、〇〇〇人。この募集は、企業からやって来なかった。社会党は、任務の対立の古い構想に囚われたままであった。労組で、労働者層の利害の防衛、党で、選挙の征服。工場細胞の問題では、なかった。三六年六月の嵐の中で、社会党は、結局欠かれた。社会党員層は、ストの中で、行動的であった。六月のストの後、党は、この事態の状勢に収捨するよう試みた。党は、ピヴェールとセーヌ県連盟が、九月から発した、企業の社会党同好会を一般化させるままにした。三七年三月から、一〇万人の加入者たち。辛うじて三五年の分裂ー除名で回復した、社会党青年同盟は、完全な発展になるように思われた。青年同盟は、三七年に、五万四、六四一人の活動家層を再編成した。共産党の定員数に、進行は、印象的にあった。三五年に八万六、九〇二人の加入者から、三六年に二八万四、六五九人まで。もし三五年一〇月から三六年一〇月まで、細胞の数は、＋一五四％で移った。企業細胞の数は、＋二七三％で移った。企業細胞は、第三次産業部門の中でより多く工業の中で、共産党が、冶金の中で、定着された、最初のリーダーで、急増した。パリ市街地で及びパリ西部で、共産党は、政治的独善主義の成果を取り上げた。数か月、共産主義青年同盟は、加入者を三倍にした。共産党の定員数は、社会党の定員数を追い抜いたばかりでなく、共産党は、労働者の新世代を巧みに獲得した。(五八)

労働総同盟と共産党のため、数的進行は、質的動きに対応した。第一の例は、サラリーマン層に関係があった。三六年

六月の前、サラリーマン層と労働者層は、別々に二つの世界を形成した。抜き難い不信は、居を定めた。三六年六月、企業の中で、労働者層と事務局の人々が、同居した、状況は、質的に変わらなかった。事務局の人々は、占拠に参加しなかった。三つの集団は、占拠された工場を放棄するのに許可された。子供たち、婦人たちと給与明細書を提出する人々。ストの直後に、不信は、一掃されなかった。六月一一日のパリの金属労働者層の宣言は、団体契約に批准された、技術屋層とサラリーマン層の連帯しているように明確とした。大百貨店、銀行と保険の中で、それは、ストを横切って、事実上の共同体であった。第二の例は、婦人たちの例であった。占拠への参加する、婦人たちは、独善主義で示すはずであった。三六年六月は、家庭に対して、婦人について、宣伝への一撃を与えた。新しい型の戦闘的な潜在力の開花に対して同時に、人々は、目撃した。(五九)

五　フランスの革命は始まったか

幾つかの領域の中で、ストの権利を主張する結果を評価するよう試みることは、可能であった。団体契約は、フランスの権利のために新しいことではなかった。団体契約は、僅かに実践された。団体契約は、契約の特権の一部を廃止した。マティニョン協定は、共同契約の存在を想起させた。組合の諸組織について、この独立は、極左に心配させなかった。情勢の分析によって、積極的な評価。地方の指図によれば、選挙者の多数派は、サンディカリストの活動家層であった。彼らは、六月後の諸闘争の組織の中で、無視できる役割を演じたように思われた。賃金の要求について、マティニョン協定は、企業毎に一二％の平均で、増額を予測した。闘争の追跡は、有効であることが明らかにした。二〇％の平均して、名目上の賃金は、引き上げられた。女性と男性の賃金の間、隔たりは、変えられなかった。団体契約の誰も、平等な労働で、平等な賃金という原則を統合しなかった。経営者は、弁別を切望していた。七〇〇の団体契約について、一一四回を明ら

かになる、動かせる尺度。(六〇)

最初の説明は、非合法のスローガンの説明であった。説明は、右翼の新聞によって、しかし労働者の活動家層によって主張された。ストが、動き出す、企業は、共産党が、定着される、企業ではなかった。人々は、どのように、かかる主導権が、人々が、コミンテルンの及びフランス支部の不安を知っている、問題で、両立させたかを目撃しなかった。共産党の理論は、非合法に革命と到る所にソヴィエトの方に前進して、確認の影を受け容れなかった。三六年六月の動きの中で、組織の役割の支持者たちは、口数が少なかった。共産党は、この立場を防衛した。多数の企業の中で、闘争の勃発が、組合の主導権についてなされるように、それは、明白な事柄であった。一連の企業の中で、数か月の中で、繰り広げられた闘争が、最大の闘争に対して、労働者階級を準備したように、それは、明白であった。組合化の比率は、高かった。統一労働総同盟は、それに真の組合の代表たちを作るのに力一杯努力したし、メーデーのため、ゼネストの脅威は、動員に対して貢献した。ゼネストのスローガンの目的は、動きをさばくように、明白であった。労働総同盟が、紛争の勃発の中で、理由なしになかったように、問題は、少数派の頭脳の中で、生まれなかった。もし六月の動きが、闘争の大波によって先行されなかったならば、消極的な労働者階級のヴィジョンに只管従うことが、正確になかった。それが、六月のストの勃発の起源であった。数年、数か月、闘争の最先端で企てである、機械的な結論は、間違っていた。現実は、散文的になった。最初のストの成功は、拡大を助成した。座り込みストは、労働者の決定を象徴した。人々は、占拠、彼らの綿密な組織、労働者の自己防衛の面が、別の不安に答える事実を主張しなかった。極右の決死隊の行動によって、経営者と手をつないで働く、外部の恐れ。社会的緊張は、かかる主導権をもたらさなかった。(六一)

多くの企ては、三六年六月のストの影響力を制限するためになされた。最初の企ては、ストを、権利を主張するストのように描写することに存した。トレーズの六月一一日の宣言は、送り返した。「満足が、手に入れられたから、ストを終わることはできる必要がある。」この説明の型は、放棄された。権利を主張する構成要素は、三六年六月で、欠如された

のではない。六月一一日の後、状況は、この分析を弱くした。満足は、手に入れられなかった。精神的レヴェルで、説明の別の型は、早められた。三六年のストは、労働者の威厳のためにストであった。M＝サイドマンは、別の仮定を提唱した。フランス労働者階級は、工業体系と工場の世界を受け入れなかった。三六年六月は、労働の合理化の行き過ぎの後、一連の大きなストレスの解消を、労働に対して、フランスの労働者層の大量の反抗を代表した。提唱された第四の説明は、六月のストを、ストのお祭りの局面に追い込んだ。分析は、新しいのではない。それは、分析に完全な彼の形態を与えた、プロストであった。工場は、占拠された。それは、共同の祝祭の、ストレスの解消の抑制できない欲求であった。占拠でストは、革命の正反対であった。ストは、動き出した。返事は、消極的であった。スト参加者たちは、頑固であるのか。彼らは、労働を再開するよう拒否するのか。最初の占拠、ファシストの干渉の恐れに結び付けられた準備、スト破りの労働者たちが、屋根によって工場を離れるはずであった、事実に伴う、不安を消し去る必要があった。最後の暗礁。それは、結局、ストが、続ける、無関心であるのか。労働者層は、別の事柄を期待してないのか。三六年六月で、お祭りの局面を与えるため、議論は、一方的に現れた。革命的状況は、存在できない、問題。あらゆる歴史的経験は、この考えを弱くした。ただ少数派は、必要な変化の大きさを意識していた。革命的型の意思は、鍛えられた。三六年六月のストが、提起する、真の問題は、革命的ストが、問題であったのではなく、三六年六月のストの動きが、革命的状況を開いたのであった。この観点から、これらのストの特徴について、尋問される必要があった。一、占拠で、ストは、諸企業について、経営者の所有権を疑問視した。労働者層は、その権利を意識していなかったように想像することは、不可能であった。問題は、代表たちが、雇用について管理権から自由にする要求を顕れたし、解雇は、その権利に居合わせられた。この再疑問視は、生産の手段と工場の共同取得の要求まで進まなかった。いかなる自己管理の意思は、占拠の勃発の中で、知覚できなかった。再開始のある経験は、例外的であった。脅威は、この可能性が、労働者の展望で欠けなかったように示した。二、もし、三六年六月のストに、共同の動機が、存在したならば、それは、企業の内部に、社会的、階層的関係を変えるように意思があった。この異議は、大きな職場の抽象的な経営者層に適用された

ばかりでなく、小さいサイズの企業に適用された。この局面は、局面を知覚された経営者層であった。三、神経過敏、不安、ファシストの、警察の干渉の恐れと自己防衛に結び付けられた不安は、工場の中で、居合わせられたし、設備の状態に反響をもたらした。フランスの労働者層は、武装していなかった。全ての干渉の企てが、要塞に工場を変えたように明白であった。経営者は、その企てを理解した。四、労働者の民主主義は、その強い点とその弱点を持っていた。多くのケースの中で、それは、紛争の指導する組合の支部ではなかった。人々は、スト委員会を準備をしたし、経験に富んだ組合の指導者たちを含んだ。スト委員会のメンバーたちは、民主的に選ばれたのか。大部分のケースの中で、否。彼らは、連盟の様式で働いた。これらの代表は、下部組織の近くに現れたし、工場の中で、労働者層の影響力は、多様な管理の形態を助成した。労働者層は、交渉の行動から剥奪された。彼らは、危急な瞬間に、その行動を取り戻した。ストの民主的行動の中で、空白を暴くことは、容易であった。六月のストは、闘争の自己組織の中で、重要な共同の前進を表した。五、労働総同盟の命令が、首尾一貫した、ストは、組合の指導部のいかなる異議を引き起こさなかった。ストの経験は、旧同盟派よりもっと旧統一派に役立った。それは、旧同盟派の素質よりもっと発展された素質に延期したし、総同盟のジュオーの指導部の異議の動きに延期しなかった。共産党によって、六月一一日、取られた態度は、党の組合の指導者たちによって責任を再疑問視を引き起こすように思われなかった。三六年六月に、人々は、抑止によって強制されたし、組合支部を再準備するよう試みた、古い代表たちを頭角を現すように見えた。組合活動の諸条件は、組合の連合によってひっくり返された。六月は、下部組織で、組合の連合が、作られたはずであるのに、干渉することは、想起したように望ましい。四月に、労働総同盟と統一労働総同盟は、出合ったし、メーデーの機会で、統一された組合支部は、構成された。新しい組合員たちは、六月から、闘争を統合したし、彼らは、秋で、組合の活動を統合した。広いヴィジョンを持っている、活動家たちは、稀であった。職業間の行動は、繰り広げられなかった、企業間の協調は、殆んど存在しなかった。それは、組合の官僚制のために重要な危険を代表するからであった。それは、トレーズの干渉が、中央委員会が、準備させるはずである、重要な日に起こるかどうか偶然ではなかった。六、『労働者層は、工場を占拠した、しかし、工場は、労働者層を占拠した』と、ブルムは、リオンの訴訟の時、宣言した。それは、この労働者階級は、それらの工場の中で、閉じ込められた事実であっ

た。占拠は、無益になったのか。否。占拠は、住民への諸事件を説明した。反動的市当局の中で、二重の権力の萌芽を準備することは、可能であった。駐屯地の中で、大勢の兵士と接触を結合することは、可能であった。農村地方の中で、小農民層と接触を取ることは、可能であった。何も、なされなかった。労組と左翼政党の伝統的指導部は、動きが、掛かり合ったように希望しなかった。問題は、深遠であった。七、もしスト中の労働者層が、企業の中で、権力の問題を提起したならば、都市の中で、権力の問題は、提起されなかった。どのように、有名な労働総同盟のプランが、握りつぶされているかを見ることは、明らかであった。共産党によって預けられた、法の諸提案は、取り戻されなかった。政府の連合の形態は、再疑問視されなかった。いかなる重要な圧力は、党が、政府に入閣するため、共産党に行使されるように思えなかった。急進党員層について、ストの動きの前に、彼らの留保は、有名であったし、彼らが、管理する、諸都市の中で、表現された。彼らの政府への影響力は、再疑問視されなかった。六月の動きは、経営者の独裁に反対する動きとして、政府の政策について意識的圧力として、定義された。幻想は、人民戦線の連合が、圧力される用意のできたことを信じることであった。これらの二か月間、幻想は、しつこい。政府の連合の別の型の問題は、議事日程のものではなかった。人々は、革命的状況で話ができるのか。問題は、革命的状況を定義する、規準の検討に延期した。[六一]

三六年六月によって、開いた状況が、革命的として考察される、極左で、存在するだけではなかった。ブルジョワ支配の危機を存在したように、必要とした。この条件は、三六年六月に満足させられた。数年以来、ブルジョワジーは、政治的解決法について同様に、経済恐慌でもたらすのに治療薬について分裂された。議会共和国、ボナパルト主義政府、ファシスト独裁。ブルジョワジーの一部は、社会主義かファシズムかという選択肢で、対立させるよう恐れた。その一部は、階級の協力と人民戦線の中で、ナチの誇張に反対して、城壁を見たし、その一部は、社会主義と大衆運動に反対して、最後の訴えをそこに見た。三六年六月のストが、始まった時、この訴えは、幻想的に現れた。一方では、賃金増額を分配できた、大産業会社、他方では、小企業が、利益の比率の減少を意味した、小企業は、存在した。この経営者の分裂で、議会の反対の不確実さは、付け加わるばかりであった。カトリック教階統制と同様に、火の十字架団と全国戦闘員同盟を襲

うように思われた、ためらいは、付け加わるばかりであった。ブルジョワジーで、労働者階級の方に向く用意ができる、中間の社会諸階層の危機は、存在したように必要があった。これらの指数の最良のものは、三六年五月の国政選挙に留まった。これらの社会諸階層の分派は、人民戦線の陣営を結集したばかりでなく、分派は、人民戦線を作り出した。諸工場の中で、この危機は、人々が、経営者の協力者たちを呼ぶ、人々の側で敏感であった。スト中の工場について、行使される、連帯は、この危機の指標であった。大勢の小商人は、スト参加者たちの給料の要求に敏感になったように思われた。農民の世界は、分裂させられた。一方では、労働者農民総同盟と農民全国同盟が、組織する、スト中の農業労働者層と小経営者層の少数派、他方では、大経営者層とドルジェールの集団。労働者層と農民層の間、僅かな衝突が存在した。最後に、賃金労働者の多数派は、変化を願うように必要があった。量的なものは、質的なものに変わった。工場の一般化された占拠は、労働運動史の中で、跳躍を表した。もし労働者大衆が、ストが、提起した、社会的及び政治的新レヴェルの問題を押し付け得なかったならば、それは、『いかなる組織は、精力の彼らの潜在力をさばかなかった』（ルフラン）ばかりでなく、大きな労働者組織は、動きの発展まで反対した。事実は、社会党指導部のために同様に、共産党指導部のために明白になったし、この路線は、活動の場について、中継を見付けた。真の予期せぬ出来事は、大衆が、彼らの動きを永続できたことであった。(六二)

革命的左派は、どうにかこうにか、動きを支持した。善よりもむしろ悪。左派の社会的構成、社会党の中に現行の禁止は、その結果、左派が、企業の中で、行動的になかった。ブルム政府の配置の後、左派の状況は、曖昧であった。左派は、一票引いて全員一致で、政府のグループにピヴェールの参加を受け入れた。ジロムスキーは、政府の参加を拒否した。それは、人民戦線について、左派のためらいの結果であった。左派は、ブルジョワジーの事業として、人民戦線を定義したし、左派は、その結果を包み隠すため、語彙の貧しい駆引きに再び走った。左派の人民戦線、それは、闘いの人民戦線であった。左派は、労働者階級が、獲得できた、マティニョン協定を評価した。左派は、好機を逃がした。無政府主義者た

ちか。諸関係は、組合的部門、革命的サンディカリスト系労働総同盟と、政治的部門、無政府主義連盟の間に、悪い時期であった。連盟は、ストの活力の曖昧な理解を告示しなかった。総同盟は、ストのスタートで、明晰さで証言しなかった。総同盟は、プロレタリア諸部門の中で、その定着の要点を持っていた。総同盟は、ストの動きに対して、展望を提供しなかった。総同盟は、動きの行動について、重きをなさなかった。いずれにせよ、トロツキー主義者たちが、事実であった。彼らは、政治的展望を提案した。社共両党の指導者たちの裏切りが、彼らに明らかに見えた以上、彼らは、大衆が、それを抱く、意識を過大に評価した。自己組織は、萌芽的になった。工場、スト、占拠委員会は、調整させるように必要を感じなかったし、連盟、地方同盟の組合の責任者たちに対して、この心配を任せた。トロツキーは、この環を提唱した、共産党対社会党（ブルム対カシャン）の政府の提案。彼らは、この政府の決まり文句を取り戻すのにためらった。六月に、彼らは、自己組織のスローガンを発展させた。一〇月から、彼らは、急進党員層を追い出せという、消極的スローガンについて、彼らの宣伝を配置したし、選択肢として、謎めいた労働者農民政府を提案した。彼らの組織する状況は、華々しくなかった。六月二日、国際労働者党は、作り出した。同党は、別のハンディキャップで苦痛を覚えた。組合の仕事の弱点。共産党は、反トロツキー主義のキャンペーンを着手したし、政治の抑止は、党に、彼らの最初の打撃を留保した。指導部の欠陥は、重要であった。党は、何らかの指導する役割を演じなかった。極左の多様な流れは、重要な役割を演じた。三六年六月で、前の企ては、失敗に終わったし、企ては、でんでんばらばらにストを近付かなかった。トロツキーは、ピヴェールに、中身のない美辞麗句を好む人で取り扱った。フェラは、彼らで、その距離を保持することに切望していたし、ピヴェール主義者たちは、第四インタナショナルの増加を皮肉ったし、何をなすべきか紙は、革命的左派を批判した。いずれにせよ、極左は、ストで、リーダーたちの数を提供した、明白な事実であった。それは、動きの支柱ではなかった。共産党の側で、この動きの自然の枠を探すよう進む必要があった。(六四)

共産党活動家たちの三つの集団は、ストの活気によって関係付けられた。これらの集団の第一は、統一労働総同盟とい

う古い活動家たちによって、形成された。活動家たちは、彼らの党と一致しないように感情を持たなかった。彼らは、共産党の政策の中で、転換点を同一視していなかった。彼らの役割は、曖昧になった。ある時、下部組織の熱望のスポークスマン、ある時、彼らの党の引き延ばしの政策の中継。第二の集団は、共産党のメンバーたち、活動家たちによって、構成された。束縛から解放されて、彼らは、敢えて党を離れ、別の組織を併合した。六月の波は、彼らを解き放った。最後に、第三の集団。若い労働者層の集団。若い労働者層は、組合の経験で同様に、政治的組織で少しも持たなかった。もし彼らが、共産党を接合したならば、それは、愛国的な、責任にある新しい言葉についてではなく、反ファシズムについて、経営者層に反対する闘争についてであった。彼らは、共産党が、リードした、民衆運動の中で、見当を付いた。多くの産業部門の中で、弱い組合の影響力は、その結果、産業部門は、闘争の先頭に推進させられた。左翼主義者たちに対して、先験的に、六月一一日、トレーズは、話し掛けた。(六五)

八月四日、経営者総同盟は、社会的理由と同時に、方向で変わった。総同盟の部局は、再組織された。経営者は、社会的サーヴィスを配置した。社会行動予知委員会は、創設された。数週間の後、フランスキリスト教経営者センターは、そこに加入した。議会の右翼の落着きを取り戻すことは、明白であった。反撃は、組合のレヴェルで配置された。六月五日、火の十字架団は、組合研究事務局を構成した。七月二五日は、パリ地方連盟同盟を準備させた。フランス職業組合は、一挙に現れた。ラ＝ロックの直接の発現、フランス社会党にある略号。職業組合は、階級の協力の組合として定義された。工場の占拠は、非難されたし、ストは、解決された。この下部組織について、組合は、別の同盟といざこざを起こした。組合が、労働総同盟と衝突する、問題は、何も驚くべきではなかった。組合が、キリスト教労働者同盟の側で、敵意は、もっと驚くべきであった。カトリック教の位階制は、留保された。職員組合は、発展した。人々は、地方の多数の県の中で、組合活動の足跡を見付けた。加入者の半分近くは、パリ地方の中で再編成された。組合は、重要な突破口を行った。組合は、六月末から、経営者の反撃に対して、無視できる支えを提供した。農民層にあって、ドルジェールの防衛委員会

は、その定着を強化した。在郷軍人層にあって、全国戦闘員同盟は、その態度を堅くした。政治的極右の中で、行われる、再転換は、最も重要であった。六月一八日、閣議は、四つの団体を解散した。解散の結果は、同一ではなかった。三つの最初の団体は、衰えた。ドリオは、フランス人民党を創設したのに、火の十字架団は、フランス社会党に再び覆われた。(八六)

三六年六月二八日、ドリオは、フランス人民党を作り出した。彼は、忠実な人たちの周りに、党の指導部を構成した。人民党が、恩恵に浴する、貢献は、多様であった。人民党は、早く発展した。数字は、過大評価された。三六年夏の間、発展は、烈しいものに見えた。彼は、成功の条件を全て備えているように思われた。彼は、人々が、フランスのファシズムで話し得るため、人民の基礎を結晶できるのは唯一人の人であるように思われた。彼の最初の大会の統計表は、彼が、労働者層と農民層の五七%を持っていることを、明らかにさせた。地方に、彼の発展は、民衆諸階層の中でなされるように思われた。第二の利点。彼の綱領は、ラ＝ロックの綱領が、正確でないよりもっと正確であった。報復的でない、民族主義。同業組合国家。賃金のため、企業の利益への参加。協会への比例代表制、諸党の数の制限と執行権限の強化。第三の要素。人民党は、評判の高い知識人たちの立派な数を引き付けた。最後に、人民党は、財政的資源から自由にした。人々は、彼が、フランス風のファシスト党を準備できる分析を作った。ドリオは、これらの可能性を利用したし、地方財政委員会によって集められた、総額は、付け加わった。彼は、ナチによって除けば、出資されることは、確定的であった。これらの利点を活用して、人民党は、パリ地方の中で、早く発展した。地方に、党の関心は、地中海の南東部の中で、有名であったし、党は、リヨンとボルドーで、主要点をマークした。彼の各移動は、労働者の反デモの機会であった。小ブルジョワジーは、人民党の活動を取り囲む、暴力の雰囲気に直面して、ためらった。人民党の創設の数日後、ラ＝ロックは、火の十字架団を党に再び覆った。若い巨人、人民党は、うるさいちびで様に見えた。(八七)

フランス社会党を作るため、ラ＝ロックは、多様な流れを再編成する必要がなかった。党に、四五万の加入者の周りに、集まることに足りた。九月一五日で、彼らは、六〇万であった。三七年の初めから、彼らは、一〇〇万以上であった。社

会党の募集は、民衆的ではなかった。ブルジョワたちと小ブルジョワたちは、社会党に対して、多くの利益を見付けるように思われた。もっと鋭い面は、不安になった。彼は、彼の権力を見せびらかすように知った。彼のデモは、開かれた暴力について、稀に不意に現れた。大佐は、秩序の人のように思われた。彼にあって、そんなに、三〇年代の急旋回から生まれた、非順応主義の知識人たちを怒らせる、問題は、公証人と小商人を安心させる問題であった。知識人たちにあって、大佐の関心は、重要であった。それは、当時の新しい波ではなかった。人々が、三六年六月の後、目撃した、反撃と右翼の再組織の中で、それは、最高の作品、フランス社会党であった。(六八)

経営者、軍、教会、スト破りの労働者の労組とファッショ化するグループ、三六年六月は、保守的な陣営の強行軍への再構成によってマークされた。力関係は、一挙に倒れなかった。三七年二月に、新資本家層は、『新しい雑誌』を発表した時、管理職層の間に、彼らの影響力と技師層は、無視できなかった。カトリック教の小グループは、右翼での彼らの距離を保持した。この力関係の決定的な要素、労働者の戦闘性は、消されなかった。ドリオが、自由戦線を創設するのを要請した時、それは、つんぼの耳を作る、フランス社会党であった。この三六年夏、力関係は、不安定であった。七月一四日、それは、一〇〇万以上のパリ人たちであった。肝心なことは、労働者諸組織の政策から従属した。この最後の問題で、スペインの諸事件は、最初の答をもたらした。(六九)

六　スペインのために

政府機構は、調整されなかった。社会党員層の予想の能力は、物足りなかった。七月二〇日、ブリュメールは、スペイン政府の電報を受け取った。ブルムは、彼の同意を与えた。二三日、ブルムは、彼のイギリスの対話者たちの留保を伝えるよう意識した。大英帝国は、中立のままであったことを、ルブランに知らせた。ブルムは、困惑した急進党員層を見付

けた。コット、ゼイ等は、武器を引き渡す味方であった。ダラディエは、ためらったし、主な指導者たち（ショータン、デルボス、エリオ）は、これに反対した。社会党諸大臣は、分裂させられた。二五日、閣議は、降伏した。八月七日、閣議は、不干渉のフランスの計画と関係して、原則的答が、有利であることを確認した。公の、民間の、多くの輸出は、存在しなかった。(七〇)

ブルムは、不干渉の選択を正統化した。それは、彼が、取り戻す、イギリスのテーゼであった。不干渉の正統化は、八月七日の議決を理解するよう認めた。何も、彼が、イタリアとドイツが、フランコ体制の反徒たちに提供した、大量の援助を知ったのに、フランス政府が、全ての援助を停止するのに掛かり合うことは、正統化されなかった。彼は、ファシスト諸政府を面目を掛けて奮起させるように考えた、ナイーヴであったのか。彼は、フランスの全様式が、国際的緊張を減ずるのに貢献できたことは、考えなかったのか。問題は、諸事件が、不干渉政策の有害性を証明した後、提起されるように当然であった。(七一)

右翼で、人々は、狂喜した。左翼で、人々は、ためらったし、分裂した。共産党は、政府の政策で、党の同意を宣言した。共和派的スペインで、政治的連帯は、確認された。党が、主導権を取る、最初の募金は、七月末から始まった。党指導部は、人民戦線の勢力の結合された活動の可能性を信じた。七月一九日、党指導部は、連帯委員会の準備を助けた。その慎重さは、コミンテルンの中で、進行中の討議を反映した。八月末で、国際旅団を構成するよう、議決は、取られた。国際的不安は、フランス内政の強制について勝ち取ったし、政府の政策について、批判は、増加した。スペインに、ファシスト政府、及びそれは、その結果、倍加させられた、ソ連邦の安全保障を反対する脅威であった。共産党の政策は、ソヴィエト外交のたゆまぬ歩みを組した。急進党でーコットとゼイの干渉主義のグループは、孤立されたー、内政の不安は、不在ではなかったし、不干渉について、急進党の猛攻を説明した。急進党指導者たちは、全ブルジョワジーの圧力を反映した。下劣な戦線で話すし、『人民戦線よりむしろヒトラーで』大声で叫ぶ、ブルジョワジー。彼らは、社会革命の全過程

に反対して、人民戦線連合の中で、最後の砦を目撃した、このブルジョワジーの分派の感情を表した。スペインに、状況は、違っていた。急進党の同等のものは、存在しなかった。社会党（ラルゴ＝カバレロ）は、左翼で向けられた。社会党は、極左で、フランスの状況を特徴付ける、少数派でなくて、マルクス主義統一労働者党と無政府主義者たちの密集した諸勢力で、防備をさせた。内戦の力学は、社会革命の過程を覆うことは、明らかにした。スペイン人民戦線の勝利は、フランスのためにこの伝染性の過程を表現するように、及び急進党員層が、立てる、防壁を勝ち取るように危険を冒した。スペインの経験で、単純な事実は、同じ結果を帰着するように危険を冒した。急進党員層は、干渉を妨げるため、全手段を利用した。社会党で、状況は、コミンテルンが、不干渉に反対して、態度を決めただけ一層多く複雑であった。社会党は、理解されなかった。フォールとセヴェラックの周りに、フランス支部の機関は、不干渉政策を支えた。社会党戦い派で、ジロムスキーは、干渉主義者であった。彼は、少数派であった。ブルム主義者たちにあって、全員一致ではなかった。オーリオール、モックとラグランジュは、不干渉に反対した。オードリは、出港停止の解除を要求したのに、革命的左派で、ピヴェールは、労働者階級の直接行動を強く勧めたし、不干渉を承諾した。極左は、全員一致ではなかった。トロツキー主義者たちは、罪を犯した封鎖の解除のため戦った。無政府主義者たちは、分裂させられた。無政府主義同盟は、不干渉を承認することで始まった。革命的サンディカリスト系労働総同盟は、七月三一日から、出港停止の解除を要求した。総同盟に対して、問題があった、問題は、明らかにしなかった。ジュオーは、不干渉を嘆いたし、共産党員層は、彼を支持した。ジュオーの態度の決定は、旧同盟派の平和主義の翼が、議決の中で、重きをなしたのか。それは、総同盟の共産党の植民化に反対して、闘争するように意思があった。スペインは、欠陥を大きくすることはできた。それは、不一致であった。人権同盟で、干渉主義の政策のため傾いた、バッシュは、完全平和主義者たちに反対した。反ファシズム知識人監視委員会について、討論は、三六年六月の大会の時、スペインに内戦が、突如起こった前、重大な危機に理由を与えた。相違は、平和主義とともに、反ファシズムの色々な構想とともに係かった。少数派の、共産党の、共産党に同調する加入者

たちは、指導する機関を離れた。同じ区割は、スペイン戦争について、再び現れることは当然であった。平和主義の多数派の内部に、流れは、不干渉を非難した。テーゼを裁決するため、国民投票は、必要であった。出港停止の解除の支持者たちは、勝ち取った、それは、三七年七月の社会党大会を確認した。二、〇二六対一、二五〇の委任。[七二]

七月から、連帯の具体的活動は、発展した。冶金連盟は、募金を発した。ルノーで、一六万四、〇〇〇フランは、二か月で、集められた。下部組織で、連帯の努力は、軍事的援助の形態を取った。共産党の責任者たちは、この提案を戦った。連帯の活動は、多様な面を取った。スペインのため、社会党行動委員会の、自由スペインのための委員会の設立で、及び三七年四月に、共産党によって準備で、連帯の活動は、増大した。数千人の義勇兵たちは、スペインに戦うよう出発した。[七三]

肝心なことは、国際旅団の創設を期待しなかった。国際旅団を形成するよう、コミンテルンの議決は、八月で、取られたし、フランスに、約束の名簿は、九月の間、細胞の中で、通った。政治的及び軍事的枠は、九月から、起きていた。旅団のため、募集された最初の構成要素は、一〇月半ばで、到達した。全義勇兵は、利用できなかった。二〇％のかすが、いた。彼らは、国境の前に、除去されなかった。共産党活動家たちの四〇％－五〇％で。旅団主義者たちで、別の政治的組織によって、配置された編成単位の内部に、戦う、人々を付け加える必要があった。小さい革命的サンディカリスト系労働総同盟の戦闘員たちの定員数は、評価するのに困難になった。そのような動員は、スペイン戦争が、フランスの左翼の内部に、及び労働者階級の中で、引き起こす、連帯の異常な飛躍によって理解され得た。[七四]

連帯の線は、僅かの事柄を表した。ドイツ、イタリアから到着した、武器、兵士及び弾薬で、見るべき何もなかった。フランス政府は、この緩められた不干渉で発送した、武器は、どうなっていたのか。人々は、軍事的機器の最小限を通過させるのに全力を尽すことは、正確であった。結果は、貧弱であった。コットは、フランコ体制派によって倒された、二〇〇のフランス飛行機の数字を異議を申し立てた。引き渡された機関の全体は、格付けの高過ぎた集団に所属した。[七五]

いずれにせよ、スペイン事件は、人民戦線連合の内に、最初の欠陥を導いた。共産党員層は、欠陥を広げるよう用心し

た。一二月五日、彼らは、投票を棄権するよう留めた。下部組織で、圧力は、強くなされた。別の分裂は、最初の分裂に付け加わった。八月一九日、モスクワ訴訟は、始まった。一六人は、銃殺された。三七年一月、新しい訴訟。フランスに、社会民主主義は、猫背を作った。ブルムは、被告たちの告白を驚いた。バッシュは、決議を提案した。トロツキーは、彼の調査に事を行うよう要求した。フランス知識人たちの名簿は、重要であった。人民戦線連合に、外交的強制は、勝ち取った。不安は、居を定めた。人民戦線は、バルセロナで、五月の諸事件で、再現した。スターリン主義者たちは、無政府主義者たちの及びマルクス主義統一労働者党の活動家たちの都市を掃除するよう維持した。数千人の死者が、いた。労働者党は、解散された。(七六)

七　最初の亀裂

スペインの夏は、雰囲気を重くした。夏、秋は、労働者の圧力と内政について、左翼の大きな組織の行動の中で、重要な変化をもたらさなかった。トレーズは、一〇月三〇日、人民戦線綱領の大多数の点が、実現されなかったように嘆いた時、それは、労働者の動員を要請するようなものではなかった。八月六日から、彼は、彼の解決法を提案した。社会党員層は、フランス人戦線の提案に反応した。(七七)

社会党指導者たちの政策は、諸階級闘争の方向に向けなかった。政府は、九月二九日、平価切り下げを決定したし、承認させた。平価切り下げの目的は、輸出を発展させるように、及び企業の活動の推進と経営者の投資の再開を認めるように与えられた。工場占拠によって、精神的ショックを与えられた経営者が、再調査する決心をしたため、提供された補充の幅が、足りなかった。ブルムが、急進党の圧力の下に、法案の中で、スライド制の登録を断念して、サラリーマン層は、人々が、彼らに、平価切り下げによって、賃金の値上りを取り戻すように願う感情を持った。物価は、急速に増加したし、

購買力の値上りの一部を切り取っただけ一層多く。議会で、人民戦線の多数派は、鈍く反対していた。急進党員層は、多数派が、彼らの選挙民の一部、職人層と小商人層について、消極的反響を持つよう恐れた。共産党員層は、『金持ちに支払わせる』という、財産について課税に助けを求める方がよかったように考えたし、多くの社会党員層は、半ば説得されるべきであった。お互いは、平価切り下げを可決するに至った。それは、最初の困難な投票であった。反対は、二二一票、多数派のため、三五〇票だけ。議会の外に、それは、結局、社会的レヴェルについて、政府が、九月から、取り戻す、ストに反抗するだけ一層多く着手された、民衆的信頼であった。一〇月三日、三〇以上のホテル、カフェのスト参加者たちは、追放された。七、二五〇人の巡査は、武力を持って、労働者層を立ち退いた。革命的左派は、動揺した。社会党指導部は、フォールの声によって承認した。当時の不安は、急進党員層を安心させることであった。六月のストによって、スペイン戦争によって揺り動かされた、急進党は、人民戦線への参加に反対して、新しい攻勢を立ち上がるように見えた。(七八)

一〇月二三日、ビアリッツで催される、大会で、それは、ダラディエで、反対する、四つの違った起源の流れであった。カイヨーの後ろに上院議員たち、ノール県の強力な連盟とそのリーダー、ロシュ、南の多数な連盟、そして急進党青年同盟。この攻勢に直面して、ケイジェルは、人民戦線のため、三七の連盟によって、慎重な議事日程を記入させた。これらの連盟は、大きいのではなかった。環境は、緊張した。カンパンシィ、次いでダラディエは、言葉を遮ぎられた。急進党の大立者の大部分は、選挙民の前に、再出場するのが、欲しくなかった。議会の解散は、政府連合の分裂の論理的結果であった。大会は、徹底的に急進的であった。大会は、全員一致の動機で終わった。(七九)

右翼と経営者に、協調的な態度に仕向けるどころか、政府の譲歩は、もっと無礼にさせた。ストは、極右の重要な影響力に衝突した。共産党が、アルザスに、集会の巡業を予測した時、政府は、これらの集会の安全を保障するように不可能さの中で、意思表示をした。右翼の新聞は、新しい標的を見付けた。九月から、新しいマティニョンの展望は、三者間（経営者－労働総同盟－政府）の、及び討論の要点が、義務的な仲裁の周りに、推移する、集会の中で、取り組まれた。九

月二六日、経営者総同盟は、消極的な返事で戻った。仲裁は、新しい侵蝕のように多くの経営者に対して、明らかになった。圧力は、存在しなかった。彼らは、高らかに話したし、政府から新しい譲歩を要求するのに強制された自分を評価した。六月に、経営者層は、占拠が終わるため署名するはずであった。一一月に、占拠は、彼らが、署名するため終わるはずであった。ブルムは、記録したし、法を届け出るはずであった。一二月三一日、発布された、法は、各県の中で、経営者総同盟と労働総同盟の代表者たちで形成された、協調の同数の代表から成る委員会を制定した。もし判決が、義務的になるならば、いかなる制裁は、人々のため予測されなかった。古い組合の保管は、不平を言うのであった。(八〇)

国際関係の領域の中で、状況は、封鎖されたままであった。八月、シャハト博士の訪問にも拘らず、仏独接近は、目立つようにならなかった。三七年一月、それは、フランスの方に一歩をなす、ムッソリーニであった。ブルムは、用心したし、答えなかった。ソ連邦で同盟か。ブルムは、ゲームが、骨折り損である、その結論を引き出した。主導権は、イギリスに気に入らなかった。ベルギーの側で、それは、動き出した。八月から、ヒトラーは、二年で軍役をもたらすよう決定した。フランスの軍隊の再軍備は、議事日程であった。軍人たちは、予算の一部が、九〇億フランであるよう提案した。九月七日、一四〇億フラン。ドゥ＝ゴールは、三四年から、注目された書物を公表した。ブルムは、彼を、一〇月一四日、召集した。人々は、マジノ線を改良した。この対外政策の萌芽は、右翼で、寛大で見付けなかった。寛大は、左翼で、人々を満足させなかった。平和主義者たちと反軍国主義者たちは、抗議した。反ファシズム知識人監視委員会の事務局は、武装化措置に反対して、決議を可決した。共産党指導部は、満足しなかった。スペインが、存在した。共産党員層は、政府へ信任を投票するよう棄権した。国で、三六年一二月三一日、ブルムが、送付した、誓いは、楽天的であった。三七年の最初の週から、政府は、別の困難に直面された。第一の困難は、もし平価切り下げが、彼らの利益を安心させたため、企業に認めたならば、労働者層は、日毎に、彼らの購買力を減らすように見えた。幾つかのストが、存在した。建築の中で、ストは、博覧会の開館を危くした。ブルムは、赴いた。博覧会は、五月二四日、開き得た。(八一)

右翼の側で、それは、開く、別の戦線であった。一〇月一〇日の政令は、三つの県に、アルザス＝ロレーヌの特別の地位に対して、この措置を広げた。政令は、一五歳で、就学をもたらした。教会は、宗教上の教育について、消極的な判断の表現を見るような振りをした。右翼は、特別の地位を廃止するようこの注目を呈示した。社会党は、国民投票を提案した。政府は、意図を持っていなかった。左翼諸政党の古い要求が、問題であった。要求は、世俗の戦線の政綱の中で、画かれていた。地位の廃止は、人民連合綱領の中で、画かれていなかった。ブルムは、意図を持っていなかった。彼は、国民投票を展開させるままであった。政府の計画は、忘れさせた。時間は、カトリック教の位階制度を調整させるため、努力の増加のものであった。世俗の勢力範囲の核は、危機中であった。それは、教会と国家の分離以来、それに赴くのに最初の首相であった。(八)

経済的場について、右翼と経営者に、譲歩は、はっきりと具体化された。二月一三日、ブルムは、官公吏に対して、ラジオで答えた。三月六日、彼は、国防のため新しい借金を知らせた。クーポンは、フランに、ポンドに、ドルに返され得た。資金の保持者たちは、貨幣の変動を避けて、彼らの金を見た。労働者層は、スライド制を拒否するように見えた。専門家委員会は、為替相場の平等化の資金を監督するため配置された。休止、二月二三日、サン＝ナゼールで、ブルムが、説明した、それは、その内容なしで、その同意なしで、資本に対して要求することではなかった。共産党は、借金を可決し、休止は、党に、気に入らなかった。社会党の中で、反響は、直接ではなかった。全国評議会は、不意を突かれた。二月一四日、休止について、ブルムの宣言の翌日、評議会は、集まった。内政について、革命的左派は、フォールの動機を反対した。七〇二対四、六四二票。スペインについて、それは、孤立される、ジロムスキーであった。九〇二対四、二二一票。夫婦仲は、左派と党指導部の間に、険悪であった。二月二八日、ピヴェールは、政府の職務で辞任した。(八)

三月一六日、それは、クリシィの銃撃戦であった。社会党は、クリシィで集会を催させるよう予知したし、デモを加わるのを要請した。デモは、警察力に衝突したし、銃撃戦は、突如起こった。ブルュメールは、警察によって、重傷を負っ

た。ドルモワ、ブルムとトレーズは、赴いた。六人の死者と二〇〇人の負傷者が、いた。不安は、激しかった。左翼で、反応は、弱いままであった。労働総同盟系組合同盟は、三月一八日のため、半日のストを宣言した。ストは、大量で、活動的であった。ブルムは、辞職するよう話した。人々は、思い留まらせた。全国評議会は、革命的左派に反対する攻撃を、議事日程に元に戻した。ピヴェールは、屈服した。左派は、解散した。政府は、署名された団体契約が、六か月で延期されるよう提案した。経営者総同盟は、受け入れたし、労働総同盟は、職と解雇を規制する、法の可決に対して、同意を条件付けた。政治的中継は、欠けていた。(八四)

右翼は、左翼で、増大する混乱を感じた。右翼は、財政的戦線について、攻勢を取り戻した。大量の金の流出、短期国債の売却、資金の奇妙な動き。取引は、産業諸部門の中で、上級官公吏層の恐れを知らぬ眼の下に、相次いだ。六月一四日、三人の専門家は、辞職した。一五日、金庫は、四億七、四〇〇万フランが、存在した。右翼は、人騒がせなキャンペーンを引き継いだ。急進党員層は、このキャンペーンに無関心ではなかった。一五日、ブルムは、財政問題について、全権を要求した（七月三一日まで）。貸付金の再建、取引の管理、新課税の五〇億フランと所得について課税の再建、相続について課税の値上り、郵便、鉄道とタバコの料金。それは、半ば日和見的態度の綱領であった。投機的、貨幣的取引の通知は、右翼に、抗議の叫びを突如開始した。別の措置は、労働者層の購買力に非難した。共産党は、棄権に傾くように思われたし、特別の全権を可決した。全権は、議会によって、採択された（三四六対二四七票）、上院によって、拒否された（一八八対七二票）。政府は、解決法を検討した。議会を可決するようやり直すのか。議会の解散を宣告するのか。上院の同意が、必要であった。国民投票の再選を希望しながら、人民戦線の全選挙者を辞職させるのか。急進党員層は、反対していた。いずれにせよ、人民戦線の、急進党の方向で、別の解決法は、事実であるのか。討論の間、モックは、ブルムで、ノートを検討を受けた。ピヴェールとジロムスキーは、上院の前に、大衆的デモを要請するのに準備させた。議会は、七三日間に、一三三の法律、一日二弱の法律を成立させた。六月二一日、午前三時、ブルム政府は、辞職した。(八五)

スペアの色々な政府の解決法は、社会党の最初のリーダーに依存した。社会党は、議会に対して、政府を代表させるように選び得た。社会党は、急進党の方向で、政府を居を定めさせ得たし、政府に参加しないで、それは、ピヴェールの立場であった。ブルムは、既に選んだ。ショータン政府であったし、社会党は、政府に参加した。その政府は、党を納得させるのに苦労したし、社会党の参加に対して、ある数の条件を置くよう受け入れるはずであった。政府は、ブルム政府を戦った、政治家たちを誰も含まなかった問題、及び政府は、人民戦線の完全な実現を追求した問題。この値段で、ブルムは、ジロムスキーとピヴェールに、一、三六九票に反対して、一、三九七票を手に入れた。政府の構成から、条件の一つは、公然と犯された。人々は、公共事業相に、キュイユ、及び平価切り下げを戦った、大蔵相に、ボネを政府に見出した。ボネの影響力は、第二の条件が、尊重されないよう保証した。人民戦線綱領の完全な実現が、存在しなかった。七月一〇日、マルセイユで催される、社会党大会で、討論は、新たな展開を見せた。革命的左派は、社会党諸大臣の辞職を要求した。社会党戦い派に対して、ブラックとジロムスキーが、提出する、動機は、曖昧さを涵養した。ショータン政府は、人民戦線の後退のように特徴付けられたし、戦い派は、社会党諸大臣の辞職を要求しなかった。最後の投票は、党指導部の弱さを表した。ブルムーフォールの動機に対して五四％、戦い派に対して二九％、左派に対して一六％。社会党員層の分裂は、ショータン内閣の現実の基礎を徐々に蝕むのに貢献した。内閣は、共産党の支えの恩恵を浴したし、内閣は、その公認の時、人民戦線の票の全体を受け取った（三九二対一四二）。組合の側で、ジュオーは、控え目であった。監視委員会の大会は、大会が、真の人民戦線政府として、現実の政府を考察しないことを、明確にした。ショータンは、彼が、希望する、右翼から、一時的沈静を手に入れたか。提案された財政的措置が、ブルジョワジーの願いを綜合して、彼は、それに専念した。大土木事業に対して、予知された信用の減少。上院は、全権を与えた。一時的沈静は、弱い期間であった。議会で、レイノーは、財政的立て直しの計画の失敗を予言した。右翼の新聞は、攻撃を倍加した。九月一一日、二二時一五分で、二つの爆弾は、パリで、爆発した（第一の爆弾、経営者総同盟の本拠、第二の爆弾、冶金鉱山工業同盟の本拠）[八八]。

カグール団の試練、それは、王党派闘士団の一七番のグループであった。闘士団は、長続きされた。導火線、それは、三四年二月、権力が、手の届く所にいたのに、A＝Fは、危うく損ねた感情であった。反乱は、起ころうとしていた。人々は、老人たちであった。三六年五月一八日、それは、全国革命社会党を創設する、この核であった。党は、六月一八日、解散した諸団体の間、画かれていた。七月一日、全国革命行動秘密組織は、創設された。その組織は、軍隊の中で、部門、防衛行動委員会同盟を自由にした。ヴェールは、その組織に立ち上がった。カグール団の現実は、何であったか。一二万の人々。ブリュメールによれば、五万。カグール団は、軍隊の中で、支えと組織網を自由にした。団は、金で不足しなかった。団は、ムッソリーニとフランコの諜報部が、貢献するだけ一層多く強力な装備を蓄積できた。ドゥロンクルらは、苦し紛れの直進を選んだ。戦闘グループは、一月一五日から一六日までの夜のため、動員された。軍隊は、動き出さなかった。午前四時で、作戦は、招待を取り消された。動員に固有な逃亡は、分断と安全の規則を四散させた。超非合法的組織は、弱いことが明らかにした。その組織は、ドルモワの警察によって、解体された。事件は、全新聞の関心事を作った。(八七)

一〇月一〇日、県会議員選挙は、起こった。その選挙は、国の中で、力関係が、人民戦線の考慮しているように確認した。右翼に三〇七万八、八五八票に対する、四五八万三、五四二票。共産党は、七四議席を獲得した。社会党、七一議席、急進党は、七九議席を失った。共産党は、急進党の選挙民に食い込んだ、社会党の選挙民に食い込むように続けた。人民戦線は、進展した（三六年五月に、五五％から五九％まで）。(八八)

ショータン政府は、右翼の厳命に従った。数か月、多くの計画は、消滅した。アルジェリアのため、ブルムーヴィオレット計画は、引き出しの中で留まった。人民戦線の植民地政策は、約束の裏切りではなかった。植民地問題に関して、人民戦線綱領は、注目すべき節度であった。ヴィエノは、シリアとレバノンの独立を宣言した。セネガルに、持続的政策は、同化主義の構想で代表的であった。政策は、二つの点に基礎を置いた。三七年三月一一日の政令は、組合権を制定した。七月二三日の政令は、存在した。フランスの国籍は、取得の様式が、弱気であった。インドシナに、人民戦線政府は、部

分的特赦を可決で始まった。国民的独立は、問題ではなかった。社会党指導者たちは、会議のための運動に反対した。三七年二月に、運動は、禁じられた。組合権を創設することが、問題ではなかった。三七年初め、ストの動きは、拡がった。大失敗は、マグレブで敏感であった。テュニジアに、シリアとレバノンの独立への達成は、大きな希望を引き起こした。植民地の右翼は、狼狽した、政治的状況は、緊張した、偶発事は、増加した。モロッコで、三七年一〇月、ノゲース将軍は、暴動を鎮圧した。一〇月二九日、モロッコ行動委員会は、解散されたし、指導者たちは、投獄に投げ込まれた。アルジェリアのブルジョワジーのエリートの方に指導された、政府は、フランスの市民権を与えるよう予知した（二万一、〇〇〇人）。そのようなものとしては、北アフリカの星の、主な指導者ハッディの意見ではなかった。三六年八月に、イスラム教大会の機会に、彼は、同化主義の多数派に対立した。三七年一月二六日、北アフリカの星は、解散された。星の解散は、抗議を引き起こした。彼は、人民連合全国委員会によって、理解を要求した。それは、共産党が、解散を支えることであった。解散は、党を配列した。党は、ドリオと共謀で非難された。ブルムーヴィオレット計画の合法性で、植民者たちを説得させるのに、足りなかった。この計画は、アルジェリアのフランス人たちの憤慨を引き起こした。市長たちの会議は、全員一致で、計画を拒否した。星の解散は、何とも仕えなかった。[八九]

植民地の事実から当然、社会党員層が、持った、理解は、植民地化が、正統化された、考えに基礎を置いた。この基礎的考えについて、漸次的移行は、存在したし、その結果は、政治的諸問題について経済的諸問題に与えられた、優先権であった。ムーテの保護の下に、取られた社会的措置は、位置付けられた。反高利闘争、飢餓の告発、労働の団体契約、最小の賃金等。これらの不安は、フランス－植民地という関係の構想の中で、挿入された。提案された社会的措置は、原住の大衆の購買力、及び諸植民地の購買力を増加するのに狙った。この見地の中で、政治的レヴェルの措置は、無期延期に延期されたし、諸植民地に政治的自由に関して、政府の行動の総括は、無効であった。[九〇]

何を、この政府の政策の社会党員層は、考えたのか。諸連盟は、均質ではなかった。ピヴェール主義のモロッコ連盟は、

勇敢に戦った。反対に、チュニジア連盟は、同化主義のテーゼを発展させた。アルジェリア諸連盟は、動揺した。マルセイユ大会の動機が、それを証言するように、社会党の大多数派は、改革と要求を想起させるのに満足した。少数派は、反植民地主義の立場を防衛した。(九一)

三七年の夏を通過させられた、それは、社会的緊張であった。ストは、百貨店等の中で、発展した。ファシスト諸グループは、騒ぎ出した。再開は、六七三賛成票、四八八反対票、八〇〇棄権によって可決された。社会党は、分裂させられた。ピヴェール主義者たちは、ストを支持した。それは、公共事業の最初のストであった。ショータンは、ためらった。彼は、交通機関のストを破壊するよう試みた。動員の前に、彼は、後退した。彼は、公のアピールを発した。労働総同盟は、受け入れた、経営者総同盟は、自分が受け入れる用意があると表明した。急進党員層は、キリスト教労働者同盟を招待するのを嫌った。団体契約は、二か月で延期された。ショータンは、議会の信任票で必要とした。一月一四日、議会の前に、彼は、宣言した。ラメットは、共産党グループの宣言を読んだ。彼は、スライド制等を想起させた。共産党員層は、棄権するよう決定した。ショータンの返事は、激しかった。宣言は、共産党を、人民連合から拒否するのに帰着した。社会党グループは、集まった。グループは、共産党が、多数派に参加しないように、彼の意図を宣言したように確認した。グループは、政府の社会党メンバーたちが、グループに、彼らの協力を維持できないことを決定した。一五日午前で、ショータンは、辞職した。(九二)

第三共和制の議会の伝統に合致した、あわ慌しい動きは、始まった。ルブランは、新政府を形成するようボネを委任した。急進党諸閣僚の一人に話し掛けながら、彼は、内閣の構成を狙った。社会党は、参加、支持、棄権を与えなかった。社会党グループの反対投票で、内閣を構成することは、右翼に支持を求めるように必要となった。急進党グループは、そのような状況を引き受ける用意ができなかった。そのグループは、人民戦線の解散の責任をもたらすよう恐れた。ボネは、拒絶したし、ルブランに、二つの解決法を知らせた。同盟の、社会党員層から穏和派までの政府。二つのケースの中で、

ブルムは、話し掛ける必要があった。ルブランは、ブルムに新アピールをした。アピールは、第三の方式を提案した。トレーズからレイノーまで、進む、国民連合政府。ルブランは、ブルムに反論として立てた。ブルムは、この疑問を記録したし、エリオに懇願しに行くよう受け入れた。エリオは、意見表明を回避したし、ブルムは、彼の計画を実現するよう試みた。困難は、共産党からやって来なかった。それは、フランス人戦線の政策ではなかったのか。政治局は、明確にした。右翼は、ためらった。レイノーは、主導権に掛かり合わないように願った、マランの参加を手に入れるよう試みた。ブルムは、この拡大について、留保されたように思われた。彼は、彼の計画を断念した。並んで、彼は、人民戦線政府を形成するよう試みたのか。彼が、急進党の側であばくように信じる、共産党の参加に対して、抵抗を前面に押し出しながら、ブルムは、断念した。ショータンの方に、ルブランは、逆転した。三八年一月一七日、社会党全国評議会で、三つの動機は、対立した。ピヴェールの動機は、国民連合の企てを非難した。ジロムスキーの動機と同様にピヴェールの動機は、ショータン政府で、参加と支持を拒否した。フォールーブルムの動機で四、〇五三票に対して、ピヴェールは、一、四九六票を、ジロムスキーは、二、六五九票を手に入れた。参加と支持は、除外された。それは、党の機関の資源を過小評価することであった。常任執行委員会の、議会グループの構成された委員会は、状況を検討するように負担させられた。その委員会は、二つの本文で戻った。ピヴェールによって、提出された、本文は、参照と支持を除外した。グラツィアニィによって、提出された、別の本文は、参加を排除した。党指導部は、不参加を受け入れた、交換に、ジロムスキーは、支持について譲った、ピヴェールは、結局、孤立された。第二次ショータン政府は、一月一一日、五〇一対一票、一〇三票の棄権によって授与された。三月九日、ショータンは、財政的及び経済的健全化の綱領のため、全権を要求した。社会党グループは、ショータンの綱領を考察した。彼は、退場したし、彼の国民連合の計画を断念しなかった。党指導部は、安定的政府を賛成した。三月一二日、全国評議会の意見が、必要となった。ブルムは、二か月前よりもっと多くの切札を自由にした。評議会の前日、それは、併合であった。ヒトラーは、オーストリアを占領した。国際的状況のデータは、政治的勢力に重き

をなした。労働総同盟は、ブルムは、公安政府を形成されるよう要求した。評議会の前、ブルムは、彼の神聖連合の提案、及びドゥーメルグの、ポワンカレの国民連合を識別するのに専念した。ブルムは、詳細に入るように必要を感じなかった。討論は、短った（三〇分）。動機は、六、五七五対一、六八四の委任によって可決された。ジロムスキーは、賛同した、ピヴェールは、単独であった。[九三]

いずれにせよ、議会の右翼を説得するのは、事実であった。その右翼は、数か月以来、政治的生活の中で、その影響の一部を見出した。この再起の理由は、多様であった。第一の理由は、極右諸団体が、三四年後、役割を演じなかった。ある数の団体は、解散した、A＝Fのように弱くされた。ドリオの人民党は、足踏みした。フランス社会党は、党の過去を追い抜くよう試みた。党は、二つの表を失った。党は、街頭の中で、獲得された合法性で放棄した。別の右翼の勢力は、議会の、国政選挙の解散を要求するのを用心した。人民戦線連合の内部に、現れる、亀裂は、同盟の問題に対して、行動の自由を再び与えた。人々は、右翼の側で、急進党員層と可能な連合に対して、夢を見始めた。それは、伝統的諸組織であった。諸組織は、人民戦線を作るのにもっと適した。ブルム政府の崩壊後、議会の組合せは、議事日程を返した。右翼の議会の対立は、多様化された。人々は、九以下の議会グループを数えなかった。二つの勢力は、現実に数えられた。三三年以来、フランダンが、主宰する、民主同盟、マランが、二五年以来、主宰する、共和連盟。民主同盟は、大きな自由党であった。急進的右翼で、共通点は、多様であった。急進党員層で、ドゥーメルグ、フランダンの下に、民主同盟は、舟の舵を取った。同盟の戦略上の展望は、明らかになった。彼らが、集産主義者たち、社共党員層を分離される、急進党員層を手に入れたこと。同盟は、フランス社会党の善良な外観の下に、極右諸団体について留保された。フランダンの組織は、均質ではなかった。左翼が、右翼が、いた。中央で、フランダンは、仲裁した。分裂された、民主同盟は、国の中でよりもっと議会で重きをなした。マランが、指導する、共和連盟は、国の中で、よりよい中継を自由にした。加入者たちの数字は、膨らんでいた。三八年七月、三〇万。連盟は、六九の県の中で居合わせられた。連盟は、聖職者のフランス

を代表した。連盟は、産業封建制の表現であった。最後に、第三の特徴、マランードゥ＝ヴァンデルのカップルが、具象化する、全国的不安。三つの構成分子の同居は、衝突をなされた。聖職権主義者たちは、キリスト教－民主主義者という流れのサイレンに対して、敏感であった。大地主層は、彼らの民族主義者の態度の表明を忘れていた。民族主義者たちの確かさは、彼らに強力な国家で夢を見させられたし、彼らは、極右諸組織の近さで何とか都合を付けられた。二つの組織の方に、ブルムは、彼の国民連合政府を提案するため、向きを変えた。(九四)

三月一二日の午後から、ブルムは、彼の住所で、主な右翼指導者たちを集めた。審議の後、指導者たちは、ブルムに、その内容が、彼らに、共産党の参加と相容れないように見えた、彼らが、綱領について、公安政府に参加する用意ができるよう答えた。それは、否であった。メモの中で、右翼諸政党の指導者たちは、ブルムに対して、一連の問題を提起した。ブルムは、右翼の国会議員たちの前に、それに答えるよう提案した。彼が、防衛を準備するように不可避性を想起した時、彼は、ヒトラーとムッソリーニで構成する必要があるように考えた、右翼の代議士たちの人々を心配させた。彼は、彼が、平和政策を繰り広げたように想起した時、彼は、抵抗者たちの陣営の中で、確かさについて疑問を引き起こした。彼が、演壇から降りた時、ブルムは、説得したように感情を持っていた。彼は、右翼の指導者たちが、解決法に有利であるよう評価した。政府に対して、唯一の共産党員が、いた。それは、古い社会愛国者、カシャンであった。レイノーは、ブルムが、彼に、四〇時間法の修正と生産の促進に関して、重要な鎮静を提供したように保証した。ブルムが、右翼の代議士たちに話を掛けた時、彼は、別の保証で提供した。一五二対五票によって、右翼は、彼の提案を拒否した。レイノーの、マンデルの、人民民主派の支持にも拘らず、ブルムは、この拒否の理由を予感した。右翼が、よく理解する、問題は、戦争の努力に結び付けられた、経済的措置が、労働者階級の犠牲によって取られ得ることであった。ブルムは、穏やかな厳しさの人間であり得た。どのように、不確実な共産党で側面で守られた、彼は、対立を含む、状況の人間であり得たのか。右翼は、国民連合に反対していなかった。ペタン元帥の名は、既に通った。テタンジェは、彼が、公安政府を責任を引き

受けるよう提案した。ブルムに対して、今や手遅れであった。右翼に対して、それは、早かった。三月一三日、ブルムが、その政治的構成が、三六年五月の政府の構成に同一である、政府を形成した。社会党員層、急進党員層と社会主義共和同盟。[九五]

議会の駆引きの数か月の間、国際的緊張は、急激に信じ込んだ。ムッソリーニは、ヒトラーに接近した。三七年一一月六日、彼は、反コミンテルン協定に加入した、一二月一一日、彼は、国際連盟と縁を切った。一一月に、ジュオーは、スターリンを出合った。二月四日、政令は、ヒトラーに対して、軍隊の指揮を預けた。二月二五、二六日、議会で、フランダンは、フランスの、ドイツの青少年が、手を緊張する用意ができるよう宣言した。三月一一日、ヒトラーは、オーストリアを併合した。ショータンは、数時間後、辞職したし、自由放任のイギリスの決定は、干渉の軽い気持に対して、打ち切った。投票で信任された、ブルム（第二次政府）は、三月一五日、国防上級委員会を召集した。最初の点は、併合の延期の中で、位置付けられた。いかなる直接の援助を、ダラディエは、答えた。われわれの国境に、ドイツの軍隊を動員しながら、間接の援助。状況は、重大化した、第二の点、スペイン。集会の調書は、はっきりしていた。ブルムは、抵抗の陣営の中で、過ごさせるように思われた、及びそれは、外相で、ボンクールによって、デルボスの取り替えを説明する問題であった。余り遅かった。軍人たちを説得するため、余り遅かった。スペインのため、余り遅かった。ブルムは、国境を細目に開けるよう決定した、及び数日に、数十トンの装備（ソヴィエトの）は、国境を通った。軍事的状況は、ひっくり返さないことができなかった。フランコ体制派は、四月一五日、地中海に到達した、及び共和派的領土は、二つに分けられた。[九六]

内部の戦線について、団体契約は、三八年六月、期限切れで達した。経営者は、団体契約を更新するよう拒否した。ブルムは、妥協を試みた。労働者層は、残業の不払いと国防に結び付けられた企業のため、四五時間への復帰を受け入れるはずであった。経営者層は、賃金の増額を同意した。労働総同盟は、この提案を受け入れた。航空機産業の経営者とエン

ジンの業界組織は、四五時間に通過を拒否した。四〇時間法を告発した、経営者層は、彼らが、モデルの研究の局面から外に出なかった、及び量産が、始まらなかったように説明した。彼らは、四〇時間という労働者層を働かせることはできなかった。何に、彼らに四五時間を仕えたのか。妥協は、失敗した。パリ冶金の中で、語調は、上がった。スト中。一般化は、共産党指導者たちの意図の中で、引き起こさなかった。四月六日、四万のスト参加者たちが、いた。一三日、一六万と一七〇工場は、占拠された。テストは、元気であった。ゼネストに回転できる、一般化は、元気がなかった。二五―二八日、トロツキー主義者たちとピヴェール主義者たちは、ストの動きの組織に貢献した。拡大の現実は、地方的組合の幹部層を経験した。社会党で、ブルュメールは、二六日、冶金同好会の指導者たちを召集したし、彼らに、もしストが、終わらなかったならば、『ブルムは、出て行く、あなたは、ペタンといる』よう宣言した。ストは、三六年六月の誤った外観で、足踏みした。壁に赤旗で、占拠された工場が、いた。要求は、異なったままであった。連帯は、弱く行使された。四月一三日、冶金の経営者層は、仲裁を受け入れた。ブルムは、四五時間、即ち、武器工場のため、午前土曜日の労働を創設した、人々が、四五時間に通した、仕事場の中で、七％の増額を勧告した。労働総同盟は、彼の満足を表現した。再開の諸条件は、恒久的な傷を残した。皆は、戦う結論を引っ張らなかった。それは、人々が、パリ冶金の中で、記録する、組合の定員数の最初の下落であった。(九七)

第二次ブルム政府の大きな事件は、四月四日、経済的立て直しの計画であった。その主な鼓吹者は、ボリス（官房長官）であった。彼は、ケインズを読んだし、措置は、一般理論によって、合衆国で、ニューディールの経験によって、鼓吹された。提案された経済政策は、消費の推進の上に、生産の増加と推進の上に建てられなかった。生産は、国家の干渉から得られ得た。それは、強力な再軍備政策に寄り掛かるように意義があった。ブルムにとって、歴史の皮肉か。彼は、変わった。もし彼が、国家の干渉について、彼の政策を休息させるように願うならば、彼は、選択を持たなかった。人民戦線綱領は、武器産業の国有化を予測した。ブルムは、人々が、計画化の始まりを呼び得た問題を配置した。彼は、彼の前の政

策の自己批判をした。心配は、経済の指導に関する、章の中で、しかし予算の枠に関して、明らかにした。フランス銀行は、金融市場の保護でマークされた、役割を割り当てるように見られたし、為替相場の管理は、再び導入された。共産党によって、税務の措置のある数、及びある社会的措置は、付け加わるようになった。この計画は、唯一の基盤に基礎を置いた。労働持続時間の増加。国防について働く、産業は、最初の狙いであった。論理は、全体的であった。(九八)

右翼は、構成する気分になっていなかった。第二次ブルム政府は、狩猟の大詰めであった。議会で、特別権限は、三一一対二五〇の票で可決された。賛成は、明らかにした、投票は、人民戦線の多数派のはっきりした後退を表した。議会の凋落は、始まった。三六年夏から、それは、七人の人民戦線という代議士たちであった。三六年九月と三七年六月の間、それは、一〇人であった。ショータンの下に、それは、脱党者の一団であった。特別権限について、ブルムで欠けている、六〇票は、この過程の結果であった。人民戦線の時期は、満了した。何は、上院で期待するのか。四月七日、投票の前日、ピヴェール主義者たちとジロムスキー主義者たちが、合意していた、社会党セーヌ県連盟は、街頭の中で、デモをするのを要請した。共産党員層は、このデモに参加しなかった。数千人か。一〇万人か。三〇万人か。上院を強い印象を与え得る、無。二一四対四七票によって、上院は、特別権限を拒否した。ブルムは、第二回目として辞職した。(九九)

八　苦　悩

今度は、それは、ダラディエの順番であった。ルブランによって、懇願された、彼は、受け入れたし、三八年四月一〇日、五七六対五票によって、投票で信任された。全員一致は、ダラディエが、引き起こす、矛盾する希望を表した。共産党は、彼にその票をもたらした。それは、対外政策であった。党は、党に、平和主義的サイレンに敏感でないよう信じた。党は、党が、内政に関して、外政に譲歩を支払う必要があったように無視できたのか。否(ノン)。党は、四〇時間法の領域の中

で、譲歩を作る用意ができた。社会党員層の支持は、控え目であった。九日、全国評議会は、支持の問題について一刀両断に解決しなかった。評議会は、常任執行委員会と議会グループを委任するように喜んだ。この立場は、四、三二〇対三、七六三票によって可決された。党の五三％の名において、委員会とグループは、ダラディエに支持をもたらした。右翼は、控え目を保持した。フランダンの民主同盟のように、マランの共和連盟は、信任を可決した。民主共和同盟は、棄権した。民主同盟は、分裂されたままであった。その右翼は、党が、社共両党と党の同盟を断ち切るよう望んだ、急進党は、証明しなかったように評価した。ダラディエは、選ばなかった。外務省に、ボネの影響力は、外政を希望する人々を不安にした。ダラディエ政府は、右翼に僅かに開いた。コールベル主義者たちのアピールに答えた、人々は、政府に画かれていた。彼は、社共両党の共謀で、右翼が、要求する、政策を活用できたのか。誰も、確かではなかった。両党は、内部の困難をよく知っていた。(100)

フェラと何をなすべきか＝グループは、これらの渦のような動きを触発するよう、状況ではなかった。彼らは、社会党に加入するよう決定した。彼らは、ジロムスキーの立場を支持した。社会党で、開いた危機が、存在した。四月一三日、セーヌ県連盟は、屈服するよう拒否した。一四日、常任執行委員会は、連盟の解散を宣告した。革命的左派は、連盟を指導し続けた。左派は、ためらった。コリネとゲランは、分裂と新党の創設を賛成した。地方は、控え目であった。ピヴェールは、諸県の不安を組した。ロワイヤン大会の前日、幻想は、存在した。人々は、ジロムスキーが、握り拳を置いた、ブルムの調停が、存在した、フォールが、進行したように考えた。大会は、幻想を一掃した。ブルムは、フォールを支持したし、セーヌ県連盟の解散を確認した、動機は、可決された。動向の投票について、ジロムスキーは、左派と本文を作るよう拒否した。六月四日、午前四時、宣言書は、分裂と労働者農民社会党の創設を知らせた。(101)

この混乱は、ダラディエの状況を強固にしたのか。伝統的諸党の左翼に現れる、緊張は、諸党の右翼に進展を表現するのに、諸党指導部を仕向けた、割れ目を広げないことは、望ましかった。社会的状況は、曖昧であった。静隠は、彼の諸

計画に都合のいいように見えた。冶金の中で、ストは、消した、仲裁の諸提案は、一九日、受け入れられた。仲裁の手続きの結果は、力関係の進展を表した。三八年まで、労働者層によって表明された苦情は、経営者層によって表明された苦情が、返答の百分率の恩恵を浴したのに、カーブは、六月から、逆にされた。スト全国統計表は、この印象を確認した。これらの数字は、過小評価された、人を誤らせるように思われた。状況は、地方に複雑であった。ストは、五月六日から、二二市町村に達した。このストは、ある特別の性格を呈示した。この不安定の状況の中で、ダラディエは、労働総同盟の協力と共謀を探し求めた。彼は、冶金の旧統一派の指導者たちの理解を希望できた。労働者層は、四〇時間法に執着された。彼は、経営者が、困難な状況の中であった。五月二日と二四日、公表された政令は、彼に失望した。四〇時間法の問題は、政令にとって、テストであった。このテストは、経済的と同様に政治的であった。妥協の道は、不可能のように見えたし、彼は、一刀両断に解決する義務があった。第一歩は、八月末になされた。二一日、国防にとって働く産業の中で、残業を固定させるため、政府に自由に任せた、三〇日、公表された、政令を知らせた。左翼で、反応は、敵対したし、精神的に留まった。矛盾して、激しい反応、フロサールとラマディエは、辞職した。ダラディエは、四〇時間法の再疑問視を遠くに押したのか。別の不安は、彼に懇願した。外交の状況は、危険に緊張した。(一〇一)

夏の間、騒乱は、チェコに発展し続けた。九月一二日、ナチ党大会で、ヒトラーは、チェコに影響力を要求した。一五日、チェンバレンは、彼を出合った。フランスは、チェコについて、援助条約を署名した。それは、ダラディエの不安であった。彼は、ためらった。彼は、九月二〇日、要点について降伏した。彼は、領土をヒトラーに譲るよう、チェコに要求した。九月二三日と二四日、フランスと大英帝国は、彼の要求を拒否した。二五日から、それは、降伏を提案する、フランス政府であった。チェコ政府は、譲った。九月三〇日、それは、ミュンヘン協定の署名であった。ブルジェ空港で、数千の人々は、ダラディエを迎えた。全新聞は、ミュンヘンを承認した。議会で、三五三対七五票によって、ミュンヘン協定の批准は、全国的合意の感情を強固とした。ミュンヘンは、フランスの政治的階級を分裂させられた。右翼で、民主

共和同盟と共和連盟の指導者たちは、親ミュンヘン派であった。一六人の指導者たちは、一一月に、民主共和同盟を去った。共和連盟で、ドゥ＝ヴァンデルは、窮屈であった。彼は、ミュンヘン派ではなかったし、フランスの恐るべき敗北を目撃した。極右で、A＝Fは、承認したし、フランス社会党、やはり。同社会党は、平和主義になっていなかった。ラ＝ロックは、一〇月一九日から、戦争の猶予期間のテーゼを発展させた。ドリオについて、彼は、ためらった。彼は、九月二六日から、フランダンの主導権を支持した。それは、人民党を、指導者たちの強力なグループであった。左翼で、共産党の唯一の例外で、ミュンヘンの問題は、全組織を分裂させた。労働総同盟で、ジュオーの、旧統一派の同盟は、その結果、一〇月一〇－一一日の全国的中央委員会で、ミュンヘンは、非難された。平和主義の少数派は、活動的になった。状況は、同盟の内に、緊張になった。極左は、平和主義の陣営に並んだ。完全平和主義者たちと革命的平和主義者たちは、同居した。反戦行動組合センターは、完全平和主義者たちによって支配された。宣言書は、ダラディエ政府について圧力の政策を定義した。本文は、政府に、平和の維持のため大きい努力を続けるよう要求した。革命的平和主義者のブロックは、構成された。人々は、冶金技師層の総同盟系組合等を見出した。四〇時間法の防衛のストへの支持等。ダラディエの平和の政策を管理しないように、協定は、不可能であった。予期せぬ出来事は、労働者農民社会党の指導部からやって来た。それは、ゲランらは、手を切った。社会党で、ブルムの政策は、従うべき困難であった。九月一五日まで、彼の論説は、大きな確かさであった。同日、彼は、チェンバレンの要求を歓迎した。二九日、調子は、変わった。一〇月一日、それは、平和主義であった。彼は、不批准を防衛した。全社会党のグループは、批准を可決した。表面の全員一致は、分裂を隠した。ミュンヘンの危機の間、ニュアンスは、ブルムとフォールの間に、現れた。ブルムの動揺の事実から当然、相違は、目立たないように留まった。常任執行委員会で、立場は、両立できないように明らかにした。社会党立て直しの小さい流れが、並ぶ、フォールの周りに、平和主義の分派は、組織された。ブルムについて、彼は、ジロムスキーの、社会党戦い派の協力を受け取った。状況は、統治できない党に辿り着いた。常任執行委員会の多数派は、ブルム－ジロムスキー

の立場についてであった。議会グループは、多数派に、ポール＝フォール主義者であった。急進党は、分裂させられた。ボネの周りに、平和主義の流れは、表現された。流れは、人民戦線の伝統的支持者たち（コット、ゼイ）を再編成した、エリオ、サローのような人たちまで、広がった。ダラディエは、降伏を選んだ。それは、彼を取り巻く、突然の人気であった。一〇月二七日から二九日まで、マルセイユ大会で、彼は、ミュンヘンの政策と共産党で断絶を承認させた。(一〇三)

世論の、彼の党の中で、ダラディエは、内部の問題に取り組むように自由な手を持った。一一月一日、彼は、議会グループの中で、小さい配置転換を実行した。レイノーは、大蔵省に、マルシャンドーを取って代られた。それは、四〇時間法の問題について、ダラディエが、核心の中で、一刀両断に解決するのに決定される徴候であった。レイノーは、一〇日以内で三二の政令を手直しした。政令は、一一月一二日、閣議によって採択された。三二の政令は、四〇時間法の再疑問視よりもっと広い全体を形成した。家族手当、一つ、外国人、二つ、物価、三つ、公共土木事業、六つ、財政、一二、労働立法、八つ。それは、四〇時間法に関係がある、問題であった。労働の合法的持続時間は、変わっていないままであった。三年の時期のため、残業への接近は、和らげられた。五〇時間まで、経営者に、労働監督官を知らせることは、足りた。残業の引き上げの比率は、二五〇時間のため、一〇％で引き戻された。週時間割は、五つの、六つの平日について、分配されなかった。制裁は、国防の利害の中で命令された残業の拒否の場合に予知された。解雇の補償なしで、有給休暇なしで、解雇、六か月の間、失業に記録されるように、禁止。もしそれが、闘争に仕向ける組合の活動家であるならば、彼は、六か月から三か月までの刑務所を危険を冒した。経営者は、嬉しかった。労働総同盟について、政令は、同盟の大会が、ナントで、開いた、一一月一七日、その日を発布された。(一〇四)

ナント大会は、労働総同盟の中で、重要であるだけでは足りなかった。最初の大会は、何が、三六年六月の、組合の統一の組み合わされた結果であるかを測るよう認めるはずであった。スペインからミュンヘンまで、外部の諸事件は、総同盟の中で、討論を引き起こした。現状を総括する必要があった。人民戦線の労働総同盟は、人民戦線の解体、レイノー緊

急政令が、象徴である、解体を確認するのに、同盟の大会を集めた。大会の委任は、三七年のベースについて計算された。定員数は、三九五万八、八二五人等であった。三八年に、足踏みを記録するのは、望ましかった。この巨大な機構は、四つの流れに分裂させられた。先ず最初に、革命的流れ。第二の流れは、サンディカ紙という新聞の周りに、再編成された流れであった。第三の流れは、旧統一派から、共産党に結び付けられた分派から構成された（労働者生活紙）。最後の流れは、総同盟の中で、仕事に対して、第四の流れを形成した。三七年から、ジュオーは、誓いを表明させた。人々は、旧統一派とジュオーの友の会の間、ブロックの意義について自問できた。もし彼らが、本文を預けるならば、旧統一派は、ブランとジュオーの友だちを、結合するように危険を冒した。もし彼らが、多数派であるならば、確認は、分裂の力学を再び導いた。ジュオーにとって、状況は、開かれていた。彼は、固有な立場を防衛できた、彼は、組合の独立について、旧統一派で、国際的問題について投票できた。もし彼が、旧統一派で、全体の協定を選ぶならば、それは、彼の流れが、少数派である、唯一の解決法であった。国際的問題は、重きをなした。これらの三つの立場は、組合の独立に対立した。ジュオー旧統一派のブロックを代表する、ヴィヴィエーメルルに対して一万六、五八二票（六五、五％）、デルマスに対して七、二二一票（二八、五％）、セレに対して一二一票（〇、五％）と一、二八〇票の棄権（五％）。彼らは、平和の、戦争の問題について、面と向かい合って再び見出した。最初の確認は、是非必要となった。先ず最初に、組合の独立の場は、平和主義の場よりもっと少数派に対して有利であった。次いで委任に、力関係は、居を定めるように思われた。デルマスは、ホワイトカラー層にあって、産業連盟の中で、彼の最良の選挙結果を成功した。大会は、レイノーの緊急政令によって、訊問された。大会は、反対の中で、全員一致であった。旧統一派は、二四時間のゼネストに有利のように思われた。デルマスは、控え目であった。彼は、ゼネストが、ボネの、ダラディエの平和主義の対外政策に反対して、道具であるように怖れた。緊急政令を外に出ることは、必要であったのか。レイノーのこの好戦的な人に対して、悪い順番を演じることは、彼に人気があった。ジュオーは、控え目であった。大会の圧力の下に、彼は、砂袋から自由にした。最後の動機は、議員

たちの干渉を力説したし、行動を準備するため、執行委員会と事務局を委任した。ゼネストの言葉は、宣告されなかった、人々は、条件法に対して、共同の停止を予測したし、決着の就く日は、不正確のままであった。(一〇五)

政府の指導部は、一一月一九日、時間割の変更を伝えた。四〇時間の時間割（五×八）は、四四時間の時間割（月―金七―土九）によって取って代られた。誰も、この特別の時間割を正統化しなかった。労働者層は、ストを始めたし、工場を占拠した。経営者は、レイノーの政令の適用を準備した。一連の経営者の通達は、戦いのプランに仄めかす、有名であった。それは、闘争に入る、化学であった。ルノーの前に、三、〇〇〇人の遊動憲兵隊と一、五〇〇人の警官は、存在した。労働者層は、自発的に工場を撤退した、逮捕が、いなかった。(一〇六)

何が、数日の間、同居者たちは、ブルム、トレーズとジュオーを作ったのか。野蛮なストの波について、情報は、際立たせられなかった。ジュオーは、ストの脅しが、政府の手直しを押し付けるのに足りるよう希望した。野蛮なストは、連盟の書記たちについて、同様の圧力を表した。執行委員会が、召集された、日付は、選ばれなかった。交渉は、続けた。慎重な事態は、舞台裏に過ぎ去った。公共事業の請求の命令を取り上げることが、問題となった。レイノー、ダラディエは、交渉するような意図を持たなかった。労働総同盟は、ストにアピールを確認するよう、ダラディエについてその責任を拒否するよう作り得た。政府が、選ぶ、戦術は、明快であった。政府は、中心問題を上げたし、脅しの措置を繰り返した。先ず最初に、立法の武器庫。政府は、公の職務に関する通達を公表した。第二の局面が、予知された、それは、警察の及び軍隊の装置の予防の陣列であった。労働運動への不足は、対応した。ゼネストの通知とその実現の間、五日の猶予期間は、政府によって利用され得た。ジュオーとブランは、妥協が、存在した。一〇月二九日、彼らは、翌日、ゼネストが、説得された。連盟の命令は、不十分に明確なままであった。警察の装置への反撃は、研究されなかった。最後の指示は、電報によって与えられたし、活動家たちの集会の中で、見張りを伝えられた。政府の圧力が増加するのに従って、同盟の正確さは、人々が、譲歩する印象を与えた。ストが、二四時間を追い抜かないことは、確言された。(一〇七)

一一月三〇日のストの運命は、数時間に決せられた。政府は、政治が、交通機関の産業部門について、その努力を集中するように計算したことを、穏さなかった。労働総同盟は、この産業部門に辿り着いたように思われなかった。犯された誤りは、明白であった。最後の時期で、労組は、鉄道労働者たち等の仕事の場に赴くのに要請した。人々が、懲発される時、彼の仕事に赴くのか。労働総同盟は、占拠が、存在するはずでなかったように明確にした。仕事の場は、占拠された。場所の再占拠は、軍事的戦略とスト参加者たちの意義の外に、力関係を必要とした。それは、逆の現象であった。パリの鉄道労働者たちは、夜の中で、仕事を又始めた。地下鉄の中で、同様であった。地方に、状況は、対比させられた。それは、テストの様子をする、パリであった。それは、ラジオが、描く、パリで状況であった。代理店の至急便は、削除させられて伝えられた。ラジオは、動きの失敗を知らせた。参加からストまでの正確な考えをなされることは、困難であった。労働省の図表が、存在しなかった。諸県の主な都市のため、有効なデータは、存在した。データは、正確ではなかった。主な産業部門のため、組合の評価を再構成することは、可能であった。最初の注目は、全体的数字、一五〇万九、〇五〇人のスト参加者たちに関係があった。(一〇八)

説明の最初の型は、労働総同盟の内で、存在する流れに延期した。共産党は、ゼネストを準備した。党は、党が、ミュンヘンの政策とレイノー政令の間に作る、ダラディエの区別を手に入れるように党の意思を作らない、連絡を穏さなかった。ミュンヘン協定は、尊重されたし、失策は、稀であった。連盟の闘争の中で、行動は、共産党の熱狂によって説明された。戦闘性は、別の旧統一派の連盟の中で、弱いように思われた。流れに比べて、動員の程度は、最もなものではなかった。ストは、郵便局の中で、失敗であった、状況は、官公吏層にあって、もっと悪かった。最初に、レイノー緊急政令は、全社会集団について、同じ反響を及ぼさなかった。官公吏層は、行動を脅されなかったばかりでなく、政令は、給与の増額を予測したことを、どのように、忘れたのか。警察の装置が、ストを窒息させる、速さは、考慮の対象となった。経営者の装置は、重きをなした。経営者は、スト参加者たちを解雇することは、可能になる事実を力説した。彼らは、スト破

りの労働者たちの組合、フランス社会党、キリスト教労働者同盟と連絡を取るように、あらゆる暇を持った。一一月三〇日のストに、労働者同盟の敵意は、違った比重で重きをなした。フランス社会党について、何で、労働者の社会集団に反対して、振りかざす脅威を付け加わる必要があった。それは、経営者と政府が、直接の解雇の場合、移住労働者層にとって、ケースであった。経営者と政府は、移住労働者層を、運動に加わるのに妨げるのに到達した。失敗で話す必要があるのか。労働者の戦闘性は、表現された。労働者層は、街頭の中で、デモを行進したし、警察力に、衝突した。別の構成要素は、ゼネストが、成功、失敗であるような事実を決定した。ストは、ストの目標を到達しなかった。緊急政令を廃棄させる、ダラディエの、レイノーの崩壊を引き起こさせること。労働運動は、人民戦線と別の連合の型をためらう、政府に係り合わなかった。成功されたゼネストは、目標に到達し得なかった。一一月三〇日、抑止の波は、それが、逆になるように証明した。(一〇九)

経営者は、恐れたし、復讐した。抑止の装置は、配置された。労働省によれば、それは、一一月三〇日の後、結局閉鎖された、八〇万の労働者層の天文学的な数字であった。企業の大部分は、再開し、再雇傭した。工場閉鎖の数週間は、支払われなかった。再雇傭は、新契約のベースについて、なされた。賃金の下落、労働期間の変更等。事実は、有給休暇のため、勤続年限に結び付けられた利益を失わせた。これらの復職は、団体契約によって保持されなかった。個人的再雇傭として、なされた。再雇傭は、選択式であったし、閉鎖されたものに関係がなかった。一か月の後、大凡の総括は、抽出され得た。二万人以上の労働者層は、解雇された。再雇傭されなかった労働者層は、でたらめに雇われていなかった。経営者の激怒は、爆発された。(一一〇)

政府は、経営者と同じ態度を採用した。工場の全体は、ストの直後、閉鎖された。再雇傭は、始まった。工場は、活力を取り戻した。兵器廠と軍需事業所の中で、スト参加者たちは、一二月中、閉鎖されたままであった。状況は、フランス国有鉄道に対して、驚くべきであった。デルマスは、八日間の教諭たちの停職処分が、賃金の中断に変えられることを、

ゼイから手に入れた。官公吏のストは、存在しなかった。[一一一]

職業の枠内で、取られた制裁は、裁判の抑止を伴った。一二月初めの中で、ルノーで、二四日、逮捕された労働者層の訴訟は、催された。組合の活動家たちは、狙われた。ブルジョワ国家の裁判権は、よく働いた。人民戦線の中断は、彼らの職務を変更しなかった。[一一二]

労働者階級は、抑止の前、反応なしに留まることは誇張された。反論は、海事の中で強かった。ある反応は、誤った幻想を抱かせるはずではなかった。それは、大敗北を知ったように感情であった。ブルムは、翌日から感情を認めた。ジュオーは、大失望を話した。労働総同盟は、制裁を受けた人々の合法的防衛の場に席を着いた。数か月後、大赦の提案は、ダラディエによって、傷を手当てをするのに仕えなかった。定員数は、見る間に減って行った。四三二万九、八〇〇人から二八五万四、九〇〇人まで、スト破りの労働者たちの組合は、先頭を起こした。一二月一一日、議会は、人民戦線の終わりを承認した。ダラディエは、三一五対二四一票によって、信任を手に入れた。それは、一一月三〇日の労働者の敗北であった。独ソ協定は、数か月遅く、労働者陣営の中で、混乱を生じた。戦争の宣言で、道は、ヴィシー制度に対して開かれた。[一一三]

九　敗北の様相

三八年のストの失敗から、労働者階級の政治的敗北を目撃した。先ず最初に、その理由は、議会の多数派の変化は、政権の座から社会党を排除した。次いで、その理由は、労働者諸組織は、定員数を下落するように見えたし、独ソ協定が、三五年に実現された組合の再統一を分裂させるようになって、新しい分裂の時期は、居を定めた。共産党の法の外に、実施は、三九年八月から、敗北の様相を補充した。この政治的敗北は、労働者階級の構成と労働の訴訟を苦しめた、一連の

後退で先行された。三六年六月の直後、労働者階級は、ある数の道具から自由にした。政治権力、強力な組合組織、立法措置、労働対余暇という新しい配分。何で、経営者で確証された、力関係を付け加わる必要であった。ブドー体系、出来高払いで労働、農業労働者、等。(一一四)

注意深い試験は、三七年から、経営者が、利益を取り戻すよう指摘した。三×八は、広まった。三六年七月、冶金の契約は、テーラー体系に分類の体系を採択した。組合の交渉者たちは、資格について討論を再開するのに探し求めなかった。賃金の知識のベースから自由にすること。三八年一一月以前から、経営者の分派は、労働の合理化を元に戻した。労働の激しさに関して、結果は、重かった。労働の偶発事の全国的統計は、安全の諸条件の何らかの改善を表さなかった。分裂は、購買力の下落、四〇時間法の再疑問視よりもっと知覚し得なかった。分裂は、労働者層を関心を引いた。労働者と経営者の命令は、同時に起こった。労働者の実践は、労働総同盟に勝る、生産至上主義のイデオロギーと矛盾して入った。総同盟の中で、皆が、合理化の再現について、同じ観点を持ったように明らかになかった。一一月三〇日の敗北は、経営者の手を回復を速めた。労働者階級の中で、右へ滑りを引き起こさない、苦さ。教訓は、もっと左に三九年に投票した。状況は、矛盾であった。余暇の範囲の発展は、青少年の解放の運動を可能にした。婦人層は、動かなくされた。移住民層は、労働の合理化の結果を重大化した。共産党が、発展させる、全国の、狂信的排外主義の政策は、移住民層の孤立を強調させた。(一一五)

人々は、もし人民戦線の様相が、長い筋肉で、太陽で褐色にする若い人の様相であるかどうか、知らなかった。三六―三九年は、全世代に対して、生活を変えたことは、明白であった。政治的動揺の時期に、この文化的急進化は、諸政党の青少年の諸組織を経験してなかった。極右は、三〇年代の初め、環境をマークした。フランス社会党も、人民党も、青少年の組織で建設しなかった。左翼に、それは、政治的諸組織の青少年の諸組織によって存在しなかった。共産主義青年同盟は、転換点の、粛清の犠牲者であった。三四年、党指導部は、片付けられた。新指導部は、日和見主義の溝の中で、倒

れるのに喜ばなかった。反ファシズム運動の枠の中で、青年同盟は、ある成功を手に入れた。三六年一〇月、同盟で一〇万人の加入者たち。同盟は、この資本を、実を結ばせるようにできなかった。同盟は、新しい外観を明確にした。共産主義学生同盟の、同農業青年同盟の、同少女同盟の構成は、諸問題を解決しなかった。この急進化のるつぼ、それは、るつぼを提供する、社会主義青年同盟ではなかった。人々は、青年同盟に退屈した。同盟は、党の後援の下に存在した。熱の圧力は、パリ地方に制限された。地方に、同盟は、党の機関の付属物であった。これらの危機は、指導部を首脳部を失わせるため充分であった。同盟は、安定な活動の中に挿入されるのに苦労した。同盟は、中心から外れたものであった。不干渉は、スペインに比べて、同盟に、危うい立場に追い遣った。同盟は、学生たちの日常的分け前である、対立を引き受ける必要がなかった。二つの極は、青少年を引き付けた。一方では、カトリック行動運動、他方では、余暇運動。伝道の基礎について、二九年、キリスト教農民青年同盟は、創設された。人民戦線を横切って、青年同盟は、印象的になった。データは、同盟の道程に重きをなした。同盟は、帰属意識を鍛えられるはずであった。ドルジェールと逆に、同盟は、三五年から、社会保険と家族手当金を防衛した。同盟の指導部たちは、左に傾かなかった。三六年六月の国政選挙の機会で、同盟の県組織は、民主派キリスト教の立候補たちを支持した。キリスト教労働者青年同盟について、人民戦線に対して、同盟の敵意は、見られなくなった。同盟の指導部は、三八年八月、彼の判断を要約した。同盟は、反動的選択の基礎について、カトリック教の階統制で、同盟の諸関係の枠の中で、発展した。もしドルジェールが、若い農民層の分派を組織するのに達したならば、極右のいかなる組織は、同盟の中で、定着するのに達しなかった。同盟の軌道は、曖昧であった。同盟は、家族を祝ったし、愉快な夜のパーティを組織した。これらの活動に、参加は、自治権化の形態であった。同盟は、階級的協力を褒めそやした、労働者であるように、誇りは、別の連帯の形態を描写した。三七年七月、大会は、この現実のよい証言であった。それは、成功であった。同盟の加入者たちの進行は、敏感であった。ボーイスカウト運動に、余暇の費用の引き受けは、帰属した。スカウト運動は、構想を転換するように企てであった。運動は、伝統的教育を訊問

し始める、行動的方法の具体化であった。運動は、子供たちに信頼をするよう宣言した。人々は、運動に、子供たちに、実験化の現実の状況に直面させた。フランスのボーイスカウトは、政策のないよう宣言した。人々は、ストが、存在したばかりでなく、週四〇時間法が、存在したことを無視できた。三八年末まで、人々は、スペイン戦争が、存在したことを無視した。三八年から、国際的緊張は、態度の決定を押し付けた。運動は、ミュンヘンの後、重大な諸事件で話した。ボーイスカウトの募集は、民衆諸階層の間に、なされていなかったし、少女たちにあって、良いマナーであった。人々は、エリートを選んだ。時期の様式は、その結果、三六年の後、ボーイスカウト団員たちであった。左翼に、公式に社会党、労働総同盟によって後援された、三六年に発展する、図は、「赤いタカ派の人々」を持った。教育学は、共和派を横切って、表現された。活動の特徴は、子供たちが、彼らの準備の責任者たちであることであった。村落の共同体、共和国の議会。責任者たちは、選ばれた、経済、衛生、財政が、問題である、色々な負担は、分けられた。助手たちは、これらの責任から排除されるばかりではなく、投票権から自由にしなかった。この自己管理の働きは、赤いタカ派の人々の特徴を使い果さなかった。彼らの教育学は、自分が社会主義であることを願った。この不安は、二重の確認に基付いた。世俗の学校は、この任務を果し得なかった。学校は、ブルジョワに留まった。労働者の家族は、彼の限界をよく知っていた。階級的所属の再確認、連帯の、責任の見習い期間、事実の国際主義。赤いタカ派の人々は、反法を与えられた、曖昧さの地帯で現れた。その人々は、男女共学の見習い期間を要求した。助手たちの間、性に関する関係は、禁じられた。三六年六月は、激しい応酬の中心に、その人々を目撃した。彼らは、共産党の活動家たちの主導権で、スト中の工場の活気に参加した。社会党は、路線を心配するように思われなかった。理論的に、社会党の独立派の人々であった、その人々は、実践の中で、社会党になるのを目指した。助手の一部は、新教のボーイスカウトの組織からやって来た、別の一部は、トロツキー主義からやって来た。二つの事件は、問題を結晶させた。組合の再統一、トロツキー主義者たちの社会党から除名。二つの部門は、赤いパイオニアたちのリーダーが、三八年から、労働者農民社会党の活動家たちの応援者を受け取って、部門の道

を続けた。その人々は、国際主義の場について、階級闘争の場についてキャンプをして、教育の諸形態を試みるように功績を持った。男女共学の実践と解放は、覆そうとする価値を選んだ。その人々は、ユースホステルの運動の中で、これらの経験を再充当した。ユースホステルは、人民戦線政府の設立、工場の占拠の動きの経験ではなかった。人民戦線が、政権の座に到着した時、構造は、既に存在した。それは、この構造の、社会立法の、ラグランジュの活動の結び付きであった。ユースホステルの歴史は、失敗で横切られた。事柄は、ユースホステルが、労働者階級の方に向きを変えるよう注目した。統計の構成要素は、教員層と学生層が、大多数の利用者を形成した。男女共学は、現実的であった。ユースホステル世俗リーグで、人々は、宿屋を抹殺した。ユースホステルフランスリーグで、人々は、キャンピングの男女共学を禁じた、性に関する諸関係を非難した。世俗リーグは、三七年、動機を可決した。妥協は、誰も満足しなかった。ユースホステルの中で、数万人の青少年は、人民戦線の青少年を横切る、解放の動きの明白な証言であった。(一一六)

婦人たちの間、人民戦線の政権のある到着が、引き起こし得た、希望は、裏切られた。結局、立法の経験は、存在しなかった。二つの問題について、進展は、有意義であった。諸条件は、有利なように見えなかった。急進党員層は、進行するように思われた。投票権を要求するため、この集会で、それは、全左翼であった。社共両党のみではなく、ネオと急進党員層。右翼の一部は、有利であった。女性解放論（フェミニスト）たちは、彼女らの圧力を維持した。彼女たちは、議会の列の中で、デモをした。彼女たちは、上院の前に、デモをした。議会は、四八八対一票によって、投票権を承認した。上院は、反対した。人民戦線から期待され得た。議決の一つは、極悪の法の廃止であった。避妊に関して、状況は、青少年のため不安であった。妊娠中絶の数は、増加し続けた。死亡の数は、印象的になった。中絶への権利に対して、全ての参照は、共産党の新聞から消滅した。ソ連邦は、三六年六月、中絶を禁じた。トレーズは、三六年一月、死亡率で心配した。中絶の孤立は、潜在的になった。三七年の国際博覧会で、中絶は、避妊具を展示した。共産党のイデオロギーの降伏の基礎について、産児奨励の圧力を鋭くにして、ダラディエ政府は、三九年七月二八日、家族法典を発布できた。家族の手当ては、第一子

のため廃止され、第二子のため賃金の一〇％で維持され、第三子と続く者たちのため二〇％で上げられた。家に対して母の手当ては、賃金の一〇％で固定された。人々は、中絶について、抑止の政策を発展させるよう心配した。家族法典に対立するどころか、共産党は、その不充分さを嘆いた。三八年二月一八日、ルヌー法は、市民の不能を廃止した。人々は、ダラディエが、家族の崇拝と精神的秩序を修復するのに困難でなかったように理解した。労働市場について、婦人たちの状況の悪化は、敏感であった。人民戦線が、もたらした、弱い経験。社共両党は、戦いを繰り広げなかった。ずれは、男女の賃金の間、凹むように目指した。四〇時間法の再疑問視は、婦人の労働力に関係があった。法は、結婚されたサラリーマン層の二重の労働日を廃止しなかった。一月二四日、婦人の職員で、パリの都市間で、四〇時間法のため、ストとデモは、組織された。労働市場について、就職させることは、男性の競争を蒙る、婦人たちの犠牲においてなされた。婦人たちの仕事の問題は、現実のイデオロギーの戦いの中心問題であった。右翼、カトリック教の勢力範囲は、全手段を利用した。それは、無視される、子供たちであった。母親リーグは、託児所に対立する、回勅の教育を拡めた。三六年六月に、エスプリ誌の討論の中で、公式の左翼は、重きをなさなかった。党の全国的転換点が、全責任の調査に確認した、共産党は、党の立場をニュアンスを与えた。(一一七)

三六年、左記の図が、配分を提供する、フランスに、調査された、二四五万三、〇〇〇人の外国人層が、存在した。(イタリア人層、八八万七、七三二人、ベルギー人層、二一万一、四八四人、ドイツ人層、四万八、七八六人、ポルトガル人層、三万二、四七二人、ルーマニア人層、二万五、〇〇〇人、オーストリア人層、一万八、〇〇〇人、ポーランド人層、四六万三、一六三人、ロシア人層、六万三、三四九人、チェコ人層、四万一、四九六人、ハンガリー人層、三万人、オランダ人層、三万人、トルコ人層、一万八、〇〇〇人、スペイン人層、四一万〇、一八三人、スイス人層、五万八、八八〇人、イギリス人層、三万四、九一二人、ユーゴ人層、二万五、六六八人、ギリシア人層、二万一、二七二人、北アメリカ人層、一万一、四六七人。)農業の中で、この労働力の一部は、ある季節だけのものであった。産業の労働力は、安定になった。職業は、特定された。色々な集団は、三つの組織

の型によって、横切られた。先ず最初に、移住の全国的組織。次いで、移住して来た労働者層は、全国的支部、言語グループで準備を済んだ、組合を組織できた。人々は、労働総同盟で、約二万人のポーランド人層、一万五、〇〇〇人のイタリア人層を数え得た。移住して来た労働者の一部は、政治的に、フランスの諸党の中で、組織された。彼らは、共産党の言語グループの中で、再び見出した。一三のグループは、存在した。社会党は、政治的亡命者たちを統合した。人民戦線の政権の座に、到着は、偉大な希望を引き起こした。三六年六月は、彼らに、ストに、占拠に参加した。彼らは、賃金の値上りの恩恵を浴した。マティニョン協定に従う、諸法は、彼らに、四〇時間法と有給休暇法をもたらした。最後に、もし彼らが、フランスに、二年以上の生存を持つならば、彼らは、代表たちの選挙に投票できた、彼らは、被選挙資格のあるものではなかった。政治的亡命者たちについて、政府は、行政を奨励した。移民層の諸組織は、再編成された。三六年六月前、労働総同盟への加入者たち、五万人の移民層は、現在で、四〇万人であった。共産党で、言語グループは、新発展を知っていた。政府は、移民層の状況で心配するように思えなかった。サラングロは、追放の道に、六、〇〇〇人の移民層に猶予期間を与えた。彼は、三六年八月四日、ナチのスパイに反対する闘争の口実の下に、ドイツの亡命者たちのフランスの領土について新入国を禁じた。共産党の代議士たちは、七月九日から、ムーテが、移民層の法的地位で作った、提案を取り戻した。本文は、議会と上院の間に、失った。移民層にあって、幻想は、強かった。誰も大臣や閣外相も、移住労働者を責任を持たなかった。矛盾は、ショータン政府を期待した。ショータンの下に、第二次ブルム政府の下に、これらの計画のどれも、帰着しなかった。ダラディエの下に、始める、多数派の変化は、移民層に対して、好意でない措置の刊行を許した。三八年五月三日の政令は、最初の波を形成した。政令は、工農業の中で、移住労働者層の職をしなやかにしたし、投獄の刑を六か月によって増加した。六月一七日、政令は、外国人たちのため、保健衛生に関する手帳を制定した。六か月に、八、四〇五人の外国人たちは、投獄の刑に処された。一一月に、レイノー緊急政令は、装置を強化した。結婚され得るまで、フランスに、一年の滞在は、必要となった。帰化は、自動的にならなかったし、帰化は、人々に対し

て、素早く取り上げられ得た。投票権は、帰化の後、五年を与えられた。労働者組織の反応は、弱かった。労働総同盟は、ナント大会で、移民層の問題で一言も言わなかった。極左は、抗議した。政治的大組織は、反応しなかった。社会党は、五月二四日、フォールによって、代表団を派遣した。代表団は、詳細の調整を要求するのに留めた。移民層に関係がある、一一月一二日の政令の一部について、社会党は、無言に留まった。共産党の慎重さは、党の愛国的転換点に延期した。党は、三七年の流れの中で、党の言語グループを解散した。移住して来た共同体は、結局、動かなくされた。共同体のため、反ファシズムは、国際主義等を意味した。共同体は、フランスの愛国主義で忠誠を成した。三八年六月、六つの移住して来た共同体は、宣言を公表した。労働者層は、一一月三〇日のストに、参加しなかった。移民の組合化の比率は、下落した。人種主義の及び外国人嫌いの波は、広がった。外国人嫌いは、マグレブ人の労働者に反対して、イタリア人層、ドイツ人層、ユダヤ人層に反対して行使された。三七年、三八年に、入国より下であった、移住して来た労働者層の除名は、三九年に、公式の数字に殆んど同等であった。移民の政治化された部分、共産党に結び付けられた部分は、意気沮喪させられなかった。言語グループの解散は、グループの活動について、重要な結果を持たなかった。モスクワの訴訟は、ユダヤ副支部の活動家たちを困惑させた。スペインに、それは、敗北であった。三八年九月と一〇月から、イギリスの及びフランスの圧力に譲って、スペイン政府は、国際旅団の一万三、〇〇〇人の戦闘員たちを送り返した。三九年一月と二月に、四九万人の亡命者たちは、フランスに到着した。準備の不足は、完全であった。宿泊の物質的諸条件は、改善された。進歩的な移民は、逃げ場はないことを知っていた。(二一八)

一〇　総括のために目印

四〇時間法も、有給休暇法も、人民連合綱領の中で、描かれていなかった。お互いは、三六年六月の労働者の動員によっ

て押し付けられた。それは、老人労働者に対して、十分な退職金の制度のケースである。それは、失業の全国的基金のケースである。人民戦線が、実現した、改良の地帯の中で、ある主要点は、広大な総括を試みるため、目印に仕えることができた。[一九]

有給休暇法を創設する、法は、六月一一日、議会で、五六三対二票によって可決された。政令は、一五日の年有給休暇を与えた。ラグランジュは、法の可決に只管従わなかった。往復割引の四〇％を引き起こして、年の休暇の民衆の手形は、存在した。もっと低い料金で、特別列車は、設置された。五六万のラグランジュ手形は、三六年から、利用された。歩行の、キャンピイングの及び自転車の発展は、数字に付け加わっただけ一層多く、初めて、海を見た、及び海に大きなショックを与えられた、労働者層が、いた。彼らは、冬のスポーツに行くように願った。移民層は、手形を利用できた。政令は、公表された。最初の出発は、労働総同盟の主導権であった。それは、三七年に、利用される、九〇万のラグランジュ手形であった。労働時間の短縮、有給休暇、週末の誕生。[一〇]

学校の問題について、人民戦線綱領は、簡潔であった。六条は、学校と思想の自由という見出しの下に、明確とした。連合の綱領に対して、一五年の年齢まで、義務的就学は、記録した。三六年八月一三日、ゼイは、初等研級修了証明の通過によって、批准された統一を統合した同様に、議会に対して、一五年まで、就学の延期を可決させた。三六年七月から、彼は、教育の全体の改革を取り掛かった。計画は、三七年三月に、議会に届け出られた。彼の改革の計画は、身動きできなくなった。三七年一一月から、ボネは、いかなる予算は、教育の改革のため、三八年の予算に記録されないよう宣言した。ゼイの改革の計画は、二年半以来、議会に対して、討論の対象をなされなかった。[一一]

三六年八月一三日、小麦公団は、社会党員層の及びモネの精神の中で、フランス農業の改革の最初の段階であった。フランスに、それは、小麦の値段を固定する市場であった。生産の総量は、選択に依存した。市場は、調停しなかった。豊年は、厄年を償わなかった。売上の物価の値上りは、小麦の総量に係かった。解決法は、貿易の機能を打明けること。公

団は、余分がある時、輸出したし、欠乏の場合に、輸入した。議会の戦いは、辛かった。右翼は、敢えて調整の不可避性を非難した。国営化に反して及び調整する機関は、職業の機関であるため。小麦を買うため、必要な金は、農業信用金庫によって、前払いさせた。モネの古文書は、右翼が、組織する、強度の同業組合の動員で証言した。彼は、二つの点について譲歩した。中央会議が、全員一致で、小麦の値段を固定するはずであったのに、彼は、四分の三の多数派で、足りるよう承認された。第二の調整は、同業組合が、売上の及び購買の独占事業を持っていないことであった。小麦公団の総括は、三八年の財政的緊張にも拘らず、立派であった。ボネの計画は、団体契約の結論を経験した。計画は、二月二五日、可決された、三六年一一月二〇日、議会で預けられた。計画は、上院によって議論されなかった。小作料の及び分益小作料の地位に対して、同様であった。最初（小作料）は、三七年三月二〇日、議会によって可決された、七月七日、預けられた、第二（分益小作料）は、三九年三月末、可決された。上院は、拒否した。モネは、三六年八月五日、農業のサラリーマン層に家族手当を広げる、法を適用するよう認める、政令を取らせるのに成功した。九月二六日、有給休暇法は、農業に適用し得るよう宣言された。農業のサラリーマンに、団体契約の体系の拡大は、上院によって、三七年七月六日、委員会で送り返された。真の圧力は、上院の方に実行されなかった。(二二)

人民戦線綱領によって予測された、国有化は、減らされた。国有化は、見掛け倒しのように働いた。航空機産業の中で、国家は、株の三分の二を所有した。国有化は、九つの企業に関係があった。経営者層に注がれた、補償金は、可成りのものであった。上院は、ブルムに対立した。経営者層は、再投資できた。フランス銀行に関して、国有化で、なかった。委員会は、国有化の計画を入念に作り上げた、政府は、拒否した。共産党は、この決定を承認した。委員会は、別の計画を準備した。理事たちは、廃止された。総会の構成は、変えられた。それは、二〇〇の巨大の株主たちでなく、四万の株の受取人たちであった。総会は、七七五の参加者たちを集めた。国家の金庫が、空にされて、上院は、六月二一日、辞職した。ブルム政府は、全権を拒否した。国有化は、埋葬された。(二三)

三六年六月に、購買力の値上りは、現実であった。購買力は、三五年から三六年まで、六、八％あるいは八、四％で増加した。三六年六月は、賃金の階統性の引き締めを引き起こした。平価切り下げで、傾向は、三七年から逆にされた。購買力は、進行し続けた。三五年に比べて、この進行は、三七年に一〇、六四％、三八年に一二、五％であった。生活費の値上りは、急進党の支持者の一部（金利生活者層）に関係した。賃金の値上りは、生活費の値上りによって無に帰さしめた。失業者層の数は、三六年に二〇〇万から九四万まで減らした。購買力の値上りは、失業が、常勤で、パートタイムで、失業によって襲われた家族の中で、敏感であった。(二四)

四〇時間法で、労働の削減の結果が、期待された結果を及ぼさなかった、問題は、明白であった。その法について法でなされた、訴訟は、有名であった。法の適用は、熟練労働者層の不足が、表した、隘路に衝突した。適用は、賃金の費用を増加しながら、企業の生産を減らすのに辿り着いた。物価の値上り。新しい解雇は、突然起こった。職について、反響は、無視できなかった。公式の数字によれば、人々は、三六年二月に四八万七、三七四人の失業者層から、三七年一〇月に三一万九、二二三人の失業者層まで（三七％の減少）移った。フランス国有鉄道によって創られた職は、農民層に役立った。三六年の消極的収支バランスから、人々は、三七年に黒字残まで移った。主な理由は、その法の適用の遅さであった。経営者の分派のため、問題は、政治的になった。その法は、敵意を結晶化した分派であった。分派は、法の廃止を認めるよう希望した。分派は、調整の提案を繰り返した。残業のため、多様な違反。分派は、主要点をマークした。三七年から、経営者は、クリスマスの、新年の休暇を再雇用するよう、許可を手に入れた。この調整は、年約八〇時間を取得した。その法と向き合って、経営者の態度は、多様化された。経営者の一部は、生産を合理化するため、この機会を捉えた。その一部は、新しい機器の購買と増加された機械化によって、経営者を作った。熟練労働者層の欠如に帰すべき隘路について、経営者の言説は、曖昧なように見えた。隘路は、演じたらしい。それは、未熟練労働者層であった。それは、その法の適用を遅らせるよう、経営者の意思であった。第二の糾弾の言葉。賃金の削減なしで、その法は、企業の賃金の費用の増額

に、企業の生産性の減少に辿り着いた。物価の値上り、需要の制限、職員の縮小と解雇。企業のの七〇％は、労働者人口の四〇％を表した。約一〇％で増加された、賃金の費用。能率の低下は、鉱山のケースの中で、確認され得た。もし三七年六月の賃金の増額が、需要を刺激を与えたならば、物価の値上りは、管理の欠如を吸収するように思われた。平価切り下げは、生活費の値上げを促進するため、国家の注文に従属する産業部門は、三六年四月と三七年六月の間、繁栄した。それは、需要の漸進的な欠乏の理由であった。もし工業生産が、三七年から下げるならば、それは、需要の低下を引き起こす、経済的困難の理由であった。その法は、産業を邪魔になった。その法は、労働力の管理の経営者の戦略を妨害した。安定した定員数を圧縮したこと、部分失業によって、定員数と解雇を管理したこと。企業の働きの中で、その法が、引き起こす、困難は、過大評価されることができなかった。政権の座にある右翼の復帰が、その法の桎梏を飛び越えさせる、希望の中で。(一二五)

一一　文化運動

いずれにせよ、人民戦線の熱い年月に伴う、文化的促進は、事実となった。この奥底は、映画の出現、レコードの成立とラジオの氾濫であった。聴取者たちの協会は、創り出された。社会党は、文化的政策の受諾者にあったのか。三〇年代の前半の中で、共産党―コミンテルン―は、その一つの政策を持った。その政策は、左翼で、革命的で及びプロレタリア的であった。三〇年代半ばの転換点は、連合の文化的政策の方に動向であった。文化的産業部門の中で、それは、支配的な影響力を行使する、共産党であった。政府の行動の飾に掛けられた、党は、文化的民主化の意思をそれに取って代った。身代金、それは、人民戦線政府と文化的前衛のある部門の間、共感であった。文化運動は、社会連動を先取りした。文化運動と政府の主導権の間、相互関連を研究すること、大量消費と文化的部門の中で発展の間、ずれを見付けること。(一二六)

シャンソンの領域の中で、人民戦線を生産する問題は、些細であった。労働者階層は、労働運動の伝統的歌を無視した。占拠された工場の中で、それは、流行のシャンソンであった。余暇の領域は、この空白を埋められなかった。人民戦線の賛歌は、数百万の声によって、口ずさまれた。左翼のシャンソンの平行したツアーは、存在したのか。人民戦線に伴う、主な現象は、シャンソンが、大量の生産の範囲の中で、入ることは、事実であった。それは、レコードの、ラジオの支配権であった。シャンソンは、人民戦線の諸闘争の影響を表さなかった。人民戦線という年月の偉大なスター、それは、T＝ロシ Tino Rossi であった。シャンソンは、気分転換の手段であった。人民戦線の敗北の時、転覆は、シャンソンの中で表現で見出さなかった。労働者階級は、気分転換のシャンソンの方に、一般的動きに参加したことは、明白であった。全国的帰属意識の党の確認の中で、動きを取れなかった、共産党に関して、唯一の作曲家は、ルジェ＝ドゥ＝リルであった。(二七)

人民戦線が、政権の座に到達する時、人民戦線は、労働運動のスポーツ好きの部門を存在するのみならず、部門は、組合の再統一が、参加する前、再統一された。労働スポーツ体操連盟は、膨らんだ。連盟は、三六年の前夜、七三二のクラブと四万二、七〇六人の登録選手を持った。連盟は、ある矛盾に苛立てられた。連盟は、左翼のスポーツのイデオロギーによってマークされた。連盟は、週五日と余暇の発展によって訊問された。共産党の転換点が、援助して、階級対階級というスポーツの構想は、民主化のイデオロギーに対して地位を残した。連盟の不安は、組織者が、ラグランジュである、政府の政策の動向と同意して見出された。彼が、第一次ブルム政府の中で、彼の活動について、生まれる、報告は、彼の行動の枠を定義した。彼は、ある動向を定義した。基礎は、学校に対して、スポーツの導入であった。彼は、自由の手を持たなかった。体育は、ゼイに依存した。彼は、この措置に反対しなかった。彼の行動は、慎重になった。三六年に、三つの実験的な県は、存在した。上級スポーツ会議は、三六年から配置された。スポーツと競技の発展か。二五三の計画は、三六年から取り懸かった。三七年末のため、四〇〇、民衆スポーツ免許か。三七年三月一日、署名された、一〇月から、一〇万以上の免状所有者が、存在した。連盟は、国民スポーツ検定証の進級の試験を引き受けた。連盟は、三七年五月に、体育世俗事業スポーツ同盟と協定を通した。連盟の行動は、検定証の促進のため、有効であった。連盟の投資は、固有の発展を優遇した。同じ熱中は、

航空機の部門の中で、自分を見出した。航空宇宙産業が、連絡して、大陸は、民衆の英雄の展示場を作り出した。左翼で、緊張した翼の再編成は、三六年四月に、航空スポーツ民衆連盟に変化した。コットは、コーチと技術的施設を置く、民衆的航空機のサーヴィスを作り出した。一一月から、連盟は、約一〇〇のクラブと一万以上のメンバーを再編成した。一、七〇〇のパイロットの免許は、三七年に発せられた、三八年に二万三、〇〇〇。スペインは、責任はなかった。(二二八)

文学の領域の中で、共産党に高価な文化的民主化の政策は、具体化された。人々は、革命的作家芸術家協会に対して、懐柔策から、三五年九月、連合の広い構想まで移った。反ファシズムの問題は、作家の共同体を分裂させた。二つの陣営は、はっきりした、右翼で。左翼で。人民戦線成立の数か月後、スペイン戦争は、この分裂を強調した。人民戦線の成立から生まれた、文学の生産が、存在した。ブルジョワの読み方は、用心深いままであった。労働者階級は、読み方の年令の中で、いきなり入らなかった。作品の普及は、エリート主義に留まった。政府の成果は、責任を負うことはできなかったし、三六年七月から、公の読み方の発展のための協会の創設。協会は、二つの方向の中で、その行動を発展させた。最初の方向は、公の読み方のセンターであった。第二の方向は、移動図書館であった。結果は、有望であった。(二二九)

ランジュ氏の犯罪の骨組は、そのようなものであった。それは、人民戦線という最初の映画として、犯罪を上映するよう認めた。犯罪の問題は、映画の中で、抗議の動きが、人民戦線政府の制度化を先行した。人民戦線の前から、映画は、戦う不安の対象になった。それは、プレヴェールの一味であった。三五年五月、短編映画、連盟兵の壁にメーデーの壮大なデモの作品で、社会党セーヌ県連盟が、やって来た。三五年に、飢餓行動という、失業者層の行進について、ダニエルの短編映画は、実現された。三五年末で、共産党は、生活とわれわれに取り掛かった。三五年一一月、独立映画同盟は、創設された。同盟は、二万五、〇〇〇人の加盟者を要求した。何に、外国人嫌いと反ユダヤ主義の一摘みの量を付け加える必要があった。それが、文化的環境の中にいるように、驚くべきままであった。映画が、共同の芸術であるように、三六年六月のストは、映画を想起させるようになった。五月三〇日から、ストは、スタジオの中で突如起こった。スタジオは、占拠されたし、スト参加者たちは、映画のセットの中で、寝た。六月四日、劇場の職員たちは、従った。

六月六日、彼らの要求は、満足していた。劇場のある指導者たちは、団体契約を適用するのに手間を掛けた。ストは、六月一八日、スタジオの中で、止まった。映画の経営者は、協調的であることを示した。経営者は、防衛態勢を固めていた。映画は、巨大な産業企業になった。左翼の世論の大部分は、映画の事実から当然、重要性を気付いた。映画の労働者層の労働総同盟系組合は、スタジオと実験所の国有化を要求した。それは、三六年から、共産党は、国有化に有利のように思われる、唯一の産業部門であった。政府は、委員会を創設した。それは、興行委員会であった。人々が、映画の地位の計画で話すため、三七年、期待する必要であった。三八年一〇月まで、再び沈黙。経営者の要求と映画の組合の国有化の計画の間、ゼイは、並以下の第三の道に戻った。政令は、可決されなかった。違った映画のために始まった、動きは、人民戦線政府の協力なしで、発展するはずであった。監督たちは、検閲を解除させるため、都合のいい時期を判断した。査証は、前の政府を要求した。サロー政府の二つの原文は、ニュース映画について、事前の行政的検閲を制定した。ブルム政府は、この枠を維持した。最初の犠牲者たちは、平価切り下げについて、宣言が、上映禁止にされる、オーリオールとスピナースであった。人々が、人民戦線で検印を押し得る、映画作品は、多くの曖昧な点のものであった。映画の無視できない数は、労働者階級に対して、場所を作った。上映される画像は、疑わしかった。映画は、三六年六月のストが、女嫌いの構成要素を取り払わなかった、男性の労働者階級の忠実な画像を返した。大いなる幻滅は、曖昧さを表した。平和主義的映画。全国的統一の感情が、同居した、映画。現実の国際主義的確認に接した、映画。三七年のため、ランク付は、ある指図を与えた。ヒットパレードは、全様式をかき混ぜた。人民戦線という映画は、欠けていなかった。映画作品は、二義的ではなかった。人々は、三六年五月という現れるのを目撃した。構成は、ブルム政府よりも、ピヴェール主義者たちが、取る、距離よりも生き残らなかった。構成は、三六年に、一〇の短編映画を生んだ。事件は、三六年の最初の数か月から、映画自由団の設立であった。任務は、多様であった。民衆の映画を普及したこと。数か月、一万二、〇〇〇の加盟が、いた。それは、共産党の不安であった。短編映画は、民衆的映画局によって、普及させたし、共産党と協会の集会の中で、映写された。長編映画の成果、ラ＝マルセイエーズは、党のイデオロギーの影響力を確認した。貴族たちの一握り＝二百家族、連盟兵たちの総動員＝フランスの人民の同盟、フランス人戦線等。主任司祭たちは、差し伸べられた手を捉えたし、七

月一四日に代表するはずであった。三八年二月に、全国的同盟のため、共産党によって繰り広げられた戦いを象徴した。人民戦線は、崩壊させられた。三七年一〇月二五日から、ショータン政府の下に、検閲は、強化されたし、前検閲は、制定された。管理委員会の査証は、拒否した。三八年と三九年の最初の数か月の映画の作品は、人民戦線という精神によってマークされた。勝利と希望は、敗北と絶望によって取って代られた。三八年の映画のヒットパレードは、雄弁であった。ルノワール－プレヴェールのカップルは、人民戦線の覚醒と希望を象徴したのと同じだけ、それは、カルネ－プレヴェール協会であったのと同じだけ。ギャバン。最後の映画は、挿入を閉じた。三六年に、それは、労働者の連帯であった。(二二〇)

一〇〇年目になる九四年一〇月一六日、パリ六区の公園で、ドレフュス大尉の銅像の除幕式が行われた。社会党政府は、ブルムの彫像が、パリ一一区のブルム広場に設置されることを望んだ。シラクは、拒否した。この彫像は、チュイルリー庭園に託されることになった。今年、六〇周年、後は一〇〇年で……。(二二一)

――九四－一二－二六――

(一) Cf. J. Jackson, The Popular Front in France defending democracy, 1934-38, CUP, '87, p. *ix*. 邦訳、ジュリアン・ジャクソン、向井喜典訳者代表『フランス人民戦線史－民主主義の擁護、一九三四－三八年－』昭和堂、九二年、ｖ頁参照。

(二) 拙著『フランス人民戦線論史序説』法律文化社、七七年、平瀬徹也『《書評》平田好成『フランス人民戦線論史序説』』『立正史学』四三号、七九年、一二九－一三三頁、拙稿『《研究ノート》世界を横切って人民戦線(一)(二)(三)(四)(五)』『法学論集』二五－一・二、二三一－二七三頁、二六－一、七三－一一四頁、九〇年、二六－二、一一三－一六〇頁、二七－一、六五－一二二頁、九一年、二七－二、九七－一三七頁、九二年、同『フランス人民戦線の地方史的研究(一)(二)－一九三四－三九年ピレネー＝ゾリアンタール県における共産党の歴史－』同、二八－一、九九－一四九頁、二八－二、一－六三頁、同『(一九)三〇年のフランスについて(一)(二)』同、二九－一・二、七九－一五九頁、三〇・一、一－七二頁、九四年、文献目録は、斉藤孝『ヨーロッパの一九三〇年代』岩波書店、九〇年、一九一頁、向井喜典『フランス人民戦線運動と社会政策(I)』大阪経法大学『経済学論集』九－二、八五年、四頁、望田幸男他編『西洋近現代史研究入門』七五－八二、三五四－三五七頁、名大出版会、九三年等参照。

(三) Cf. J. Girault, Sur l'implantation du Parti communiste français dans l'entre-deux-guerres, ES, Paris, '77, pp. 301-303. 拙稿『フランス人民戦線研究の新動向』『法学論集』一五－一、七九年、四〇－四二頁参照。

(四) 二九年世界経済恐慌について、拙著、前掲書、二五－三〇頁参照。四六年頃から、コンピューター＝システムによって、経済的予測は、可能になった。恐慌は、絶対に不可能になった。植民地等は、統計では中国等で皆無であった（エジプトの他、小営業での実態であった）。岩波講座『世界歴史』27、現代4、一三一頁から、玉野井芳郎編『大恐慌の研究』東大出版会、八二年、C・P・キンドルバーガー、石崎昭彦／木村一朗訳『大不況下の世界　一九二九－一九三九』同、同年、佗美光彦『世界大恐慌』御茶の水書房、九四年等参照。

(五) Cf. S. Berstein, La France des années 30, AC, Paris, '88, p. 25. 拙稿、前掲論文（(一九) 三〇年代のフランスについて(一)、一九頁、中木康夫他『現代ヨーロッパ政治史』有斐閣、九〇年、一五一－一五二頁、原輝史『戦間期フランスにおける経済組織化構造』『社会経済史学』五六－二、九〇年、九二頁、廣田功『現代フランスの史的形成　両大戦間期の経済と社会』東大出版会、九四年、二〇三頁等参照。

(六) フランスの経済恐慌について、拙著、前掲書、三一－三七頁参照。Cf. J. Kergoat, La France du Front populaire, La Découverte, Paris, '86, pp. 10-13. 竹岡敬温『フランス人民戦線の経済政策(一)－人民連合の綱領について－』、同『同(二)－週四〇時間労働法－』、同『同(三)－一九三六年六月から九月まで－』同『同(四)－平価切下げ－』『大阪大学経済学』二五－二・三、二四八－二六九頁、七五年、二七－一、二五－三九頁、七七年、二八－二・三、二四－三四頁、七八年、三〇－二・三、二〇三－二一二頁、八〇年、渡辺和行『世界恐慌と人民戦線』服部春彦／谷川稔編『フランス近代史』ミネルヴァ書房、九三年、二二二－二二五頁参照。フランスは、戦前、高利貸的（金利的）帝国主義であった。莫大な資本は、国外に流出、逃避させた、等。廣田、前掲書（国民経済審議会から高等経済評議会まで、等）、二〇一－三四二、三七六－三八五頁参照、原輝史『書評、廣田功『現代フランスの史的形成』』『歴史学研究』六六六号、二九－三一頁、九四年一二月。フランスは、二百家族であった。Cf. M. Thorez, Fils du peuple, ES, Paris, '70, pp. 105-107. 邦訳、トレーズ、北原道彦訳『人民の子』大月書店、七八年、七三－七四頁参照。

(七) Cf. Kergoat, o. c., p. 13.

(八) Cf. Berstein, Histoire du Parti radical (1) (2), FNSP, Paris, '80. 渡邊和行『フランス人民戦線形成過程をめぐる一考察－急進党と人民戦線(1)(2)(3)』『法学論叢』一〇八－五、一〇九－一、二、八一年参照。

(九) Cf. Kergoat, o. c., pp. 14-16.

（一〇）拙著、前掲書、三七－四一頁参照。Cf. Ib., pp. 16-20.

（一一）Cf. Ib., pp. 20-22.

（一二）Cf. Ib., pp. 22-23.

（一三）拙著、前掲書、六－一一頁参照。拙稿、前掲論文（世界を横切って人民戦線(1)）、九九－一〇二頁参照。Cf. Jackson, o. c., p. 35. 邦訳、四〇頁参照。コミンテルンの批判は、石川捷治『コミンテルン再考』石川代表『時代のなかの社会主義』法律文化社、九二年、加藤哲郎『世界政党と政策転換（一九三四－三五年）(1)(2)－コミンテルンの政治学的予備考察－』『法政論集』七八、七二－一五六頁、七九、二七二－三三四頁、七九年、同『コミンテルンの世界像－世界政党の政治学的研究－』特に、四三五、四六四、四八六頁、青木書店、九一年、同『「反ファシズム統一戦線」研究の新段階－ソ連による「情報独占」崩壊期におけるコミンテルン評価の変貌』『一橋論叢』一〇六－四、三八八－四一〇頁、九一年（望田他編、前掲書、八〇頁）、同『モスクワで粛清された日本人』青木書店、特に、四一頁、九四年、同『国民国家のエルゴロジー』平凡社、九四年、富田武『見直されるコミンテルン史』原暉之・藤本和貴夫編『危機の〈社会主義〉ソ連 スターリニズムとペレストロイカ』社会評論社、三四三－三七二頁、九一年、斉藤、前掲書（スターリン時代のソ連）、一三七－一四八頁、トレーズの個人崇拝（小スターリン主義）は、内外とも皆無であった。拙著、前掲書、二〇八頁、Cf. Jackson, o. c., p. 64. 邦訳、七五頁参照、高級官僚等の人民戦線に対応について、同書、一八九頁、社共両党の戦略－戦術について、同書等参照。

（一四）拙著、前掲書、一一－一六頁参照。Cf. Kergoat, o. c., pp. 23-27. Cf. A. Ferrat, Histoire du Parti communiste français, BE, '31.

（一五）同書、五八頁参照。Cf. Kergoat, o. c., pp. 27-30. Cf. Kergoat, Le Parti socialiste, éd, Le Sycomore, Paris, '83. Cf. Berstein, o. c., p. 86. 拙稿、前掲論文、七五頁参照。ブルムは、人民戦線期間中、権力の獲得と権力の行使の間に、中間項、権力の占拠の概念を創設した。品川徹『フランス社会党の人民戦線参加・序説－参加のモチーフとダイナミズム－』『都立大法学会雑誌』二八－一、二一三－二三五頁、八七年参照。

（一六）Cf. Kergoat, o. c., pp. 30-36.

（一七）Cf. R. Rémond, La Droite en France, Aubier, Paris, '63.

（一八）拙著、前掲書、四七－四八頁参照。Cf. Kergoat, o. c., pp. 33-37. 平瀬徹也『二月六日パリ騒擾事件覚書』『史論』三五集、八二年、九八－一二二頁、渡辺、前掲書論文、二二五－二二六頁参照。

（一九）拙著、前掲書、四八、五九頁参照。Cf. Ib., pp. 38-40. Cf. D. Tartakowski, Le PCF, étapes et problèmes, ES,

Paris, '81.

(二〇) 同書、四八頁参照。Cf. Kergoat, o. c., pp. 41-43.

(二一) Cf. Ib., pp. 43-46.

(二二) 拙著、前掲書、五九－六〇頁参照。Cf. Ib., pp. 46-47.

(二三) 同書、六〇－六九頁参照。Cf. Ib., pp. 47-49. 拙稿『反ファシズム論の研究視点について－フランスのケースを中心として－』『法学論集』二三－一・二、二一－六五頁、八七年、渡辺、前掲書論文、二二六－二二八頁参照。

(二四) 同書、七三－七四頁参照。Cf. Ib., p. 50.

(二五) 同書、七一、七二－七三、一七七－一八一頁参照。Cf. Ib., pp. 50-52. Cf. G. Ceretti, A l'ombre des deux T, Juil., Paris, '73.

(二六) Cf. Kergoat, o. c., pp. 53-54.

(二七) Cf. Ib., pp. 54-56. ブルムは、労働総同盟のプラン等を承認した。

(二八) Cf. Ib., pp. 56-57.

(二九) Cf. Ib., pp. 57-58.

(三〇) Cf. Ib., pp. 58-62. 加藤克夫『戦間期フランスの旧出征軍人運動－「二月六日事件」と「危機」への対応－』『立命館文学』四三三／四三四号、八一年、一二三－一六〇頁参照。

(三一) 拙著、前掲書、七三－七四頁参照。Cf. Ib., pp. 62-64.

(三二) Cf. Ib., pp. 65-67.

(三三) Cf. Ib., pp. 67-68.

(三四) 同書、五八－五九頁参照。Cf. Ib., pp. 69-70.

(三五) 同書、七五、二〇三－二〇七頁参照。Cf. Ib., pp. 71-72.

(三六) 同書、七七－八四頁参照。Cf. Ib., pp. 72-74. ブルムは、有償の国有化を認めた。

(三七) 同書、同頁参照。Cf. Ib., pp. 75-76.

(三八) 同書、八四－八五頁参照。Cf. Ib., pp. 76-78.

(三九) Cf. Ib., pp. 78-79.

(四〇) Cf. Ib., pp. 79-81. Cf. Delperrié de Bayac, Le Front populaire, Fayard, Paris, '72.

（四一）Cf. Ib., pp. 81-84.
（四二）Cf. Ib., pp. 85-90.
（四三）拙著、前掲書、八五－八七頁参照。Cf. Ib., pp. 90-93.
（四四）同書、同頁参照。Cf. Ib., pp. 94-97. 渡辺、前掲書論文、二二八－二二九頁参照。
（四五）同書、九二頁参照。Cf. Ib., pp. 98-101.
（四六）同書、九五－九六頁参照。Cf. Ib., p. 102.
（四七）同書、二九四－二九五頁参照。Cf. Ib., pp. 103-104.
（四八）トレーズの内閣の参加等について、同書、一一三－一一三三頁参照。Cf. Ib., pp. 104-109. Cf. Kriegel,《Léon Blum et le Parti communiste》in Léon Blum, chef de gouvernement, FNSP, '68, Ib.,《Les communistes français et le pouvoir》, in M. Perrot et A. Kriegel, Le Socialisme et le Pouvoir, EDI, Paris, '68, Cf. Cahiers de l'Institut Maurice Thorez, juil. -sep. '66, Démocratie nouvelle, mai '66, Thorez, Fils du peuple, ES, Paris, '69（トレーズ、北原訳『人民の子』大月書店、七八年）、《Le Front populaire de 36 et l'action de Maurice Thorez》, cahiers de l'Institut Maurice Thorez, oct. '66, J. Berlioz,《Une leçon de l'expérience du Front populaire》, cahiers du communisme, jan. '48, pp. 78-81（共産党は、戦後初めて、党の自己批判であった、拙著、前掲書、一〇四頁参照。）, etc. 拙著、前掲書（4　コミンテルン）、一五〇－二〇九頁参照、石川捷治『コミンテルンの転換－第七回世界大会論ノート－』『法政研究』五一－三・四、三三－六二頁、八四年、同『ドイツ共産党の戦略転換過程－一九三五年～一九三九年－』同、五三－一、一二三－一六五頁、八六年（一九四四－四八年、ドイツ共産党の新戦略の大勢は、目下検討中）、同『統一戦線の史的発展論について覚え書－一九〇五年から今日まで－』五四－一、六九－一〇四頁、八七年等参照。
（四九）同書、七六頁参照。Cf. Ib., pp. 110-112.
（五〇）同書、同頁参照。Cf. Ib., pp. 112-115.
（五一）同書、九三頁参照。Cf. Ib., pp. 115-118.
（五二）同書、九四－九五頁、九九－一〇〇頁参照。Cf. Ib., pp. 118-123.
（五三）Cf. Ib., pp. 123-125. Cf. G. Lefranc, Histoire du Front populaire, Payot, Paris, '65, etc.
（五四）Cf. Ib., pp. 125-127.
（五五）Cf. Ib., pp. 127-128.

（五六）同書、八四－八五頁参照。Cf. Ib., pp. 128-132.
（五七）Cf. Ib., pp. 132-137.
（五八）同書、一三八－一三九、一二九－一三一、一三三－一三四頁参照。Cf. Ib., pp. 137-139.
（五九）Cf. Ib., pp. 139-142. 升味準之輔『比較政治　西洋と日本』東大出版会、九〇年、四七三頁参照。
（六〇）Cf. Ib., pp. 143-146.
（六一）Cf. Ib., pp. 146-152.
（六二）同書、九二－九五頁参照。Cf. Ib., pp. 152-161.
（六三）Cf. Ib., pp. 161-165.
（六四）Cf. Ib., pp. 166-170.
（六五）Cf. Ib., pp. 170-171.
（六六）同書、一〇〇頁参照。Cf. Ib., pp. 171-175.
（六七）同書、四四頁参照。Cf. Ib., pp. 175-179.
（六八）同書、一〇〇頁参照。Cf. Ib., pp. 179-181.
（六九）Cf. Ib., pp. 181-184. 渡辺、前掲書論文、二二九－二三一頁参照。
（七〇）斉藤、前掲書（反ファシズム運動㈢）、一〇一－一三六頁、拙著、前掲書、一〇一頁参照。Cf. Ib., pp. 186-188.
（七一）Cf. Ib., pp. 188-190.
（七二）Cf. Ib., pp. 190-194. Cf. Jackson, o. c., p. 226. 邦訳、二五八頁参照。
（七三）Cf. Ib., pp. 194-195.
（七四）Cf. Ib., pp. 195-198.
（七五）Cf. Ib., pp. 198-199.
（七六）Cf. Ib., pp. 199-201. 渡邊和行『不干渉政策の決定過程㈠㈡－ブルム内閣とスペイン内戦－』『香川法学』三－一、一二三－一七三頁、三－二、一－四三頁、八三年、同『不干渉とフランス世論一九三六－左翼政治集団の意見の形状－』同、四－一、一二三－一九三頁、同『同－右翼政治集団の意見の形状－』同、四－二、一〇九－一五七頁、八四年、品川徹『レオン・ブルムと『不干渉政策』の決定』『都立大法学会雑誌』二五－一、一二三－二二三頁、八四年、渡辺、前掲書論文、二三一－二三二頁等参照。

（七七）拙著、前掲書、一六四頁参照。Cf. Ib., pp. 202-203.
（七八）Cf. Ib., pp. 203-205.
（七九）Cf. Ib., pp. 205-206. 渡邊和行『人民戦線期の急進党一九三五―一九三六―二つの党大会から―』『香川法学』四―三、一五二―一八九頁、八五年等参照。
（八〇）Cf. Ib., pp. 206-210.
（八一）Cf. Ib., pp. 210-213.
（八二）Cf. Ib., pp. 213-215.
（八三）拙著、前掲書、一〇一頁参照。Cf. Ib., pp. 215-216.
（八四）同書、一〇二頁参照。Cf. Ib., pp. 216-219.
（八五）同書、同頁参照。Cf. Ib., pp. 219-220. 拙稿『〈史料紹介〉ブルム人民戦線内閣論の周りに㈠㈡』『法学論集』二四―一、二、七九―一二一、一一七―一六二頁、八八―八九年、竹岡敬温『第一次レオン・ブルム内閣の辞職』『大阪大学経済学』三六―一・二、二五一―二六七頁、八六年、向井喜典『戦間期フランス社会政策の転換点』、同『「フランス・ニューディール」政策における労働改革の位置』大阪経法大学経済研究所『研究年報』五号、八五年、一―一六頁、七三―七四頁、マルタン、向井訳『産業構造と連合政治と経済政策』同『経済研究年報』一一号、九二年、五八―九三頁、モーレ、振津訳『フランスにおける「実験」の一年ⅠおよびⅡ』、ロシター、向井訳『ブルム内閣と国民経済審議会と経済政策』同『経済研究年報』一二号、九三年、八六―一一七頁、一一九―一三七頁等参照。
（八六）Cf. Ib., pp. 220-222.
（八七）拙著、前掲書、四四―四五頁参照。Cf. Ib., pp. 222-225.
（八八）Cf. Ib., pp. 225-226.
（八九）同書、二六九―二七一頁参照。Cf. Ib., pp. 226-232.
（九〇）Cf. Ib., pp. 232-233.
（九一）Cf. Ib., pp. 223-224.
（九二）Cf. Ib., pp. 235-237. 渡辺、前掲書論文、二三二―二三三頁参照。
（九三）同書、一〇三頁参照。Cf. Ib., pp. 237-240.
（九四）Cf. Ib., pp. 240-243.

（九五）Cf. Ib., pp. 243-246.
（九六）同書、同頁参照。Cf. Ib., pp. 246-248.
（九七）Cf. Ib., pp. 248-251. 向井喜典『フランスにおける週四〇時間労働制問題―人民戦線期の社会政策の一断面―』四九―八八頁、創立二〇周年記念論文集発刊部会編『世界経済と日本経済』大阪経法大学出版部、九二年。
（九八）Cf. Ib., pp. 251-252.
（九九）Cf. Ib., pp. 253-254.
（一〇〇）拙著、前掲書、一〇三頁参照。Cf. Ib., pp. 255-257.
（一〇一）同書、二九四頁参照。Cf. Ib., pp. 257-259.
（一〇二）Cf. Ib., pp. 259-262.
（一〇三）同書、二一三―二一四頁参照。Cf. Ib., pp. 263-271.
（一〇四）Cf. Ib., pp. 271-272.
（一〇五）Cf. Ib., pp. 273-277.
（一〇六）Cf. Ib., pp. 277-279.
（一〇七）Cf. Ib., pp. 279-282.
（一〇八）同書、一〇三頁参照。Cf. Ib., pp. 282-285.
（一〇九）Cf. Ib., pp. 285-289.
（一一〇）Cf. Ib., pp. 289-291.
（一一一）Cf. Ib., pp. 291-292.
（一一二）Cf. Ib., pp. 292-293.
（一一三）Cf. Ib., pp. 293-294. 竹岡敬温『フランス人民戦線の最後』『大阪大学経済学』三七―二、八七年、一六―三五頁等参照。
（一一四）Cf. Ib., pp. 295-296.
（一一五）Cf. Ib., pp. 296-299.
（一一六）Cf. Ib., pp. 299-315.
（一一七）Cf. Ib., pp. 315-324.
（一一八）Cf. Ib., pp. 325-334.

（一一九）Cf. Ib., pp. 335-336. 斉藤、前掲書（反ファシズム運動㈠）、六五－一〇〇頁、岡本宏『統一戦線史序説㈣』『熊本法学』五〇号、八六年、一－五八頁、野地孝一『フランス人民戦線の崩壊－左翼議会連合の運命と政党体系の特質－』『思想』八〇年七月号、一五－三九頁、篠原一、「人民戦線－フランスの場合」『ヨーロッパの政治』東大出版会、三三七－三四六頁、Cf. J. Droz, Histoire de l'antifascisme en Europe 1923-1939, E. La Découverte, Paris, '85, pp. 7-24, 177-211, M. S. Alexander & H. Graham, The French and Spanish Popular Fronts Comparative Perspectives, CUP, '89, 邦訳、アレグザンダー、グラハム編、山口正之監訳『フランスとスペインの人民戦線－五〇周年記念・全体像比較研究－』大阪経法大学出版部、九四年等参照。

（一二〇）Cf. Ib., pp. 336-338. 広田功『フランス人民戦線の〈文化革命〉の一側面－有給休暇と〈余暇の組織化〉－』中央大学人文科学研究所編『希望と幻滅の軌跡　反ファシズム文化運動』中央大学出版部、八七年、一六七－一九六頁参照。

（一二一）拙著、前掲書、二六八－二六九頁参照。Cf. Ib., pp. 338-340.

（一二二）同書、二七五－二七六頁参照。Cf. Ib., pp. 340-343.

（一二三）Cf. Ib., pp. 343-346. 廣田、前掲書、三三四－三五八頁参照。

（一二四）Cf. Ib., pp. 346-347. 渡辺、前掲書論文、二三三－二三四頁等参照。

（一二五）Cf. Ib., pp. 348-354. 廣田、前掲書、三五八－三七六頁、同『フランス人民戦線期の「日常生活」－五〇周年記念集会をめぐって－』『社会経済史学』五四－六、七九－九八頁参照。

（一二六）Cf. Ib., pp. 355-357.

（一二七）Cf. Ib., pp. 357-360.

（一二八）Cf. Ib., pp. 360-364.

（一二九）Cf. Ib., pp. 364-367.

（一三〇）Cf. Ib., pp. 367-376. 中央大学人文科学研究所編、前掲書、二九－七四頁、J. P. A. Bernard, Le PCF et la Qustion Littéraire 1921-39, PUG, '72. 邦訳、J・P・ベルナール、杉村昌昭訳『フランス共産党と作家・知識人　一九二〇年～三〇年代の政治と文学』拓植書房、七九年、山口俊章『フランス一九三〇年代　状況と文学』日本エディタースクール出版部、八二年等参照。

（一三一）Cf. Jackson, o. c., p. 296. 邦訳、三三九頁参照。

付記

（一）主要参考文献は、A. Fourcaut, Banlieue rouge, 1920-1960: Années Thorez, Années Gabin, archétype du populaire, banc d'essai des modernités, Autrement, '92, P. Bourderel, La Cagoule: Histoire d'une société secrète du Front populaire à la Ve République, Nouv. éd., Michel, '92, CHIRM, Le PCF et l'Internationale de la déclaration de guerre à l'effondrement de la France (sep. 1939-août 1940), Sommaire n°52-53, '93, M. Sadoun, De la démocratie française: Essai sur le socialisme, Gallimard, '93, Bell, D. S. & Criddle, Byron, The French communist party in the fifth Republic, Clarendon P., UK, '93, 28e congrès du PCF, janv. 1994, Cahiers du communisme, 2-3, '94, CHIRM, Europe et Afrique, n°54, '94, CHIRM, Mouvement ouvrier et République, n°55, '94, etc. である。

（二）筆者は、今年、CRHMSS, Université de Paris I, Bulletin n°17, '93（パリ、一〇月二四日発信）を寄贈されている。フランス人民戦線の時期は、九三年中で二六種（博士論文六種、修士号論文二〇種）である。合計、外国で八九二種、国内で一、二四〇種、合わせて二、一三二種である（九四－一二－二六現在）。

追記

（一）（六）を補足、平瀬徹也『書評、廣田功著『現代フランスの史的形成－両大戦間期の経済と社会－』『現代史研究』四〇号、六九－七七頁、九四年。

（二）（一）を補足、藤村信、『パリ通信、過ぎゆかない過去〔上〕ミッテラン、ペタン、ドゴール』『世界』六〇六号、二二五－二三八頁、九五年三月号（九五－二－二一補注）。